設

社團法人 忠勇顯彰會編纂

支那事變 忠勇列傳

陸軍之部 第二卷

昭和十四年 帝國圖書館

本書第壹卷以下毎卷刊行ノ都度

天皇

皇后

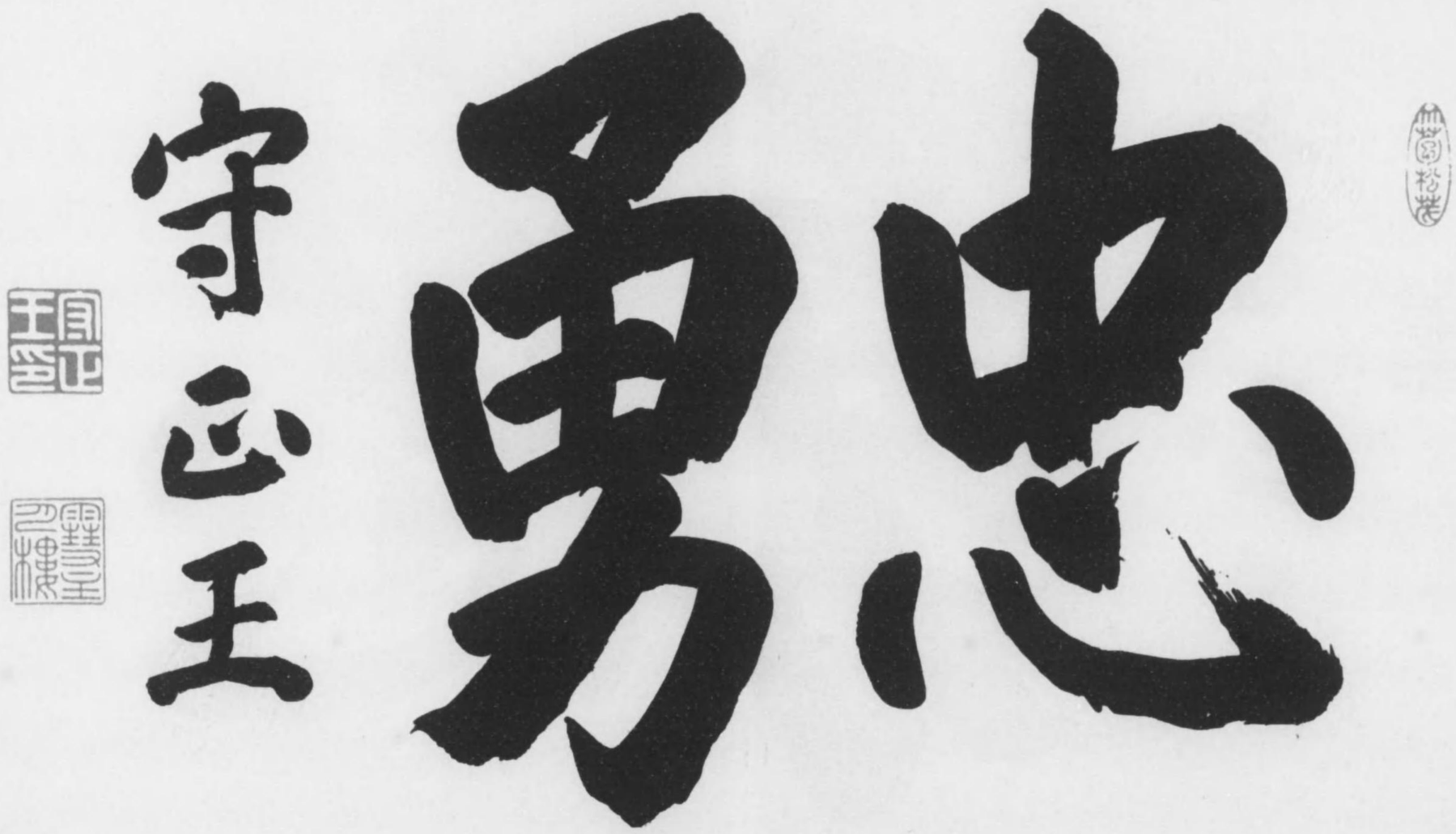
皇太后三陛下へ奉獻ノ儀願出デタル處御嘉納ノ御沙汰ヲ賜ハリタルニ付玆ニ謹記ス

尙　各宮殿下、王公族各殿下ニハ從來毎卷台覽ヲ賜ハリアリ

明治天皇御製

世と共に移り行くよの国民の
いかなる事を教へしか

侯爵伯爵東郷平八郎謹書



本會總裁　梨本宮守正王殿下御筆

元本會副總裁　侯爵　東郷平八郎閣下題字

流芽

子古

陸軍大臣　板垣征四郎閣下題字

板垣征四郎謹

海軍大臣　米内光政閣下題字

忠

烈

光

政

五

343
1

序

世界列國ノ生存競爭ハ前世紀以來頗ル激甚トナリ、優勝劣敗弱肉强食ノ勢ヲ馴致シ文化上、軍備上優越ナル歐米ノ壓力ハ滔々トシテ抵抗力ノ薄弱ナル亞細亞方面ニ侵襲シ來リ、支那大陸ノ如キモ其ノ北邊西境南域ハ既ニ久シキ以前ヨリ白人ノ蠶食スル所トナリ滿洲、朝鮮亦幾度カ危機ニ瀕ス。幸ニ之ヲ阻止シ現今ノ狀態ニ安定シ得タルハ、實ニ我ガ帝國ガ毅然トシテ其ノ肇國ノ大精神タル天業恢弘、皇道光被、八紘一宇ノ實現ニ基キ、國ヲ擧ゲテ東亞保全ノ支柱トナリ、東洋永遠ノ平和ノ爲メ幾度カ國運ヲ賭シテ聖戰ニ從事シタル結果ニ外ナラヌノデアル。

惟フニ今ヤ東亞ノ諸邦中其ノ主ナルモノハ日、滿、支三國デアル。而モ東亞ノ保全、東洋平和ノ維持ハ懸ツテ此等三國ノ緊密鞏固ナル團結ニ俟タサルヲ得ナイ。顧ミテ此ノ團結ノ中心タリ指導者タル可キ國家的實力ト文化トヲ有スルモノハ實ニ我ガ帝國アルノミ、況ンヤ此ノ三國ハ同種同文、地理的、歷史的、經濟的關係ニ於テ自然相互依存以テ大同團結ヲ成ス可キ運命ニアルニ於テオヤ。

然ルニ最近支那ノ支配者タル蔣介石政權ハ頑迷不靈ニシテ事理ニ暗ク徒ラニ自國領土ノ尨大ト人口ノ多衆トヲ恃ミ、以夷制夷ノ傳統的術策ヲ用ヒ、自己政權ノ維持ニ沒頭シ、陰ニ赤魔ノ蘇聯ト欵ヲ通ジ其ノ支持ヲ得、之カ代償トシテ險惡無道ナル思想ノ侵入

ニ便スル爲メ自國ヲ割イテ赤化ノルートヲ設定シ、又利ニ敏キ英米諸國ヲ誘ツテ東洋平和ノ礎石タル日本ノ高遠ナル理想ノ實現ヲ凡ユル手段ヲ以テ妨碍セント試ミルニ至ル、此等ノ結果ハ近年ニ至ツテ排日抗日ノ暴擧トナリ日支關係ハ刻々惡化シ遂ニ昨年七月七日北支蘆溝橋ニ於テ我ガ駐屯部隊ニ對シ不法發砲ヲ敢テシ、日支兩軍ノ間ニ戰端ヲ惹起シ、次デ八月九日上海西郊ニ於テ我ガ帝國海軍將校ノ殺害事件ヲ發生スルニ至レリ、事茲ニ及ンデハ多年隱忍自重只管東洋平和ノ維持ニ專念シタル我ガ帝國モ蹶然起ツテ頑迷ナル蔣政權並ニ其ノ容共抗日ノ兇逆分子ヲ徹底的ニ撲滅セザルヲ得ザルニ至リ、茲ニ暴支膺懲ノ一大聖戰ヲ起スノ已ムナキ立場ニナツタノデアル。

本聖戰ノ對象ハ固ヨリ支那一般民衆デハナイ、詭驕憎ム可キ共産主義ニ迎合シテ國民ニ誤マレル排日教育ヲ施シ之ヲ示唆シ煽動シテ飽クマデ親日ヲ阻マントスル蔣介石政權ヲ倒滅シ、之ニ阿附貪緣スル軍閥政客ヲ掃蕩シテ民生ヲ塗炭ヨリ救ヒ國際正義ニ立脚スル更正支那ヲ現出セントスルニアリ、惡政ニ喘ク四億ノ同種民族ニ對シテハ其ノ境地ヲ憐ミ扶掖ノ道ヲ竭ス可キハ事變當初ニ畏クモ降シ給ヘル御聖勅ニ昭々トシテ明カデアル。

開戰以來既ニ一年有餘、時恰モ炎熱燒クガ如キ夏季ヨリ祁寒骨ヲ刺スノ冬季ヲ通ジテ、我ガ陸軍ニ於テハ或ハ峻嶺堅砦攀登容易ナラザル山嶽戰ニ、或ハ泥濘膝ヲ沒シ障碍縱横進攻困難ナル局地戰ニ、或ハ荒天密雲ヲ衝ヒテノ空襲ニ、千辛萬苦ヲ意トセズ常ニ

寡ヲ以テ衆ヲ破リ、其ノ勇戰奮鬪ハ眞ニ鬼神ヲ泣カシムルモノガアリ、又海軍ニ於テハ陸戰隊ノ上海クリーク戰、支那沿岸ノ封鎖ヲ始メトシ或ハ渡洋爆擊制空權ノ獲得ニ、或ハ陸兵ノ上陸援護ニ或ハ長江作戰、粵漢線其ノ他ノ要地爆擊ニ常ニ萬難ヲ排シテ赫々タル偉勳ヲ奏シ、實ニ皇軍ノ威武ヲ中外ニ發揚シタモノデアル。

吾人銃後ノ國民ハ出征將帥ノ卓越ナル作戰指導ト戰線將士ノ熱烈ナル殉職精神ト其ノ勳功トニ對シ感激深謝ニ堪ヘナイ所デアッテ、特ニ其ノ殉難犧牲者ニ對シテハ深甚ノ同情ト哀悼ヲ禁ズル能ハザルモノデアル。

今ヤ北支一帶ニハ日章旗高ク飜リ、上海ノ堅壘、首都南京ノ金城湯池モ我ガ占有ニ歸シ、武漢三鎭ノ陷落亦タ目睫ノ間ニ迫ル、

然レドモ彼等ハ暗愚ニシテ未ダ覺メズ、二三野心國ノ賴ミ難キ後援ヲ夢ミ執拗ニモ長期抵抗ヲ繼續シツヽアリ、カクテ本聖戰ノ終局ハ果シテ何レノ日ナルカ未ダ逆睹シ難イモノガアル。唯大勢ハ既ニ定リ邪ハ遂ニ正ニ勝ツ可キデナイ、吾人ハ固ク必勝ノ信念ヲ以テ我カ　皇上ノ御稜威ノ下ニ外ハ出征將士ノ忠勇義烈ト內ハ銃後國民ノ忠誠奉公トガ終始一貫シテ速ニ蔣政權ノ壞滅ト親日防共ノ新支那政權建設ノ大目的ヲ達成シ、以テ東洋平和ノ永遠ノ安定ヲ見ルニ至ランコトヲ祈願シテ已マナイモノデアル。

我ガ忠勇顯彰會ハ日露戰役以來累次ノ國難ニ殉ジタル勇將猛兵ノ忠勇列傳ヲ各戰役每ニ編纂刊行シ、一ハ以テ此等殉難諸勇士ノ英靈ヲ長ヘニ弔スルト共ニ、一ハ其ノ忠勇義烈鬼神ヲ泣カシムル偉績ヲ顯彰シテ其ノ芳名ヲ千載ニ傳ヘ以テ後昆修養ノ亀鑑タラシメント期スルモノデアルガ、今次ノ支那事變ハ其戰域ノ廣大ナルト兵力ノ多衆トハ未曾有ト謂フ可ク、隨ツテ戰鬪ハ激甚ヲ極メ且ツ長期ニ亘ル關係上之ガ犧牲者ノ數モ頗ル多ク、現ニ開戰以來一年間ニ於ケル我ガ陸海將兵ノ戰死者ハ既ニ四萬ニ垂ントシ今後戰局ノ終結マデニハ果シテ幾何ニ達ス可キカ、固ヨリ豫想シ難ク隨ツテ之ガ列傳ノ編纂事業ノ前途ハ頗ル遼遠ナルヲ想ハシムルモノアルモ、元來此ノ種ノ精神的事業ニ從事シツヽアル、我等同人トシテハ事ノ難易ヲ超越シ一意全能力ヲ發揮シ萬難ヲ排シテ必ズヤ所期ノ目的ヲ完全ニ達成センコトヲ期シ且ツ誓フモノデアル。

幸ニ吾人ノ精神的努力ノ結晶タル本忠勇列傳ガ幾萬戰死者遺族

ノ慰問ノ一助トナリ神棚ニ記念的家寶トシテ長ヘニ光彩ヲ添ヘ以テ後昆子弟ノ感奮興起ノ資料タルヲ得バ本懷ノ至リデアル。

昭和十三年十月

忠勇顯彰會前會頭

陸軍大將　町田經宇

前會頭町田大將ハ去ル一月薨去セラレタリ。而シテ本序文ハ同大將ガ昨秋漢口攻略前病ヲ押シテ全然自ラ執筆セラレタルモノニ付遺稿トシテ特ニ本卷ニ掲グルコトトセリ

凡例

一、本書發行ノ目的並ニ本會ノ趣意概歴ハ序文及卷末ニ記載シアリ。

二、本卷ニハ昭和十三年四月二十三日第一回ニ行賞ヲ發表セラレタル陸軍戰歿殊勳者中ノ三百五十名ヲ登載セリ。

三、昭和十二年七月七日以降滿洲國ニ於テ匪賊討伐等ノ爲忠死シタル者ハ支那事變忠死者トシテ取扱ハレアルヲ以テ本書ニ掲載セリ。

四、本書傳記掲載順序ハ階級毎いろは順ニ依レリ。

五、傳記ニ多少精粗繁簡ノ別アルハ資料ノ多少ニ依ルモノニシテ資料ノ蒐集ニハ大ニ努力シタル所ナルモ遺憾ナカラ完キ

ヲ得サルモノアルハ洵ニ已ムヲ得サル所ナリ。

但シ本書中戰場ニ於ケル行動武勳ハ當局ノ特別許可ヲ得テ專ラ陸軍ノ調書ニ據リ記述セルモノナリ。

六、肖像掲載ナキモノハ乍遺憾終ニ寫眞ヲ蒐集シ得サリシモノナリ

七、部隊番號其他港灣出發地、上陸日次、地點等ノ軍機秘密保持ニ關係アル事項ハ之ヲ省略シ又部隊ハ當時ノ部隊長姓ヲ冠シテ表示セリ。

八、本書ハ非賣品ニシテ本書掲載ノ戰歿者全遺族各位ニ寄贈ノモノハ國民ノ熱誠ニ依ル陸海軍恤兵金ヲ以テ支辨セラレタルモノナリ茲ニ特記シ感謝ノ意ヲ表ス。

支那事變 **忠勇列傳** 陸軍之部 **第貳卷目次**

明治天皇御製

御題字

本會總裁 大勳位 梨本宮守正王殿下

題字

元本會副總裁 故侯爵 東郷平八郎閣下

陸軍大臣 板垣征四郎閣下

海軍大臣 米内光政閣下

一、序……前會頭故陸軍大將 町田經宇

一、凡例……一—二

一、索引……一—三

一、將校准士官之部……一—九五

一、下士官之部……九四―四〇三
一、兵　之　部……四〇三―一六九
一、忠勇顯彰會趣意概歴……末　尾

支那事變

忠勇烈傳　陸軍之部　第二卷

索引

（本索引ハ姓ノ發音ニ從ツテいろは順ニ排列シ捜査ノ便ヲ圖リテ假名遣ヲ正サス　るゐをハいえおノ部ニ敎メあうあふハおうニかうかふハこうノ部ニ改メタリ）

い

陸軍少將　井手龍男（福岡縣）　砲兵火力の運用卓越にして戰捷の途を拓く……一
歩兵大尉　石倉三郎（群馬縣）　遺憾なく機關銃威力を發揮し竟に敵地雷に斃る……二七
歩兵中尉　池淵輝久（島根縣）　機關銃小隊長として戰勝の途を拓く……四七
歩兵中尉　伊藤英市（島根縣）　企圖心旺盛一面人情味に富める小隊長……五〇
歩兵軍曹　石川昇（茨城縣）　典型的教育者分隊長として壯烈散華す……九六
歩兵軍曹　石平午太郎（長野縣）　輕機の威力を發揮し戰捷の途を拓く……九八
歩兵伍長　石倉要一（島根縣）　戰機に投じて難局に當り活躍せる分隊長……一七〇
歩兵伍長　石橋茂雄（鳥取縣）　上官を衰ひ尙奮戰敵陣を奪取す……一七二
歩兵伍長　今西捨吉（兵庫縣）　勇敢傳令の重任を果し敵彈に殪る……一七五
歩兵伍長　井上太郎（鳥取縣）　豪膽慧敏戰捷の途を拓く……一七七
歩兵伍長　今井宗之（德島縣）　優秀なる戰車操縱手、壯烈爆死を遂ぐ……一七九
歩兵伍長　猪ヶ倉正平（宮崎縣）　敵の堅陣を夜襲し第一線を突破して第二線に迫る……一八二

歩兵伍長　石塚　均（栃木縣）　重傷を負ひながら寡兵敵陣地に突入す……一八四
工兵伍長　石井　薫（岡山縣）　決死工兵戰鬪の特色を發揮す……一八六
歩兵上等兵　飯岡市郎（茨城縣）　勇敢なる小銃手陣内戰に奮鬪して斃る……四〇六
歩兵上等兵　飯田由雄（兵庫縣）　攻擊精神旺盛にして中隊戰勝の端を拓く……四〇八
歩兵上等兵　井田　稔（鳥取縣）　模範的散兵小銃手……四一〇
歩兵上等兵　井田芳峯（鳥取縣）　老練なる輕機關銃彈藥手積極的に活躍して戰勝の途を拓く……四一三
歩兵上等兵　井上龍登（廣島縣）　此父にして此子あり。左腕を切斷され尙奮鬪せる輕機關銃手……四一四
歩兵上等兵　井上　茂（大阪市）　剛膽一同を敬服せしめ死すとも銃把を離さず……四一七
歩兵上等兵　井上多一（東京府）　南滿險難山岳地に於て敵の意表に出て奇功を奏す……四一九
歩兵上等兵　井野清平（群馬縣）　敵十數名を刺殺して上官の危急を救ふ……四二一
歩兵上等兵　糸田勇治（群馬縣）　武技優秀偉功を樹て惜しくも空爆に斃る……四二三
歩兵上等兵　岩城正章（鳥取縣）　勇敢なる輕機彈藥手敵陣に突入手榴彈に斃る……四二五
歩兵上等兵　岩野　榮（岡山縣）　孝子。重傷を負ふも奮鬪以て主力の後退を掩護す……四二七
歩兵上等兵　岩楯善藏（東京市）　忠孝一途。苦戰の中に大隊砲の威力を發揚す……四二九
歩兵上等兵　石田利雄（兵庫縣）　決死報告の念横溢し每戰偉功を奏す……四三一
歩兵上等兵　石川　勇（栃木縣）　孤軍渡河點を死守し全軍の敵前渡河を容易ならしむ……四三三
歩兵上等兵　石原武夫（兵庫縣）　勇敢なる擔架兵其任に斃る……四三五
歩兵上等兵　石田憲一（兵庫縣）　沈着勇敢難局に當り戰勝の端を拓く……四三七
歩兵上等兵　石橋政男（栃木縣）　單身手榴彈を以て敵機關銃を撲滅し戰局を打開す……四三九
歩兵上等兵　石原利久（群馬縣）　良兵良民。小銃手として難局を打開し一隊の志氣を鼓舞す……四四一
歩兵上等兵　石岡佐市（岡山縣）　大敵を引受け奮戰格鬪遂に敵を擊退して斃る……四四三
歩兵上等兵　稻仲惣右衛門（兵庫縣）　難局に逢着するも勇戰し堅壘奪取の端を拓く……四四五
歩兵上等兵　池田三郎（茨城縣）　勇敢なる機關銃彈藥手……四四七
歩兵上等兵　磯貝德一（群馬縣）　勇敢なる輕機關銃手敵の戰車壕前に突擊の動機を作る……四四八
歩兵上等兵　市川孝之（山梨縣）　險難を冒して率先匪賊を血祭に上げ戰勝の端を拓く……四五〇
歩兵上等兵　猪下由太郎（大分縣）　至難なる狀況下に傳令及警戒勤務を全うす……四五二
工兵上等兵　石原勇助（新潟縣）　勇敢なる電信兵敵の奇襲に挺身小隊主力の行動を掩護す……四五四
輜重兵上等兵　今西種夫（大阪市）　自動車運轉手、難局に補結を全うし衆敵と鬪ひて斃る……四五六
輜重兵一等兵　今村永之助（兵庫縣）　衆敵に對し最後まで奮戰輸送物件を擁護せる特務兵……四六〇
輜重兵一等兵　井高三郎（兵庫縣）　大敵の奇襲に逃で突入輜重の華と散りし特務兵……四六一
輜重兵一等兵　井上典男（兵庫縣）　壯烈輜重の鑑、車輛監視特務兵大敵を擊退す……四六四
輜重兵一等兵　井上仙一（愛知縣）　熾烈なる投下爆彈を浴びつゝ泰然架橋材料を蒐集す……四六六
輜重兵一等兵　池田義高（福岡縣）　猛火を冒して彈藥を補給せる輜重の華……四六八

は

歩兵中尉　林　三平（大分縣）　重傷猶奮鬪し軍司令部の危急を未然に救ふ……三三
歩兵軍曹　長谷川直次（兵庫縣）　勇敢なる輕機關銃分隊長……一〇
騎兵伍長　羽富留吉（茨城縣）　斥候連絡兵として竟に其任に斃る……一八八
歩兵伍長　橋本泰介（熊本縣）　無電手寡兵克く衆敵を敗走せしむ……一九〇
歩兵伍長　秦谷竹一郎（兵庫縣）　猛火を冒して彈藥を補給し敵彈に斃る……一九三
歩兵伍長　橋爪正博（和歌山縣）　重傷に屈せず壯烈尙機關銃威力を發揮して斃る……一九五
歩兵伍長　林原小一（岡山縣）　歩兵砲決死小隊の一員として勇戰敵彈に斃る……一九七
歩兵伍長　馬場正四郎（群馬縣）　重傷に屈せず傳令の任を完うし更に奮戰を續けて敵彈に斃る……一九九
歩兵上等兵　橋塚朝造（和歌山縣）　優勢なる匪賊に包圍せられ最後迄奮戰し全員共に斃る……四五八
歩兵上等兵　原崎新次郎（鹿兒島縣）　沈勇克く率先堅壘に突入して戰勝の端を拓く……四六〇
歩兵上等兵　橋本國和（大阪市）　勇敢なる傳令共の任に斃る……四六三
歩兵上等兵　原　績（和歌山縣）　優勢なる匪賊に對し堅忍奮鬪任務に斃る……四六四
歩兵上等兵　原田貞一（兵庫縣）　身命を賭して彈藥を補給し所屬隊の危急を救ふ……四六六
歩兵上等兵　箱崎　貫（福島縣）　討匪戰に腹部に一彈を受けながらも尙突擊を敢行す……四六八
歩兵上等兵　萩原秀次（栃木縣）　攻擊精神旺盛克く戰勝の途を拓く……四七〇
輜重兵一等兵　橋本包平（山梨縣）　至誠任務に邁進して敵彈に斃れたる自動車運轉手……七七〇

に

歩兵少佐　西山喜代藏（鳥取縣）　模範中隊長。意見を具申し率先突擊戰捷の途を拓く……八
歩兵准尉　西脇雄一郎（和歌山縣）　突如優勢なる敵匪と會し全滅するまで奮鬪す……八九
歩兵伍長　西谷寅生（大分縣）　兄弟五人軍人、兄に劣らぬ働を爲さんと擲彈筒の威力を發揚し戰捷の端を拓いて斃る……二〇三
歩兵上等兵　西谷隆夫（兵庫縣）　寡兵克く敵の大逆襲を頓挫せしむ……四七二
歩兵上等兵　瓊井田義伊（栃木縣）　沈着機敏優秀なる機關銃射手……四七四
輜重兵一等兵　西村三郎（京都市）　險難の隘路に大敵と會し皇軍輜重の面目を完うして玉碎す……七五二

ほ

歩兵伍長　星　寅二（栃木縣）　優秀勇敢なる機關銃手大隊の渡河開始の動機を作爲す……二〇四
歩兵伍長　穗前　茂（兵庫縣）　攻擊精神旺盛なる擲彈筒分隊長堅陣突破の機を作る……二〇六
歩兵伍長　星山誠三（北海道）　沈着寡兵を以て衆敵を惱ませる機關銃手……二〇八
歩兵伍長　堀內龜一（福岡縣）　猛火を冒して傳令の重任を果し復命中敵彈に斃る……二一一
砲兵伍長　細田　勝（岐阜縣）　對空防衛中壯烈砲側に斃る……二一三
歩兵上等兵　細田朝雄（長野縣）　敵機關銃に肉薄手榴彈を以て之を撲滅し遂に敵彈に斃る……四七六
歩兵上等兵　堀內芳男（大阪府）　勇敢なる擲彈筒手戰勝の途を開拓す……四七八
歩兵上等兵　細谷春雄（兵庫縣）　勇敢なる小銃兵連續堅壘を突破す……四八〇
輜重兵一等兵　堀江富一郎（茨城縣）　忠誠なる輜重兵優勢なる敵の夜襲に奮鬪玉碎す……七五五

と

歩兵伍長　戸上照一（和歌山縣）滿匪の襲撃に悲壯の奮闘を續け斃る……二二五
歩兵伍長　戸田仁（岡山縣）毎戰奮闘壯烈銃を握りたるまゝ戰線の華と散る……二二七
歩兵上等兵　徳田鉄雄（岡山縣）重要なる偵察報告を終り歸途敵彈に斃る……四八二
歩兵上等兵　富田專造（大阪市）此の母にして此の子あり。忠勇義烈の擲彈筒手……四八四
歩兵上等兵　戸根孫市（和歌山縣）北滿の治安維持に隱れたる誠忠……四八七
歩兵上等兵　戸部勇（群馬縣）トーチカへ突入側防火器を撲滅す……四八九
歩兵上等兵　富田榮（栃木縣）勇敢なる小銃手大冊河渡河激戰に玉碎す……四九一
歩兵上等兵　砥石新次郎（長野縣）勇敢なる指揮班員銃劍を揮つて敵中に突進す……四九三
歩兵上等兵　徳原三郎（鳥取縣）溫厚にして剛勇なる輕機彈藥手任務を完遂して斃る……四九五
歩兵上等兵　洞口春吉（宮城縣）敵の逆襲に率先重要地を占領し所屬隊の戰鬪を有利に導く……四九七
歩兵上等兵　土井忠夫（宮城縣）電信兵敵の奇襲を受け身を殺して部隊主力の行動を容易ならしむ……四九九

ぬ

歩兵上等兵　沼部重夫（栃木縣）決死敵前に地形を報告し中隊を危難より脫せしむ……五〇二

お

歩兵少佐　尾畑俊夫（岐阜縣）旺盛なる攻擊精神寡兵衆敵を破る……一一
砲兵中尉　岡崎宏夫（山口縣）俊敏なる觀測小隊長敵襲を受け悲壯の戰死を遂ぐ……五五
歩兵少尉　小野四郎一（大分縣）寡兵敵の出擊部隊を擊攘奪取陣地を確保す……八二

砲兵曹長　奥村正一（岡山縣）寡兵を指揮し群敵と抗戰我が砲廠を確保す……九四
歩兵軍曹　大森鶴松（兵庫縣）沈着勇敢なる路上斥候長……一〇三
砲兵軍曹　大野信行（埼玉縣）優秀なる觀測掛下士諸元を報告して瞑す……一〇四
歩兵伍長　岡本繁一（兵庫縣）寡兵衆敵と抗戰死の斷末魔軍旗護衛の大任を忘れず……二一九
歩兵伍長　大野政男（栃木縣）分隊長代理として敵前渡河一番乘りの勇士……二二四
歩兵伍長　大村立人（岡山縣）勇敢なる砲手病軀を押して奮闘玉碎す……二二五
歩兵伍長　尾谷重巳（兵庫縣）張新庄掃蕩戰に得意の銃劍術を發揮し敵二名を刺殺す……二二八
歩兵伍長　大武等（栃木縣）勇敢機敏なる輕機銃手堅陣奪取の途を拓く……二三〇
歩兵上等兵　荻野祐一（埼玉縣）勇敢適時彈藥を補充し輕機の危機を脫せしむ……五〇四
歩兵上等兵　大西秋義（愛媛縣）勇敢なる小銃手……五〇五
歩兵上等兵　大上市郎（兵庫縣）勇敢忠實傳令勤務に斃る……五〇七
歩兵上等兵　大北一二（兵庫縣）豪膽機敏戰機に投じて偉功を奏ず……五〇九
歩兵上等兵　大橋一郎（鳥取縣）慧眼戰機に投合して積極的に任務を遂行す……五一一
歩兵上等兵　大石弘明（大阪府）輕機彈藥手斃れても尙自己の職責に專念す……五一三
歩兵上等兵　大輪厚美（長野縣）勇敢機敏の擲彈筒手敵の狙擊に斃る……五一五
歩兵上等兵　大村武（大阪府）勇敢なる輕機關銃手銃と共に敵砲彈に斃る……五一七
歩兵上等兵　大川一男（兵庫縣）勇猛果敢なる輕機關銃手……五一九

歩兵上等兵　大門佐太郎（大分縣）　攻撃精神旺盛なる後備兵大敵を撃攘して職に殪る……五二一
歩兵上等兵　奥野大介（滋賀縣）　彈雨下に敵の伏兵を捜索して友軍の危急を救ふ……五二三
歩兵上等兵　岡義長（佐賀縣）　重傷を負ふも尚任務を完遂し分隊長を激勵して瞑ず……五二五
歩兵上等兵　岡崎香（兵庫縣）　沈着勇敢なる輕機關銃彈藥手、小隊の戰鬪を有利に導く……五二七
歩兵上等兵　岡崎綱技（岡山縣）　慧敏剛膽なる斥候克く夜襲成功の動機を作る……五二九
歩兵上等兵　岡田親司（兵庫縣）　重傷を負ふも尚手榴彈を以て奮鬪せる彈藥手……五三一
歩兵上等兵　小河佐一（兵庫縣）　勇敢なる彈藥手重機の威力を遺憾なく發揮せしむ……五三三
歩兵上等兵　男澤正司（宮城縣）　揚高城突撃決死隊の一員……五三五
歩兵上等兵　尾暴竹治（和歌山縣）　決死樓門を破壊して敵匪殲滅の端緒を拓く……五三七
騎兵上等兵　奥村富男（愛知縣）　戰線に於ける傳令の責任を果して戰鬪加入の際殪る……五三九
砲兵上等兵　大財卓（愛媛縣）　望兎山附近砲兵隊の危急を救ふて斃る……五四一
砲兵上等兵　大塚喜太郎（福岡縣）　勇敢機敏なる砲兵殿者……五四三
工兵上等兵　大久保定義（香川縣）　勇敢なる通信兵……五四五

わ

歩兵上等兵　渡邊繁一（兵庫縣）　優勢なる敵の逆襲に奮鬪玉碎せる輕機關銃手……五四七
工兵上等兵　渡邊勘治（新潟縣）　壯烈敵火の下に鐵橋修理中敵迫撃砲彈に殪る……五四九

か

歩兵中尉　加守茂（徳島縣）　敵襲を受けながら通信網を確保す……六八
歩兵中尉　狩谷平司（茨城縣）　斃れて尚已まず分隊長に軍刀を與へて敵陣奪取を激勵す……六一
砲兵中尉　茅根寛二（茨城縣）　難局下に連絡を確保し大隊をして危機を脱し部隊集結を了せしむ……六三
歩兵少尉　加納俊次（兵庫縣）　壯烈な模範的歩兵砲小隊長……六六
歩兵軍曹　勝田一（兵庫縣）　優秀なる分隊長敵の奇襲に玉碎す……一〇七
歩兵軍曹　垣内孝（岡山縣）　企圖心旺盛、中隊の苦境を打開す……一〇九
歩兵軍曹　上山樟太（岡山縣）　壯烈、死を以て父の教訓を守る……一一一
歩兵軍曹　加藤次郎（兵庫縣）　決死傳令遂に戰捷の途を拓く……一一四
歩兵伍長　鎌谷清一（鳥取縣）　迫撃砲決死小隊に加り戰勝の道を拓いて殪る……二二三
歩兵伍長　梶川正信（島根縣）　重傷を受けながら手當を固辭し尚戰線に留まらんとす……二二四
歩兵伍長　笠井秋吉（長野縣）　勇敢なる機關銃彈藥手、責任遂行の模範……二二六
歩兵伍長　賀内四郎（兵庫縣）　敵を見て益々勇む輕機關銃名射手……二二八
歩兵伍長　加藤茂一（愛知縣）　物資調査に航行中敵襲を受け最後迄奮戰全員枕を並べて殉職す……二四一
歩兵伍長　神山進一（群馬縣）　死地に入りて彈藥を補充し部隊の危急を救ふ……二四三
歩兵伍長　川口吾市（兵庫縣）　兄は臺灣に弟二名は聖戰に奮鬪す……二四五
工兵伍長　龜若勇（岡山縣）　決死工兵掃蕩班組長として勇戰して斃る……二四七
歩兵上等兵　加藤義定（新潟縣）　奮戰敵數名を刺殺して集團地雷に爆死す……二五一

歩兵上等兵　川原貞一（長野縣）　勇敢なる輕機關銃手中隊の苦戰打開の途を拓く……五五三
歩兵上等兵　川口彌一郎（大阪市）　致命傷を受け尙闘志を失はず……五五六
歩兵上等兵　川西孫平（鹿兒島縣）　一度奪取したる地をば重傷を負うも退かず……五七七
歩兵上等兵　河西佐治郎（茨城縣）　永定河畔の斬込斥候奮戰重要據點を占領す……五六〇
歩兵上等兵　河村祐里（愛媛縣）　潜伏警戒兵、敵の逆襲に猛然手榴彈を投じて斃る……五六二
歩兵上等兵　桂長次郎（兵庫縣）　側方に於ける敵の逆襲を阻止して中隊の突擊を容易にす……五六四
歩兵上等兵　鏑形荒壽（千葉縣）　壯烈數回に亘り敵の逆襲を阻止して玉碎せる機關銃手……五六六
歩兵上等兵　紙谷一太郎（東京市）　勇猛精悍なる小銃手長城線敵陣に肉薄して斃る……五六九
歩兵上等兵　金子正雄（埼玉縣）　勇敢且武技精到にして寡兵克く大敵を拒止す……五七一
歩兵上等兵　鵜井富久雄（大阪市）　適時勇敢に機關銃彈藥を補充し我が迂廻運動を容易にす……五七三
砲兵上等兵　金子哲夫（福岡縣）　斃れて尙轡を放たざる勇敢なる彈藥馬馭者……五七五

よ

砲兵中尉　義宮實三（山口縣）　老練なる砲車小隊長として勇戰奮鬪す……六五
歩兵伍長　吉久榮一（兵庫縣）　勇敢なる分隊長代理戰捷の途を拓く……二四九
歩兵伍長　横山實（宮崎縣）　勇敢にして立派な覺悟の分隊長……二五二
歩兵伍長　吉本春治（兵庫縣）　勇敢なる輕機關銃手小隊戰捷の途を拓く……二五四
歩兵上等兵　吉川初男（大阪市）　勇敢なる彈藥手愛馬と共に仆る……五七六
歩兵上等兵　米田繁男（兵庫縣）　輕機關銃彈藥手決死架橋班掩護に斃る……五七八
歩兵上等兵　横田耕一（新潟縣）　寡兵克く敵の逆襲を阻止して斃る……五八一
歩兵上等兵　吉田菊二郎（東京市）　勇敢なる機關銃手慘烈なる戰況下に任務を全うす……五八三
歩兵上等兵　吉田繁一（兵庫縣）　勇敢なる擲彈筒手奮戰中隊の突擊を容易ならしむ……五八五
歩兵上等兵　吉谷精一（兵庫縣）　壯烈十數倍の敵逆襲を受け奮戰玉碎す……五八六
輜重上等兵　吉田春次（愛知縣）　壯烈優勢なる敵の襲擊に遭ひ奮戰玉碎せる輜重……五八八
衛生兵上等兵　横堀正好（群馬縣）　重傷を負ひながら手當を固辭して他の重傷者を先にせんことを叫べる衛生兵……五九〇

た

歩兵中佐　竹島響一（山口縣）　萬難を排して患者輸送を完ふし自ら偵察に任じて敵彈に斃る……五
歩兵少佐　高木三郎（德島縣）　壯烈機關銃中隊長として玉碎す……一四
歩兵少佐　田邊政二（福井縣）　旺盛なる企圖心戰捷の途を拓く……一六
歩兵大尉　田村房夫（山口縣）　壯烈工兵の鐵門爆破に肉接して突擊を敢行す……二九
歩兵軍曹　田村敏夫（山口縣）　至忠至孝、勇敢なる分隊長……一二六
歩兵軍曹　高木茂（兵庫縣）　壯烈斃れて後も敵情捜索の眼鏡を離さず……一二八
歩兵軍曹　高橋重夫（兵庫縣）　勇敢なる擲彈筒分隊長……一三〇
工兵軍曹　高崎勝藏（茨城縣）　瀕死の重傷を負ひながら部下を激勵突入せしむ……一三三
砲兵軍曹　高山實（山口縣）　上官の危急を救はんとして敵彈に斃る……一三六

歩兵伍長　高橋好一（群馬縣）　温厚の士澤畔店の夜襲に殊勳を樹つ……二五七
歩兵伍長　田邊喜三郎（大阪府）　孝行。勇敢なる輕機關銃彈藥手……二五九
歩兵伍長　高岡一市（岡山縣）　決死隊に加はり壯烈なる決意を爲し奮鬪して其任に殪る……二六二
歩兵伍長　田野井太重（栃木縣）　壯烈敵前渡河掩護の重任を果して殪る……二六四
歩兵伍長　田村金次郎（北海道）　江灣鎭激戰に悲壯傳令勤務の犧牲となる……二六六
歩兵伍長　田中實（鳥取縣）　勇敢なる機關銃分隊長突擊復行の動機を作る……二六九
歩兵伍長　高橋松雄（群馬縣）　三度事變に出征竟に彰德城外の華と散る……二七一
砲兵伍長　竹本三佐治（愛知縣）　敵機襲來時守地を離れず其の任に殪る……二七四
歩兵上等兵　高井重彦（兵庫縣）　激戰に死するも機關銃を放さず……五九三
歩兵上等兵　高島知之輔（栃木縣）　壯烈敵前渡河を敢行して敵陣に玉碎す……五九五
歩兵上等兵　高木市次（兵庫縣）　勇敢なる小銃兵王美合の華と散る……五九七
歩兵上等兵　高木實（兵庫縣）　沈着剛膽なる小銃手屢々難局に奮鬪して職に殉ず……五九九
歩兵上等兵　竹內龜三郎（岡山縣）　彈雨下に屢々重要命令を傳達して戰捷の礎石となる……六〇一
歩兵上等兵　竹內郁二（兵庫縣）　壯烈優勢なる敵の逆襲に遭ひ奮戰斃れて尙銃を離さず……六〇三
歩兵上等兵　竹田清則（宮崎縣）　壯烈敵の十字火を浴びて突擊中に玉碎す……六〇五
歩兵上等兵　竹田喜市（島根縣）　勇敢なる小銃手、挺身、奮戰中隊の前進を容易ならしむ……六〇七
歩兵上等兵　田谷作市（茨城縣）　沈着剛膽克く敵前渡河を成功せしめた小銃手……六〇九
歩兵上等兵　田中清志（鹿兒島縣）　孤獨清く一身を君國に捧げて壯烈玉碎す……六一一
歩兵上等兵　田中一二三（長野縣）　勇敢傳令の重任を果し復命せんとする刹那敵彈に殪る……六一三
歩兵上等兵　田淵鐵尾（岡山縣）　勇敢なる彈藥手好機に決死彈藥を補充す……六一五
歩兵上等兵　舘野初一（栃木縣）　壯烈敵陣に肉薄し數彈を受けて玉碎す……六一七
歩兵上等兵　多田喜三（兵庫縣）　輕機關銃の威力を發揚し戰捷の途を拓く……六一九
歩兵上等兵　立石幸一（岡山縣）　壯烈決死奮鬪せる輕機關銃手……六二一

つ

歩兵上等兵　月岡三男（長野縣）　勇敢なる小銃手敵陣に突入して手榴彈に殪る……六二三
歩兵上等兵　釣本爲一（和歌山縣）　壯烈決死隊に加はり敵陣突入の魁けをなす……六二五

ね

歩兵上等兵　根岸秀男（和歌山縣）　匪賊重圍の中に奮鬪職に殉ず……六二七

な

歩兵大尉　中島覺（大分縣）　遭遇戰に機先を制し克く戰捷の途を拓く……二三
歩兵大尉　中村佐平（長野縣）　猛烈果敢の突擊を以て戰捷の途を拓く……二六
歩兵中尉　長瀨茂（島根縣）　斥候として敵陣內に潛入偉功を樹て更に奮戰戰捷の途を拓く……六八
歩兵軍曹　中村陸三（廣島縣）　攻擊精神旺盛勇敢なる分隊長……一二八
砲兵軍曹　長瀨唯義（高知縣）　瀕死の重傷尙火砲及部下を思ふ……一三〇

歩兵伍長　中井秀雄（岡山縣）　勇敢なる輕機彈藥手、決死中隊に屬し敵前渡河戰捷の途を拓く……二二五
歩兵伍長　永富喜代春（兵庫縣）　泥中に夜襲奪戰せる勇敢なる分隊長……二七八
歩兵伍長　中新武夫（岡山縣）　勇敢なる擲彈筒手……二八〇
歩兵伍長　南條英雄（岡山縣）　勇戰負傷し死期迫るも尙中隊長の仇を討たんとす……二八三
歩兵伍長　中山實（茨城縣）　王谷莊の激戰に勇戰敵數名を屠る……二八五
歩兵伍長　雛波賢一（岡山縣）　勇敢なる擲彈筒手獨斷奮鬪中隊突擊の動機を作る……二八七
歩兵伍長　中島辨次（佐賀縣）　勇敢精鋭なる輕機銃手……二八九
歩兵上等兵　中山作衛（愛知縣）　孤軍敵の重圍の中に皇軍の意氣を示して全員玉碎す……六二九
歩兵上等兵　中山良三郎（栃木縣）　名擲彈筒手克く吾敵前渡河を掩護す……六三一
歩兵上等兵　中田實（鳥取縣）　攻擊精神旺盛なる擲彈筒手……六三三
歩兵上等兵　中谷順治（兵庫縣）　擲彈筒手獨斷以て中隊の前進を容易にす……六三五
歩兵上等兵　中川源一（鳥取縣）　敵前水濠中に橋梁を修理して小隊の突擊に資す……六三七
歩兵上等兵　中島國袈裟（鹿兒島縣）　勇敢機敏の機關銃手敵の機先を制して戰捷の途を拓く……六三九
砲兵上等兵　長畑豐（岡山縣）　勇敢なる步砲兵連絡觀測班通信手……六四一
輜重上等兵　中川鹿榮（鹿兒島縣）　默々職責に邁進し且輓馬の危急を救ふ……六四四
輜重兵一等兵　中林猿三（兵庫縣）　大敵に前路を遮斷せられ身を殺して彈藥を守る……七五七

む

歩兵伍長　村上藤吉（栃木縣）　壯烈優勢なる敵の包圍下に奮戰して斃る……二九一
歩兵伍長　村木理三郎（秋田縣）　勇敢なる機關銃手小隊長の危急を救はんとして壯烈の死を遂ぐ……二九三
工兵上等兵　村上勇（岡山縣）　剛膽機敏なる火焰手敵の側防機關銃を撲滅す……六四五
輜重兵一等兵　村中介二（石川縣）　危險と疲勞困憊を制して器材を運搬し蘇州河の通過を繼續せしむ……七五九
輜重兵一等兵　村田不二雄（石川縣）　壯烈勇敢特務兵の範……七六一

う

歩兵中尉　內田滿（岡山縣）　敵トーチカ陣地に對し決死の突擊を行ふ……七二
歩兵准尉　上田福治（兵庫縣）　指揮機關長として勇戰奮鬪す……九一
歩兵軍曹　內村博（長野縣）　身二彈を受けながら死鬪す……一三四
歩兵伍長　植田留夫（兵庫縣）　勇敢なる通信手……二九五
歩兵伍長　上田和吉郎（兵庫縣）　姙官庄攻擊に突擊の動機を作爲せし勇敢なる輕機名射手……二九八
衛生兵伍長　雉氷道男（群馬縣）　衛生兵として責任觀念旺盛壯嚴敬虔なる臨終……三〇〇
步兵上等兵　梅田勇（兵庫縣）　勇敢機敏なる小銃手敵監視兵を刺殺して中隊の企圖を秘匿す……六四八

の

砲兵中尉　野崎章（岐阜縣）　勇敢なる砲兵連絡將校……七四
步兵伍長　野城源祐（群馬縣）　勇敢敵陣に突入更に敵の逆襲を擊退して敵の空爆に斃る……三〇二
步兵伍長　則本忠男（岡山縣）　勇敢精鋭なる步兵砲手……三〇四

歩兵上等兵　野口増吉（愛知縣）　敵前上陸戰鬪に忠實勇敢なる擔架兵の活躍……六四九

く

騎兵中尉　倉本林藏（鳥取縣）　斥候として重要なる報告を齎らし且奮戰す……七六
歩兵軍曹　黒崎正雄（栃木縣）　重傷を負ひながら寡兵克く奮鬪す……一三七
歩兵伍長　郡司義雄（茨城縣）　重圍の中に奮戰敵十數名を斃す……三〇七
歩兵伍長　久保武雄（兵庫縣）　猛射を逞しうする敵重火器を發見撲滅して我前進を容易にし小隊長に代つて突擊す……三〇八
歩兵伍長　國鹽唯二（岡山縣）　忠烈勇敢の砲手。此母にして此子あり……三一一
歩兵伍長　黒田正三郎（茨城縣）　成熟せる武技克く主力の翼側を安泰ならしむ……三一三
歩兵伍長　熊倉宗内（栃木縣）　勇敢且武技優秀にして戰捷の途を拓く……三一五
砲兵伍長　窪政高（愛媛縣）　火砲と運命を共にすべく最後迄奮鬪兩足を失ひ斃る……三一八
歩兵上等兵　久保徹（群馬縣）　勇敢なる輕機關銃手投下爆彈に斃る……六五二
歩兵上等兵　栗脇才二（鹿兒島縣）　敢の包圍を受けつゝ沈着勇敢警備を完うす……六五四
歩兵上等兵　楠見進（茨城縣）　突擊を反覆し挺身奮鬪中隊勝捷の途を拓く……六五五

や

歩兵伍長　山本健一（靜岡縣）　滿洲討匪に勇敢敵の側背を衝き擊退す……三三〇
歩兵伍長　山本鶴惠（岡山縣）　勇敢機敏、責任觀念旺盛なる迫擊砲手……三三三
歩兵伍長　矢野正治（栃木縣）　鐵條網を破壞して敵陣に突入數名を斃し負傷尙奮鬪を續く……三三四
歩兵伍長　山口弘一（北海道）　道路修築中優勢なる敵の包圍攻擊を受け重傷を負ふて尙奮戰す……三三六
歩兵伍長　山田丈夫（兵庫縣）　急迫せる戰況下に奮鬪竟に敵彈に斃る……三三八
歩兵伍長　山本正市（兵庫縣）　機敏勇敢なる輕機關銃手……三三〇
歩兵伍長　山下豐一（兵庫縣）　勇敢精鋭なる小銃手……三三三
歩兵伍長　山下晉一（大阪府）　熱勢機敏中隊戰捷の途を拓きし喇叭手……三三四
砲兵伍長　山崎正一（鳥取縣）　砲兵中隊敵襲を受け中隊以下最後迄奮鬪す……三三七
工兵伍長　山本佐一（岡山縣）　苑平縣城居庸關爆破勇士更に忻口鎭に敵手榴彈巢を爆破す……三三九
工兵伍長　山本一夫（岡山縣）　勇敢門橋の分離を防ぎ重砲輸送を完うす……三四一
歩兵上等兵　山田藤左衛門（兵庫縣）　北滿に於て交戰中の友軍に連絡中匪彈に斃る……六五七
歩兵上等兵　山根松治（兵庫縣）　剛膽果敢なる擲彈筒手我が作業班の前進を援助し作業を遂行せしむ……六五九
歩兵上等兵　山本政市（岡山縣）　夜襲の際に於ける勇敢なる連絡兵……六六一
輜重兵一等兵　矢野稔（愛媛縣）　敵の猛烈なる砲擊下に馬匹を擁護し守地を離れず……六六三

ま

歩兵軍曹　松下好三郎（鳥取縣）　勇敢精鋭なる分隊長……一三九
歩兵軍曹　松本米二（兵庫縣）　豪膽機敏堅陣を突破す……一四三
歩兵伍長　松谷貞雄（島根縣）　分隊獨斷突入中隊の突擊を誘起す……三四三
歩兵伍長　松田潔（鳥取縣）　勇敢精鋭なる皇軍歩兵……三四五

歩兵伍長　松井寅一（大阪市）　眞の良兵良民壯烈傳令の重任を果して斃る……二四七
歩兵伍長　松村好（宮崎縣）　敵の猛攻に沈着、勇猛奪取陣地を補強死守す……三四九
歩兵上等兵　牧本壽美男（岡山縣）　此の親にして此の子あり。苦戰に際し決死敵の側防機關に飛入る……六六三
歩兵上等兵　松村昇（東京市）　數次の敵逆襲に死を以て城壁一角を確保す……六六六
歩兵上等兵　增子勝一（茨城縣）　勇猛果敢敵機關銃を撲滅すべく躍進中敵彈に斃る……六六八
歩兵上等兵　松本軍治（栃木縣）　勇敢なる輕機關銃手……六七一
歩兵上等兵　松浦松夫（島根縣）　一身を以て輕機を擁護し戰機に投じて其全威力を發揚す……六七二
輜重兵一等兵　前田榮一（兵庫縣）　傷つくも尙大敵と奮鬪し輸送彈藥を擁護せる輜重兵……七六五

ふ

工兵少佐　藤原桂一郎（岡山縣）　洛陽湖水上輸送中悲壯なる戰死を遂ぐ……二〇
歩兵大尉　藤井進（鳥取縣）　壯烈滄縣主陣一番乘りの功を樹つ……二九
歩兵軍曹　福田茂治（鳥取縣）　猛烈たる敵彈下に傳令の重任を果たす……一四三
砲兵軍曹　福原準平（愛知縣）　分隊長として克く重砲最大威力を發揚して斃る……一四五
歩兵伍長　藤澤小市（兵庫縣）　勇敢に夜襲突擊し敵數人を刺殺す……三五二
歩兵伍長　福江喜八（熊本縣）　南苑攻擊の勇士……三五四
歩兵上等兵　福田政見（兵庫縣）　敵直前の水濠偵察を果して敵の狙擊に斃る……六七四
歩兵上等兵　深津重陽（廣島縣）　優秀なる擲彈筒手戰勝の途を拓く……六七七
歩兵上等兵　藤原辰雄（兵庫縣）　歩兵砲の模範觀測手……六七九
歩兵上等兵　福島次郎（兵庫縣）　適時勇敢に彈藥を補充し第一戰の戰鬪に支障なからしむ……六八一
歩兵上等兵　舟橋久治（茨城縣）　敵の側背に迫り大隊戰捷の端を拓く……六八三

こ

歩兵伍長　小林惣吉（群馬縣）　獨斷敵機關銃を奇襲して中隊の前進を容易ならしむ……三五六
歩兵伍長　小岩繁晴（長野縣）　保定攻擊に於ける勇敢なる重機關銃手……三五八
工兵伍長　小林嘉久三（群馬縣）　他兵科の協力の爲犧牲的に活躍奮鬪の上南京雨花門の華と散る……三六〇
歩兵上等兵　合田正明（大阪市）　猛火を冒して敵情を搜索し戰勝の端を拓く……六八四
歩兵上等兵　小林周藏（東京市）　勇敢なる機關銃彈藥手……六八六

え

木工軍曹　海老ヶ瀬虎三（京都市）　瀕死の重傷を負ひ尙彈藥補給を叶ふ……一六〇

て

輜重兵軍曹　寺村集藏（東京市）　輜重として優勢なる敵の奇襲に自ら自動車を燒却して斃る……一四七
歩兵伍長　寺島龜種男（兵庫縣）　慧敏豪膽克く斥候連絡の責任を完うす……三六三

あ

歩兵伍兵　赤尾杉武（茨城縣）　歩兵砲手衆敵の逆襲を受け奮戰力鬪敵中に斬り込み斃る……二三一
歩兵伍長　阿部義一（栃木縣）　勇敢機敏なる擲彈筒觀測手……三六四

歩兵伍長　有馬純信（鹿兒島縣）萬難を排して敵陣に突入壯烈なる戰死を遂ぐ……三六七
歩兵伍長　阿部桂助（北海道）單身敵圍壁に肉薄手榴彈を以て渡り合ふ……三六八
歩兵上等兵　赤穗宗次（兵庫縣）豪膽沈着なる小銃手克く膠着せる戰況を打開す……六八九
歩兵上等兵　明石芳次（歩庫縣）剛膽勇敢進んで難局に奮鬪玉碎す……六九一
歩兵上等兵　相澤忠平（栃木縣）傳令の重任を果して歸途敵彈に斃る……六九三
歩兵上等兵　青木幾藏（東京市）勇敢機敏なる擲彈筒手長城戰の夜襲に散華す……六九五

さ

歩兵少佐　齋藤勝司（神奈川縣）壯烈、敵前渡河掩護に苦戰奏功す……二三
歩兵軍曹　坂下勇（兵庫縣）勇敢機敏なる斥候長……一五一
歩兵伍長　酒井政一（岡山縣）殘留を屑しとせず足痛を忍びて戰線に奮鬪す……三七〇
歩兵伍長　佐藤修（栃木縣）積極果敢屍を以て敵銃眼を掩ひ戰捷の素因を作る……三七二
歩兵伍長　坂入子之藏（栃木郡）亂戰中に大隊本部の孤立を救ふ……三七四
砲兵伍長　佐藤秀次（靜岡縣）猛火の下沈着諸元の決定及重要敵情を發見せる重砲觀測手……三七六
工兵伍長　佐野留吉（神奈川縣）身を以て後方重要交通路を確保す……三七八
衞生兵伍長　齋藤賢（長野縣）激戰中衞生兵として勇敢職に殉ず……三八〇
歩兵上等兵　笹沼勝夫（栃木縣）適時敵情を報告し渡河掩護小隊をして其任を完うせしむ……六九六
歩兵上等兵　櫻井市三（茨城縣）忠孝一途の模範兵父の訓諭に中隊長の身代となり斃る……六九八
歩兵上等兵　坂上勇吉（和歌山縣）精鋭なる擲彈筒手勇戰克く十倍の敵を擊破す……七〇一

き

工兵軍曹　岸田伊三男（鳥取縣）勇敢傳令の重任を果たし歸途敵彈に斃る……一五三
歩兵上等兵　木村十七次（兵庫縣）敵の大逆襲に沈着勇敢に行動中隊の危急を救ふ……七〇三
歩兵上等兵　木村新次（大阪市）上官思ひの忠誠勇武の士將兵間の美談となる……七〇五
歩兵上等兵　北作治（兵庫縣）決戰期に側方敵の逆襲を拒止して中隊の突擊を可能ならしむ……七〇八
歩兵上等兵　北村勝（兵庫縣）壯烈決死隊に加はり德州城壁一角を奪取す……七一〇
歩兵上等兵　北村吉三郎（群馬縣）手榴彈雨下泰然として彰德城西門の敵情を偵察す……七一二

ゆ

歩兵上等兵　湯澤丑雄（長野縣）勇敢なる擔架兵……七一五

み

歩兵中尉　三木作二（兵庫縣）先遣小隊長として奮戰大隊主力の進出を容易にす……七九
歩兵軍曹　南出文一（和歌山縣）北滿に於て孤軍奮鬪斃れて後已む……一五六
歩兵伍長　南毅（群馬縣）勇敢なる擲彈筒分隊長死に臨み尙敵軍膺懲を依頼す……三八三
歩兵伍長　三ツ橋繁（兵庫縣）優勢なる匪賊の包圍攻擊に負傷尙奮鬪重任を果す……三八五
歩兵伍長　宮地庄一（兵庫縣）決死敵前至近に進出して貴重なる報告を提供せし勇敢なる斥候長……三八八
歩兵上等兵　三木信雄（和歌山）縣忠勇義烈の速射砲手……七一七

歩兵上等兵　三木勇二（和歌山縣）優秀なる軍犬兵奮闘の後匪彈に斃る……七三〇
輜重兵一等兵　宮本幸作（大阪府）輜重の華。險難の地に包圍せられ勇戰の後悲壯の最期を遂ぐ……七六七

し

歩兵中尉　下城平三（群馬縣）模範的將校斥候。豪膽敵陣内に潜入す……八一
歩兵軍曹　新谷秀一（兵庫縣）精悍なる輕機關銃分隊長として戰捷の途を拓く……一四九
騎兵軍曹　志田莊太郎（靜岡縣）勇猛果敢使命を果して敵彈に斃る……一五八
歩兵伍長　白川彌平（大分縣）斥候として濃霧中十數倍の敵に會し最後迄奮戰す……三九〇
歩兵伍長　白根武一（島根縣）泥中の惡戰苦鬪に重機關銃の全威力を發揮す……三九一
歩兵伍長　芝吹功（岡山縣）勇敢機敏の擲彈筒手屢々偉勳を樹て臨終に際し　陛下の萬歳を三唱す　三九四
歩兵上等兵　澁澤藤吉（埼玉縣）勇敢なる輕機關銃手苦境に小隊の前進を誘起す……七三三
歩兵上等兵　篠原泰三（群馬縣）亂戰中敵十數名を斃して中隊長の危急を救ひ玉碎す……七三四
歩兵上等兵　重信吉男（鹿兒島縣）勇敢健氣なる小銃手……七三六
歩兵上等兵　島田政勝（群馬縣）勇敢機敏なる斥候兵……七三八
砲兵上等兵　島田主雄（靜岡縣）劍電彈雨の下に歩砲連絡の通信網を確保す……七三〇

ひ

歩兵伍長　廣瀨昌一（兵庫縣）勇敢にして部下に對し溫威併行の分隊長部下の死體を捜索し兇彈に斃る……三九六
歩兵伍長　平野義夫（岡山縣）勇敢なる迫擊砲手の奮戰……三九八

も

歩兵軍曹　諸岡正義（茨城縣）沈着戰機に投合して戰果を收む……一三二
歩兵軍曹　森田春尼（兵庫縣）剛膽勇敢なる輕機分隊長……一六二
工兵軍曹　森田平藏（埼玉縣）舟行中敵襲を受け悲壯なる戰死を遂ぐ……一六五
歩兵上等兵　毛利龍三（青森縣）匪賊の急襲に身數彈を受くるも斃るゝ迄奮闘す……七三三
歩兵上等兵　森田利一（大阪府）勇敢なる輕機關銃手重傷を負て尙銃を執り戰闘を續けんとす……七三四

せ

歩兵上等兵　關根新一郎（栃木縣）關利莊の勇士死に臨み亡き戰友の遺品を賴む……七三六

す

砲兵大尉　杉本質三（三重縣）觀測班長として殊勳を奏す……四三
歩兵軍曹　鈴木初一郎（栃木縣）致命の重傷に再後の奮闘を賴みて瞑す……一六七
歩兵伍長　末廣一三（兵庫縣）勇敢機敏の指揮班長克く重任を果して遂に斃る……四〇〇
歩兵伍長　杉本三次（和歌山縣）戰機に投合し突入戰勢を有利ならしむ……四〇三
歩兵上等兵　鈴木厚（茨城縣）連絡の重任を完うして中隊の戰闘を有利に進展せしむ……七三八

支那事變

忠勇列傳

陸軍之部　第貳卷

忠勇顯彰會編纂

將校准士官之部

陸軍少將正五位勳四等功四級　井手龍男

砲兵火力の運用卓越にして戰捷の途を拓く

氏は福岡縣小倉市大字富野の人にして父を伊親母を從子と云ひ明治十五年四月九日に生れ妻秀との間に伊人、伊武、伊成、伊文、恒子の五愛子を擧げた。資性溫良にして頗る孝心深く小倉居住間は勿論近年上富野に新居を構へし後も出勤歸宅時には必ず兩親に挨拶を述べ珍らしき物を得ば先づ兩親に呈し時には自ら老父の晩酌に座して物語をなし其老後を勞はり慰むる敬虔なる至情は聞く者をして感激せしめて居た。氏は又同情心に富み部下愛を以て有名であつた。曾て日露役に氏の部下たりし民谷某が氏の宅とも知らず野菜行商の爲訪れし處氏は目さとく之を認め「おい民谷ぢやないか」あつ「中尉殿！」と貳拾數年振りの再會を喜んだが氏は出征に方り多忙にも拘らず民谷氏を招ぎ「色々世話になつたが今度は俺も最後の御奉公だから決して生きては還へらぬ覺悟だ。元氣で暮らせよ。お前は酒好きだから之を持つてかへれ」と一斗樽

を贈つた。民谷氏は今更乍らの溫情に涙を流し氏の壯途を伏し拜んだ。氏の風格は多彩であつたが人情美こそは氏の生涯を通して特筆すべきものであつた。

明治廿八年四月小倉市堺町小學校高等科卒業後福岡縣豐津中學校へ入學同三十四年三月同校卒業同年十二月士官候補生として野戰砲兵第十二聯隊へ入隊翌三十五年十二月陸軍士官學校へ入校同三十七年同校卒業同年十一月砲兵少尉に任ぜられ累進して昭和八年八月砲兵大佐となり豫備役に編入せられた。

其間日露戰役に從軍して勳六等に叙せられ大正四乃至九年戰役には大阪砲兵工廠に於て戰役に關する業務に從事し勳四等に叙せられた。大尉時代は其大部を兵器製造の業務に服し少佐時代は聯隊副官大隊長を經て秋田鑛山專門學校服務を命ぜられ中佐時代は野戰重砲兵聯隊附であつた。豫備役編入後は陸軍造兵廠に入り八幡製鐵所に勤務して居た。

支那事變起るや昭和十二年八月應召野戰重砲兵聯隊長として先づ北支戰線へ出動した。

滄州附近の會戰に於ては九月二十三日東花園西方を退却中の敵に對し機を失せず猛射を加へて之に甚大なる損害を與へ同日夕刻左翼隊の突擊に方りては東花園東方の既設陣地に對して火力を集中し以て適切なる突擊支援射擊を行ひ翌二十四日は東花園東側を退却中の敵を射彈を以て之を捕捉し歩兵の追擊動作に協力する等克く火力を運用し遺憾なく砲兵威力を發揚した。

十一月十四日黃浦江の困難なる渡河を終へし後は嘉興方面の戰鬪に參加せんが爲殆ど晝夜兼行の强行軍を行ひ氏は途中より先行し十八日午前十時頃嘉興東側塘滙附近に到着し嘉興附近の敵陣地攻略の爲諸準備を整へたが當面の敵は大なる抵抗を爲し得ずして南京方面に逸早くも退却せる爲氏も雄腕を振ふの機會を逸し一意南京に向ひ急追する事になつた。途中十一月二十五日湖州西北方約二里の寬永橋に達するや敵は同地附近の天嶮に據り頑强に抵抗し友軍歩兵の追擊を阻止しあるを認めた氏は部下第四中隊をして高地上の敵を制壓して友軍歩兵に協力し長興占領の爲の隘路進出を容易ならしめた。翌二十六日長興占領後は直に第二大隊長田中少佐に隷下第四中隊及野砲二中隊を併せ指揮せしめて秋山支隊に配屬し夾浦鎭附近の高地に據る敵に猛擊を加へ宜興進出の戰鬪に協力せしめた。

宜興—溧水道上の十數箇所の橋梁は既に敵の爲に破壞せられ我工兵の應急修理も重砲通過の爲めに其用を辨ぜず砲兵隊の追擊前進は頗る困難となつた。氏は部下將兵を激勵し不眠不休の努力に依り十二月十日麻田橋附近に於て上級指揮官に追及するを得た。之より十二月十二日に亘る三日間南京城攻略戰に參加するに至つたが氏の部隊は麻田橋以北の數線に亘る敵陣地に對し當面の攻擊を擔當せる歩兵部隊及秋山部隊に協力し尙突擊に際しては野砲隊に協力して城壁を破壞すべき任務を受領した。當時南京防衛軍は棲霞山、方山、將軍山、牛首山を本防禦線となし必死の防戰に努めた。之に對し我軍は竹下長谷川岡本の諸部隊及千葉山田矢ケ崎山本諸部隊の精鋭を展開し井手橋本の砲兵諸部隊亦各々放列を布置し鐵袖一觸の意氣將に天を衝き砲兵諸隊の火蓋を切るや早くも十一日には牛首山將軍山を奪取し敵の最後の恃みとせる雨花台の堅壘を一擧に攻略すべく氏は隷下諸隊の砲兵火力を運用してベトントーチカを片つ端から巨彈の雨を浴びせ以て雨花台攻擊の歩兵部隊に適切機敏なる協力を與へた。敵亦此處を先途と各種銃砲彈を集中し忽ち名狀すべからざる修羅場と化したが氏は勇敢にも熾烈なる敵火を冒して雨花台西方高地上に主觀測所を推進し以て適切に射擊效果を觀察し愈々砲兵火力の全

威力を發揮し次で翌十二日の南京城攻撃に方りては斷乎第一線歩兵の線に陣地變換を行ひ高さ二十米幅十米の難攻不落を誇りし城壁に對し正確無比の集中射撃を行ひ遂に城壁の一角を美事に破壊せしめ以て長谷川部隊の肉彈勇士をして城内一番乘の榮譽を擔はしめたと云ふ事であつた。斯くて首都南京も陥落し世界の視目を驚嘆せしめた。氏は部下の功績を讃へ其勞を犒ひ部隊を南京郊外に集結すべく命じた。十四日午後四時には野口少尉、佐々木鍛工長等を隨へ部隊集結の情況を視察せんとして兵工廠西側の學校々門の北方約十米に歩を運びし時第五第六中隊の砲車中央に所在不明の敵迫撃砲より砲撃を受け氏以下四名の戰死者と九名の重輕傷者を出すに至つた。氏は右乳上部に致命的盲貫破片創を又顔面手首大腿部に各々數個宛の破片傷を受けた。併し氏は意識明瞭にして翌十五日の入城式及戰死者に對する手續等を指示し何等平素に異る所もなかつた。又軍醫は野戰病院へ入院方を勸めたが氏は部隊が現在地出發迄入院せずと主張し部隊長室に於て看護を受けた。然るに十五日午前七時頃より容態急變し同日午前八時三十五分從容として江南戰線の華と散つた。

氏や人格高潔夙に人情部隊長として部下將兵の信頼厚く一隊團結の中樞として鐵石の如き部隊を練成するを得た。氏は又戰機を明察するに機敏にして其獨斷專行は機宜に適し克く上級指揮官の企圖に合し赫々たる武勳を奏した。難局に處するや妄に他部隊に依頼心を持つ事なく部下と共に險難勞苦を頒ち堅忍不拔萬難を排して一意任務に邁進した。寔に是れ皇軍指揮官の龜鑑にして其玉碎は痛惜に堪えない。南京陥落の快報一度び傳へらるゝや國の内外を論ぜず喜びにどよめき渡つたが獨り氏の隷下部隊の將兵のみは深き憂愁の思に鎖されしは蓋し氏の德望の然らしむる處であつた。氏は既に出征の日生死を超越し一意最後の御奉公にと遺書遺髪を我が家に止め眞に生還を期せなかつた其深き決意は古武士に接する心地して轉た敬仰を禁じ得ぬ。今や颯爽たる雄姿溫容慈顔の聲咳に接する能はずと雖其功績は皇軍戰史に異彩を放ち其芳名は傳へて千載に芳ばしく其英靈や亦永世に生き尚も皇國並に一家の守護神として其前途に尊き加護を垂るべく殊には愛子等の將來に限なく慈愛を垂れ其多幸の將來を擁護するであらう。

氏は戰死の日陸軍少將に任ぜられ次で勳三等に叙し旭日中綬章竝に功四級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵中佐正六位勳四等功四級　竹島響一

萬難を排して患者輸送を完くし自ら偵察に任じて敵彈に斃る

氏は山口縣豐浦郡清末村の人にして亡父を晋次郎と云ひ陸軍少將にして令名あり亡母をかずと云ひ明治二十一年十月七日に生れ妻福江との間に信道節子の二愛子を擧げた。資性溫厚友情に厚く氣宇快濶にして溫顔人に接し能く部下を愛撫し部下亦氏を敬慕し明朗隊長の名があつた。幼にして聰明且勉强家にして各學校の成績優秀であつた。明治三十五年四月早稻田中學に入學翌三十六年陸軍中央幼年學校豫科へ入校し中央幼年學校を經て明治四十三年五月陸軍士官學校を卒業し同年十二月陸軍歩兵少尉に任ぜられ近衛歩兵第一聯隊附に補せられた。氏は露語に堪能にして陸軍士官學校卒業後直に東京外國語學校露語專修科第二學年に入學し翌四十四年三月同校を卒業した。大正二年八月歩兵中尉に進級大正七年に西伯利亞事變に從軍し得意の露語を用ゐて軍の行動に大に貢献し又各地に轉戰して功績を擧げ翌八年八月歩兵大尉に進級し戰功に依り勳五等に叙し双光旭日章を賜はつた大正十四年十二月歩兵少佐に進級し豫備役を仰付られたが爾後陸軍技術本部囑託として勤務して居た。

支那事變勃發するや昭和十二年七月下旬福田部隊に召集せられ患者輸送部班長として天津に向ひ出發した。

斯くて九月十八日以降涿縣保定附近の會戰に際しては患者の輸送を擔任し豐臺附近に於ては豐臺―天津間の汽車輸送竝

に豐臺驛より同地野戰豫備病院間の輸送を行ひ高碑店に於ては同地より北平に至る間並に同地と病院間の輸送徐水附近に於ては同地と北平間の汽車輸送に任じ輸送患者數數百名に達し常に部下を督勵して刻苦勉勵指揮亦適切にして輸送班の任務を完うした。又九月下旬より十月中旬に亘れる石家莊及滏陽河附近の會戰には方順橋、保定、曲線、石家莊等の各地に於て汽車又は自動車に依り輸送したる患者數頗る多數を算したが其の計畫適切區署亦機宜に適したるため常に圓滑に業務を進捗せしむることを得諸隊の作戰行動に些の支障をも來たさざりしことは一に氏の終始一貫せる熱誠とその卓越せる技倆に依ることを認めざるを得ない。十月中旬に至るや正太鐵道沿線山岳地帶の戰局俄かに急迫を告げ友軍苦戰中との情報に基き氏の部隊は石家莊より急遽同方面へ轉進を命ぜられ十月十七日には山西河北兩省境の大行山脈の一部に踏み入り峨々たる連山の嶮岨を突破し十八日夕井陘に達し此處を中心とし作業圏十數里に及び同月三十日に至る約二週間に亘り班長として患者輸送に關する直接指揮の外舊關衛生隊と連絡を密にして業務の進捗を圖り又地形道路の偵察をなして輸送班の運轉を圓滑ならしめた。更に二十一日舊關附近に進出し山間僻地に難作業を遂行中同地附近の敵は頑强にして危險は時々刻々患者に迫る狀態であつた。玆に於て氏は急遽患者を救出する必要を痛感し傳令二名を率ゐ危險を冒して直に舊關衛生隊に至り協議連絡の上大龍窩を經て舊關に向つて患者を輸送する事に決した。然るに該道路は兩側共に絶壁屏立したる峽谷にして加ふるに時々銃砲彈は路上に落達炸裂し危險甚しかつたが氏は巧に敵方射擊の間斷を計り部下を督勵して大なる

損害なく輸送を全うした。當時又衛生材料及糧食に缺乏し僅に飛行機よりの投下補給に依り辛うじて飢餓を支へたる程であつたが氏は毅然として部下を指導し或は衛生隊より自動貨車の廻送を得或は擔送に依り或は匍匐又は徒步躙進に依り遂に安全地帶に出で其の救出し得たる患者數又莫大の數に達し克く其の任務を完うした。是れ一に班長の周密なる計畫と勇敢なる行動に依るもの其の功績は實に偉大であつた。次で十二月三日に至るや陽泉附近の村落に敗殘の敵出沒の報に接した氏は兩後に於ける班の行動計畫上之れが實狀と且は同地附近の地形を偵知し置くの要に迫られた。然かし患者輸送班の事とて之に任ずべき適當の者なく遂に氏は自ら該偵察のため出動した。然るに陽泉村に至るや突如敵の狙擊を受け惜くも竟に名譽の戰死を遂ぐるに至つた。

氏や人格高潔明朗にして能く部下班員を掌握し慧敏又能く戰況の推移を豫察して適時行動範圍の地形を偵知し又關係諸部隊との連絡を緊密にし以て隷下班員の部署行動を適切ならしめ多數の患者を救護し皇軍衛生業務に貢獻せる所極めて甚大であつた。而かも戰歷の前半期は酷熱泥濘に後半期は嶮坂峻峯に惱まされ給養の不良と日夜の疲勞困憊の情況下に率先垂範獻身的の努力を捧げたる至誠に至りては眞に其崇高なる責任觀念に感激せざるを得ない。寔に是れ皇軍將校の龜鑑にして其功績は天晴れ皇軍戰史に異彩を放つものである。今や氏が明朗颯爽たる雄姿に接する能はずと雖其名は大和櫻と謳はれて千載に芳ばしく其英靈亦永遠に生き尚も皇國並に一家の守護神と仰がれて尊き加護を與ふべく殊には二愛子の將來にみたま乍らに限りなき慈愛と擁護を垂るる事であらう。

氏は戰死の日步兵中佐に進級し次で勳四等に叙し旭日小綬章並に功四級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵少佐從六位勳四等功五級　西山喜代藏

模範中隊長、意見を具申し卒先突擊戰捷の途を拓く

氏は鳥取市梶川町の人にして父を細藏亡母をコトと云ひ明治三十二年七月三十一日に生れ妻春子との間に盤、輝、陽子進也、喜子の五愛子を擧げた。資性剛毅闊達にして慈愛心深く又研究心旺盛にして諸事優秀なる成績を擧げ上下の信頼厚かつた。大正三年三月鳥取縣興德小學校高等科を卒業し爾來獨學研鑽怠らず大正七年十二月現役志願兵として歩兵第四十聯隊に入營し大正九年十二月伍長に任官し爾來刻苦精勵の結果昭和二年十二月陸軍士官學校へ入校の光榮に浴し昭和四年三月歩兵少尉に任官した。其間陸軍戸山學校體操科學生として分遣、成績優秀の故を以て更に長期學生として殘留を命ぜられ良成績を得て卒業し又大正十四年四月以來滿洲警備の部隊に屬し奉天並に鐵嶺に於て警備の勤務に服し功に依り勳八等瑞寶章を賜はり昭和二年四月勤功章を附與せられ同年七月より約二ヶ月間山東臨時派遣部隊に屬し青島守備の任を果し內地に歸還した。昭和七年二月歩兵中尉に進級し再び滿洲警備部隊に屬し昭和九年五月內地歸還中隊長に補せられ滿洲事變の功を以て勳五等双光旭日章を賜はつた。斯くて昭和十一年八月には歩兵大尉に進級所屬隊の中堅として愈々其手腕を發揮するに至つた。支那事變勃發するや長野部隊第十一中隊長として昭和十二年八月勇躍北支方面への征途に就いた。九月七日より六日間に亘る馬廠附近に於ける戰鬪に於ては所屬大隊は所屬聯隊の豫備隊となり氏の中隊は行動間車輛部隊の掩護を命ぜられた。時恰も泥濘車軸を沒し行動容易ならず且敗殘兵隨所に出沒したるも氏の周到適切なる處置に依り小王庄より青縣間に於ける主力への追及を無難ならしむるを得た。

九月二十一日所屬聯隊は〇〇左翼隊右第一線として主攻正面の重點たりし人合庄附近の敵陣地を攻擊したが氏の中隊は

當初聯隊豫備隊として高官屯に位置し爾後第一線の攻擊進捗に伴ひ二十一日午後九時李家婁に進出し所屬大隊に復歸した。此時所屬大隊は聯隊の左第一線となり人合庄姚官屯の敵陣地を攻擊中であつたが中隊は中央第一線大隊たる第一大隊の左翼に連繫し逐次第十中隊正面の敵陣地を西北方より攻擊すべき命令を受領した。玆に於て氏は自ら敵兵力の配備就中重火器の位置及陣地の强度を偵察し廿二日拂曉先づ第一大隊に續行し李家婁を出發したるも第一大隊の攻擊進捗せざる

爲氏は敢然第三第四中隊の中間地區を躍進し李家婁南方約百五十米の無名部落に進出するや北部人合庄北端及其東側地區の自動火器數個より熾烈なる十字火を浴びせかけられた。玆に於て氏は決死の覺悟を以て中隊の先頭に立ち前面鐵條網破壞口より猛然として突擊を敢行し北部人合庄南端の一角を奪取し其東側陣地より壞亂敗走せんとする敵に急遽肉薄して之を潰滅せしめた。此時刺殺せる敵兵五十を下らなかつた。爾後逐次大隊の攻擊目標たる姚官屯附近の敵に對し東南方面に轉進し姚官屯驛西北方約七百米附近に兵力を集結した。時將に夕陽沒する頃であつた。夜に入りて前面の敵は熾烈なる十字火を以て我前進を阻止したが氏は機を失せず自ら敵陣地の配備並に陣地の强度を偵察し重火器運用に關し重要なる意見を大隊長に具申し以て大隊長の戰鬪指揮を容易ならしめ且逐次匍匐前進して鐵條網の線に達し中隊正面に二個の突擊路を隱密の裡に開設した。

翌二十三日午前六時半より實施せる友軍砲兵の突擊支援射擊に膚接して敵前約四百米の線に進出するや姚官屯驛附近の

敵重火器は一齊に火蓋を切つて我を猛射した。午後一時半より再度我歩兵砲隊に依て突擊支援射擊を行つたが敵は依然頑強にして突擊の動機を發見し得ず玆に於て大隊長は午後二時半氏の中隊をして敵陣地の北側より突擊支援射擊を行はしめ以て第一線各中隊の突擊を促進せんと企圖したが氏は自己中隊を以て突入擊破するにあらざれば大隊攻擊は依然奏效至難なるべしとの意見を强硬に具申し午後三時を期し大隊正面の敵陣地に數次の突擊を敢行し午後三時五十五分遂に姚官屯本驛を占領するに至つた。此間氏は冷靜沈着克く敵狀を偵察し部下中隊を確實に掌握し突擊に方つては常に率先陣頭に立ちて勇戰奮鬪し而かも部下將兵には無益の損害を避けしめんが爲身の危險を顧みる事なく地形地物の利用を適時指示する等恰も平素の演習に異ならず。本驛奪取後敵は線路東側陣地の掩護射擊を恃み猛然として逆襲に轉じ來りしも氏は泰然自若指揮適切奮戰よく之を擊退し本驛を確保し尙も附近の敵情地形を偵察せんとする折しもあれ本驛の東側方面より飛來せる敵彈の爲心臟部を射貫かれ其場に打倒れた。附近に在りし將兵は打驚きて氏を介抱すれば氏は敵方を睥睨しつゝ徐ろに大丈夫―大丈夫だと唯二聲を名殘とし同日午後四時廿五分竟に壯烈なる戰死を遂げた。

氏の一生は是れ實に奮鬪史の繪卷物であつた。而して中隊長の榮職に就くや天性の慈愛心は嚴肅なる指揮統御の奥深き所に流れて部下の琴線に觸れ具さに體驗し來れる實兵指揮の要諦は自ら光を放ち慧眼機敏克く戰機を捕捉し往くや疾風迅雷向ふ所頑敵を擊破し常に所屬大隊の爲戰勝の途を開拓し以て其雄腕を遺憾なく發揮した。寔に是れ皇軍指揮官の精鋭軍人の龜鑑たるものであつた。然るに姚官屯驛の一戰に此勇將を喪ふ眞に國家の爲痛惜に堪えない。然りと雖氏の功績たるや皇軍戰史に異彩を放ち其名は千載に傳へて大和櫻と咲き匂ひ其英靈亦永遠に生き護國の神と仰がれ尙も皇國並に一家就中愛子等の前途に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵少佐に進級し從六位に昇叙し次で勳四等旭日小綬章並に功五級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵少佐從六位勳五等功五級　尾畑俊夫

旺盛なる攻擊精神寡兵衆敵を破る

氏は岐阜縣羽島郡足近村の人にして父を正一郎母をたみと云ひ明治四十二年三月三日に生れ妻いつ子との間に愛子、一正を擧げた。責性溫厚實直にして上を敬ひ下を慈しみ諸人の愛敬を受け又責任觀念旺盛にして上下の信賴厚かつた。大正十二年三月千葉縣立千葉中學校第一學年修業後直に東京陸軍幼年學校に入校し爾來陸軍士官學校卒業迄竹田宮殿下及李鍵公殿下の御學友たるの光榮に浴し昭和二年三月以降九月迄士官學校候補生として歩兵第三聯隊に配賦せられ秩父宮殿下より直接御敎育を賜はるの光榮に浴した。昭和五年七月陸軍士官學校本科を卒業し同年十月歩兵少尉に任じ歩兵第三聯隊附に補せられた。爾後累進して昭和十二年三月歩兵大尉に任ぜられた。其間歩兵學校乙種學生の課程及習志野學校甲種學生の課程を修了し歩兵學校敎導隊附に補せられ又歩兵第三聯隊在勤中滿洲事變に關し功勞あり大尉へ進級と共に中隊長を拜命し滿洲警備の重任に就いた。

支那事變勃發するや小林部隊の第十一中隊長として天津防衞司令官の直轄となり同地の警備治安維持に任じ八月中旬張北方面に轉進し同月十九日張北南方高地を占領して兵團の兵力集結を掩護中であつたが同夜午前二時三十分右第一線たる第九中隊の正面に敵の夜襲を受け所屬大隊は黎明を待ちて攻勢に轉ずるに至つたが氏は其間獨斷敵の右側背に迫り敵に多大なる損害を與へ以て大隊の攻擊を有利ならしめた。午後一時三十分敵情搜索の爲部下第一小隊を前方に派遣したが計羅塞東南高地に於て敵と遭遇し交戰中なるを知つた氏は直に中隊主力を率ゐ敵の右翼より包圍攻擊し之に多大なる損害を與へて擊退した。然るに午後五時卅分頃約三百名の敵は中隊正面に來襲し中隊の陣地を包圍し勢ひ鋭く攻擊して來た。され

ど豪膽不敵の氏は少しも驚かず適切機敏に戰鬪を指揮し敵に多大なる損害を與へて之を擊退し以て大隊の左翼を安全ならしめた。

八月二十日所屬大隊は察哈爾省狼火溝南方の長城線附近の敵陣地を奪取すべき命令を受領した。午前四時半頃敵前七百米に達し準備砲擊の成果を待つて居たが山岳地帶の錯雜なる地形と敵陣地の强度大なる爲我が砲兵及歩兵砲の效力少なく遺憾ながら晝間攻擊を斷念し夜襲を決行するの外術策もなかつた。

其處で中隊は午後八時行動を起し廿一日午前零時半敵前百米に進出した。所屬大隊の攻擊目標は張北—張家口道の東側の敵火點であつたが長城線上には掩蓋機關銃を梯の齒の如く配列し城壁の北側には外壕を設けて側射の設備あり。長城線の南側に接し卵形の高地屹立し長城と相俟ちて堅固なる堡壘を設け之に地雷線などの障碍を配して難攻不落を誇つて居た。而して我が前進路は坦々たる草原にして何等の遮蔽物なき緩斜面であつた爲息を殺して此線迄匍匐前進したのである。然るに敵は我が行動を察知してか俄然正確且猛烈なる射擊を開始した。夜の靜寂を破つて氣たゝましく木だまする銃砲聲も物凄く長城線並に其南方高地に火を吐く火點更に本道兩側の兵營附近よりする側防射烈しく我軍は全く敵の十字火網の中に包まれて死傷者は刻一刻增加する許りにて部下は動もすれば膠着せんとする苦境であつた。氏は之を叱咤督勵しつゝ前進し大隊長より突擊命令あるや氏は早くも挺進して外壕を超え火點の西北端に進出せる大隊本部に近く位置し連絡を確保しつゝ一擧敵陣地に突入して之を占領したが此突入中不幸にして敵彈の爲左大腿部を射貫かれ鮮血淋漓と迸れど氏は之に屈せず起たんとしたが重傷の爲力及ばず切りに當番兵に「俺を背負つて行け、トーチカを早く取つてくれ」と連呼した。されど刻々力盡くるを自覺するや徐ろに中隊の指揮を荻野少尉に委ね手を組みて君が代を奉唱しつゝ心靜かに崇高なる戰死を遂げた。

氏は中隊長として赴任するや毎朝勅諭の全文を奉讀し夜はおそく迄勉强し其敬虔高邁眞に一隊の模範であつた。諸教練の成績亦群を拔き特に擲彈筒教育に就ては隊內の權威者であつた。而して如何なる猛訓練中にも部下を勞はる溫情は言外にも溢れて其德望自づから氏を核心とする團結堅固なる鐵血中隊が出來上つて居た。されば氏を失へる中隊の將兵は一時全く途方に暮れ遺德を慕ふ話題の盡くる日とてもなかつた。噫人情隊長にして而かも機略縱橫戰機を看破するや電光石火の決意と精悍鬼神も避くべき鬪志に燃ゆる智仁勇兼備の良指揮官であつた。然るに聖戰の初期に早くも長城戰一夜の嵐に此俊材を喪ひしは皇軍の爲轉た痛惜に堪えない。然れども皇軍の北支進入機動の初期に當り其發起地帶たる平津地帶の側背に一大脅威を與へんが爲長城線に蟠居する頑敵は更に山西綏遠方面よりする大兵團の策動を待ちある情況下に速に長城線の敵を擊滅するは極めて重要なる急務であつた。氏等は寡兵を以て此重任を双肩に擔ひ幾辛酸を克服しつゝ神速果敢に死力を以て其大任を完遂したるものにして正に皇軍戰史上不朽の光彩である。今や風發叱咤の雄姿に接する能はずと雖其名は大和錦と謳はれて千載に芳ばしく其英靈は永遠に生き尙も皇運を扶翼し奉り又遺家族就中愛子の將來に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵少佐に進級從六位に昇叙し勳五等双光旭日章並に功五級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵少佐從六位勳五等功五級　高木三郎

壯烈機關銃中隊長として玉碎す

氏は德島市田宮町の人にして父を多郎左衛門亡母をふじと云ひ明治三十九年六月二十八日に生れ妻喜代との間に長男俊長女那智子の二愛兒を擧げた。性快活正直にして同情心厚く愛兒の養育に意を用ゐしは勿論部下の一身上の世話亦懇切を極め又責任觀念旺盛にして常に軍務に精勵し指揮統御優秀であつた。大正十三年三月廣島陸軍幼年學校卒業後陸軍士官學校豫科を經て昭和三年七月陸軍士官學校本科を卒業し同年十月歩兵少尉に任官歩兵第六十三聯隊附に補せられた。昭和六年十二月滿洲事變の爲出動し奉山沿線の戰鬪に從事し八道壕附近の戰鬪には右大腿部に貫通銃創を受けた。當時部下小隊二十八名を率ゐ友軍の增援に赴いたが途中約二千名の敵に包圍せられ約十二時間の苦戰を續け遂に之を擊退した爾後滿洲事變の功に依り勳六等に叙し單光旭日章を賜はり累進して大尉に任ぜられた。

支那事變勃發するや霜癸部隊に屬し機關銃中隊長として北支方面への征途に就いた。八月二十四日獨流鎭附近の戰鬪に於ては大村大隊に屬し一小隊を第十二中隊に配屬し爾餘の部隊を直轄指揮し午後二時獨流鎭の北方約五百米に達したる時突如敵の射擊を受くるに至つた。此の時氏は機を失せず二箇小隊を第九第十一中隊に配屬し自ら一小隊を直轄し大隊長と共に第一線に位置し迅速に當面の敵を擊破し追擊前進に移る事を得しめた。

續いて子牙河畔王鎭に前進し敵情搜索及同地の警備に任じ八月卅日には部下主力を指揮して迅速に三堡の敵を擊破して主力の前進を容易ならしめ翌卅一日には王口附近の攻擊に參加した。即ち當日午後二時本隊と共に王口鎭西北方約千米の地點に達したが中隊の主力を提げて所屬大隊の右翼方面より速に敵の背後に進出して果敢なる攻擊を行ひ以て敵主力の退却を餘儀なからしめ本戰鬪勝利の基礎を確立した。

九月三日所屬大隊は前衛となり王口鎭を出發し氏は中隊主力を指揮し行軍序列に從ひ東子牙鎭に向ひ前進中午前九時二十分頃大邀舖西南方地區及子牙河左岸地區より突如敵の猛射を受けた。所屬大隊は直に展開し第十中隊の右に連繫して右堤防線に進出して敵に猛射を浴びせ之を擊退するや率先大邀舖に進入し續いて子牙河左岸及小邀舖部落一帶の地區より熾烈なる十字火を受けたる氏は之を意とする事なく沈着剛膽適時適切なる火力を集中し敵に甚大なる打擊を與へ午後八時暗夜に乘じて東子牙鎭東北部の一角を占領し猛烈なる銃砲彈を浴びつゝ同地を確保し其任務を完了した。翌四日午前六時拂曉攻擊に當りては最前線に在りて東子牙鎭一帶よりする敵の重火器に對し有效なる火力を集中し之が爲一時敵は沈默するに至つた。氏は此好機に乘じ前進を敢行せんとする一刹那約五十米前方の家屋銃眼より敵機關銃の猛射を受け不幸右頭動脈より左肩に貫通銃創を受け其場に壯烈なる戰死を遂げた。されど氏の勇猛果敢なる行動は部下の志氣を鼓舞し敵に至大なる損害を與へ爾後の大隊戰鬪を有利に進展せしめ以て本戰鬪の戰勝獲得に重要なる素因を與へた。

氏や豪快の裡溫情に富み克く中隊長を核心とせる團結鞏固なる中隊を練成し以て如何なる困苦缺乏にも如何なる悲慘なる戰況下にも百折不撓衆心を打ちて一丸となし又戰況地形の諸判斷適切にして一度び決するや疾風迅雷の行動を以て機關銃隊の全威力を發揮せしめ以て大隊戰鬪の骨幹を成形して赫々たる戰勝への途を開拓した。其功績たるや皇軍戰史に異彩

を放つものである。今や斯る實戰的良將を喪ひたるは國軍の損失で寔に痛惜に堪えない。さり乍ら人生限あり名盡くるなし。氏は前途洋々たる將來を有ち乍ら聖戰の半ばに玉碎したとは云へ曩には滿洲事變に赫々たる武勳を奏し今次亦聖戰に參下して縱横の敏腕を振ひ以て尊き人柱となつた。是れ正に武人の生涯として光輝燦然たるもので氏の生命は斷じて終焉ではない。必ずや其英靈は永遠に生き皇國の爲又一家特に愛子の將來の爲に尊き加護を垂れ又後輩語り傳へて其芳名を讃美する事であらう。

氏は戰死の日歩兵少佐に進級し次で從六位勳五等に叙し双光旭日章並に功五級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵少佐正六位勳四等功五級　田邊政二

旺盛なる企圖心戰捷の途を拓く

氏は福井縣丹生郡吉野村の人にして父は既に歿し母をハツと云ひ明治三十二年七月七日に生れ妻清子との間に一女昭子を授けられた。資性溫厚篤實にして孝心深く。長上を敬ひ幼者後輩を慈しみ極めて情義麗はしく。又研究心旺盛にして義務心厚く事に臨みて沈勇果斷の性格を兼ね備へて居た。大正三年四月武生中學校へ入校同八年三月同校卒業同年七月陸軍士官學校へ入校同十一年七月同校を卒業し歩兵少尉に任官し歩兵某聯隊附に補せられた。同十四年中尉に進級歩兵第三十八聯隊附となり翌十五年臺中分屯大隊附に轉任昭和三年歩兵第三十七聯隊附に轉補し同七年大尉に進級し天津駐屯部隊に派遣せられ翌年內地歸還同十年甲種學生として陸軍歩兵學校へ分遣十一年歩兵第三聯隊附となり北滿警備の爲渡滿した。北支の風雲急を告ぐるや湯淺部隊に屬し中隊長として聖戰に參加するに至つた。八月一日以後は大隊長小松少佐の指揮下に第三中隊長として天津附近の各地に活躍して治安維持宣撫工作並に殘敵掃蕩に任じ同月中旬更に外長城線に轉進し同八月二十二日より三日間に亘る萬全附近の戰鬪に於ては二十二日夜第一强行通過部隊たる第一線中隊長として水甕南方隘路附近の堅陣を攻擊すべき任務を受けたが敵情地形未だ詳かならず進路の兩側は斷崖にして崖上には既設陣地ありて進路は敵の十字火に曝されて居た。氏は沈着豪膽適切に部下を部署し自ら先頭に立ちて前進し地形と敵情とを判斷し先づ敵の

（ロ）陣地を急襲して之を占領し且高地上に於ては敵の據點に對し多大なる損害を與へて之を壓倒し以て聯隊主力の進出を容易ならしめ又敵は（ハ）陣地より逆襲し來りたるも之を擊退し逸早く隘路の前端たる（ホ）陣地に突入して之を占領し以て萬全縣の敵に對し完全に隘路を確保し所屬部隊の戰鬪任務遂行を容易ならしめたるのみならず兵團作戰の進捗に重大なる好影響を及ぼした。

八月二十五日所屬大隊は沈家屯附近の攻擊に方り第一線となり吉家庄附近の敵陣地を攻擊したが氏の中隊は其左第一線となり繁茂せる高粱畑を巧に利用しある約三百名の敵を攻擊し之を沈河及び沈家屯南方約百米の線に擊退した然るに沈河左岸には敵は村落圍壁に銃眼を設け且前地には巧に設備せる側防機關を配置しあるを恃み攻勢に轉じて來た。氏は沈着克く部下を激勵して之を擊退した。夜に入り敵は平綏線分斷に依る退路の障碍を打開せんが爲北方より大舉反擊して來たが所屬大隊は中央第一線となり沈家屯西南端附近に堅固に陣地を占領して之を阻止した。氏の中隊は大隊兵力の關係上過廣の正面を負擔したが適切勇敢なる行動に依り多大なる損害を與へ之を擊退し完全

に其任務を達成した。

八月二十六日小揚附近の戰鬪に於ては所屬大隊は當面の敵を攻擊し老鴉生に向ひ前進すべき命令を受け氏の中隊を左第一線となし小揚に向ひ攻擊前進を命じた。中隊が沈家屯より沈河左岸に進出せんとするや吉家庄西堡の敵は一齊に射擊を開始し猛火を浴びせて來た。中隊は火力を以て敵を制壓し小揚に向ひ前進せしに東堡よりする敵の側射と前面土壁に據る約二倍の敵より猛射を受けたが氏は沈着周到に敵情を判斷し適切なる指揮に依り敵前二百米の地點に躍進した。敵は此頃より數回に亘り逆襲を試みたが悉く之を擊退し遂に突擊の機を看破し卒先陣頭に立て突擊を決行し小揚を占領した。

九月上旬に於ける天鎭附近の戰鬪に於て所屬大隊は聯隊の左第一線となり大橋上の敵を攻擊した。敵の兵力は我に約二倍し其陣地は掩蓋機關銃陣地を主體とし數線の陣地を構築し各村落の圍壁には銃眼を施し所々地雷を埋沒して障碍となし又敵の陣地直前には深さ約二十米に達する地隙縱横に介在し眞に難攻不落の天險陣地であつた。所屬大隊は九月六日午前六時行動を起し午後一時より戰鬪を開始したが氏の中隊は左第一線中隊となり攻擊前進したるに俗稱コブ山高地の敵より熾烈なる側射を受けた。然れども氏は沈着勇敢に敵情地形を視察しつつ適切に部下を誘導して大橋上の西側に進出し敵の側背に迫り猛攻を加へ主力戰鬪の行動に多大なる利益を與へ進んで大橋上の西方第二陣地への攻擊を敢行し遂に敵をして敗退の已むなきに至らしめ所屬大隊の鮑家屯に向つてする夜間追擊を容易ならしめた。翌七日は尖兵中隊となり天鎭城を經て陽高城に向ひ敵を追擊し積極勇敢に敵情搜索に任した。

九月十一日所屬大隊は千田部隊第一線に增加協力を命ぜられ午前零時行動を起し午後零時半十五里堡に於て其指揮下に入つた。當時千田部隊の主力は聚樂堡南方高地の敵を攻擊中であつたが敵陣地は堅固なる掩體を構築し所々に掩蓋機關銃を有し據點にはペトン製トーチカありて頑强に抵抗した。大隊は千田部隊の豫備隊たりしが氏の中隊のみは第一線中隊として攻擊に參加を命ぜられた。氏は勇躍第一線諸隊と連繫し敵情地形を偵察しつゝ逐次敵陣地に肉薄し夜襲を決行すべく山頂近く進出せし時敵の退却を知り機を失せず一擧に突擊を敢行して敵の據點を占領し以て千田部隊主力の戰鬪を有利に進展せしめた。

九月二十六日所屬大隊は下社村の敵を攻擊すべき目的を以て堡安庄北側地區より堡安庄を經て下社村に向ひ前進したが氏の中隊は之が誘導隊となり輕敵を驅逐しつゝ迅速果敢に下社村を占領し續いて長城線の大石口小石口附近の敵情を機敏に搜索し以て兵團主力の作戰に重要なる資料を提供した。翌二十七日兵團主力は此情報に基き門塞に轉進し直に長城線狼峪西方長燕寺高地の敵を攻擊したが氏の中隊は大隊の右第一線となり忽ちにして同高地を占領し翌二十八日所屬大隊が左第一線となり双子山の敵を攻擊するや中隊は又第一線となり攻擊に參加した。當面の敵は天險を利用し堅固なる掩蓋陣地を構築し且陣地前には大地隙錯綜し指揮連繫頗る困難なりしも氏は彈雨の下常に中隊の先頭に立ち高さ約五十米の絶壁上に指揮所を設けて部下を適切に指揮すると共に直接協同に任じある砲兵隊と緊密なる連繫を保持し逐次敵を制壓して肉薄し遂に大隊の攻擊目標たる楠形山北方の高地を占領した。其旺盛なる企圖心其周到なる戰鬪指揮は實に大隊戰勝の至大なる素因となつた。此夜敵は三面より我に猛射を加へ奪回を企てたが氏はよく要點を確保しつゝ其企圖を挫折し黎明に至り敵退却の徴を逸早く發見するや果敢なる攻擊を敢行して双子山を占領し次で猛烈なる追擊射擊に依り敵を潰走せしめた。

十月四日所屬大隊は蓚縣城の敵を攻擊する目的を以て兵團の前衛となり氏は尖兵中隊長として午前三時行動を起した。蓚縣城西北方高地に敵陣地あるを知り中隊は黎明を利用し適切なる部署と勇敢なる行動とに依り一擧敵陣地に突入して之を占領し大隊の進出を容易ならしめ。續いて下凹村を占領して聯隊の該方面への進出を容易ならしめ。爾後中隊は聯隊長直轄となり要地にありて戰鬪を繼續した。翌五日大隊へ復歸し蓚縣城外の部落に據る約三百名内外の敵を攻擊した。敵は

土嚢を利用して上下二層の銃眼を設け永久的掩蔽部まで構築し陣地前に設けたる數線の鐵條網には無數の手榴彈を纏絡して障碍となし頑強に抵抗し剩さへ城内より逐次增加隊の來着する情況下に氏は巧に地形を利用して敵前約五十米の凹地に前進し各種重火器を以てする突擊路の開設を待ち居たれど所望の域に至らず其間約百名の敵は俄然中隊正面に逆襲して來た。此の時も氏は沈着克く部下を激勵して之に多大なる損害を與へて擊退した。かくて翌六日敵は工事を增强して抵抗を持續し且約百名の敵は猛烈に逆襲して來たが之又多大なる損害を與へて擊退した。所屬隊は此日薄暮を期して突擊を敢行するに決し午後六時五十分頃氏は第一突擊隊の先頭に立ちて一擧敵陣に突入すれば手榴彈の障碍及土嚢銃眼よりする猛射の爲殆んど全員死傷して突擊不成功となり氏も亦重傷を負ふに至つた。氏は悲憤やる方なく更に第二突擊隊を部署すべく突擊陣地に赴かんとするや惜くも第二彈の爲壯烈なる戰死を遂げた。

噫氏や人格力量群を拔き團結堅固なる鐵血中隊を練成し一度び戰場に臨むや大小幾多の戰鬪に參加し每戰赫々たる武勳を奏し常に皇軍戰勝の重要なる礎石となつた。寔に是れ皇軍指揮官の精鋭であり一般軍人の鵜鑑たるものである。今や崚縣一夜の嵐に散り風發叱咤の雄姿に接する能はずと雖其功績は皇軍戰史に輝き其芳名や千載に語り傳ふべく其英靈や萬古に生きて護國の神と仰がれ尙も皇猷を扶翼し奉り又遺族の前途に限りなき加護を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵少佐に進級し正六位に昇叙し次で勳四等に叙し旭日小綬章並功五級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍工兵少佐正六位勳五等功五級　藤原桂一郎

洛陽湖水上輸送中悲壯なる戰死を遂ぐ

氏は岡山市小原町の人にして亡父を久米吉母をちよと云ひ明治三十七年十一月二十九日に生れ妻正子との間に玲子、範子、節子の三愛子を擧げた。志操高邁堅確にして責任觀念强く豪膽明朗にして友誼に厚く又部下及幼者に對する慈愛心深く典型的武人とも云ふべき人であつた。大正八年三月岡山中學校第二學年修了後同年五月大阪陸軍地方幼年學校へ入校し陸軍中央幼年學校陸軍士官學校を經て大正十五年十月工兵少尉に任し善通寺工兵第十一大隊附となり昭和四年十月中尉に進級昭和七年十月東京工兵第一大隊附に轉じ昭和九年八月大尉に進級し第三中隊長に補せられた。中學校時代より秀才の譽高く隊務に服するや眞摯熱誠頗る研究心に富み創意工夫工兵界の爲大に貢獻する所あり就中渡河作戰に就ては蘊蓄卓越せるものがあつた。又氏の指揮統御は其德望と相俟ち天晴れ名指揮官と謳はれて居た。

支那事變勃發するや今田部隊に屬し昭和十二年十月勇躍江南戰線に赴いた。戰場到着後先づ十一月十日より數日間に亘り水上輸送勤務を命ぜられ李宅—金山間、李宅—風涇鎭間の未航水路を開拓して軍需品殊に彈藥の輸送並に戰傷患者の後送に任じ以て迅速確實に軍の要求を充足した。爾後引續き金山—嘉興間の彈藥輸送に任じ又所屬隊の各一部を第一線部隊に配屬するに方り永興橋附近より双橋附近に至る湖沼地帶を水上輸送に任じ同部隊の爾後に於ける行動に至大なる便益を與へた。

十一月二十日以降十二月五日迄は臨時水上輸送隊となり楓涇鎭—平望鎭間の彈藥輸送並に湖州—漂陽間の風波を冒して太湖を渡り以て第一線部隊に迅速に彈藥を補給し神速なる作戰の要求に卽應せしめた。續いて國崎支隊に協力の爲溧陽よ

り陶村に向ひ前進した。此間支隊爾後の前進の爲未航の水路を偵察し且地方舟を蒐集し次で國崎支隊の太平に向ふ水上輸送に任じた。當時參謀本部調製の地圖に據れば此附近は湖水地帶となりありしが現地は沼濕地帶にして水路錯雜し航路の選擇甚だ困難なりしに拘らず氏の蘊蓄慧眼は克く適切なる水路を發見し以て同支隊の輸送を圓滑にし太平附近の占領を容易ならしめた。

十二月十一日國崎支隊が慈湖鎭附近に於て楊子江を渡河するに方り部隊長小金澤中佐の指揮下に同支隊の渡河實施に協力した。卽ち同日午前八時三十分部下中隊を指揮し彩石鎭を出發し午後一時四十分慈湖鎭西北の渡河點に到着し渡河準備を完了し支隊の渡河點進出を待ち午後二時三十分より第一回の渡河を敢行した。此附近の楊子江は河幅三粁以上に及ぶ大河にして流速一米五〇を算するのであるが當時は干潮で兩岸は泥土深く上陸兵の股を沒する程度であり剩さへ上流からは强い風が吹いて居たが氏は一瞬の視察を以て克く適當なる上陸點を選定し適切に部下中隊を區處して齊整迅速に諸部隊を輸送し更に爾後の渡河を容易ならしめた。

國崎支隊が楊子江を渡河後氏の中隊は同支隊の爲長路及高淳に集積せる彈藥を浦口へ輸送すべき命令に接した。氏は部下中隊を區處し模合舟群を編成して之を單縱陣となし自ら舟群の先頭に在りて蕪湖を出發し水路を東北方に取り浦口に向ひ航行中十二月十三日午後三時三十分頃洛陽湖畔大龍口附近に差しかかつた。此時大龍口北端附近に潛伏せる敗殘の正規兵及便衣隊より成る約三百名の敵兵は村落を利用して數段の陣地を構成し家屋上に機關銃を据えつけ俄然我が指揮艇目かけて急射擊を浴びせて來た。模合舟の右舵手先づ斃れ忽ち曹長以下下士官兵十數名の戰死傷者を出すに至つた。氏は泰然自若後續舟群に直に左岸に上陸當面の敵を攻擊すべき事を命じた。ああ此洛陽湖は全く湖の性質を有せず殆ど沼濕地の特性を有しクリークの外は舟の通過を許さざる苦境に在つた。氏の指揮艇は模合舟の左舟の機關部に敵彈を受け運轉不能となり右岸に近き淺瀨に坐礁し上陸不可能となつた。されど氏は嚴然として水陸兩方面の部下狀態を視察しつつ督勵中憎むべき敵の一彈は氏の右胸部より左背部を打ち貫いた。同乘の軍醫は氏に繃帶を進言したが之を拒み敢然として指揮を續けた。此時敵のチェッコ機關銃は物凄く火を吐き指揮艇を猛射した。氏は憤然部下を激勵して自ら彈丸雨飛の中に交戰する事實に四時間に及びしが不幸再び飛來せる敵彈の爲胸部其他に數發の命中彈を受け竟に起つ能はず爾後の指揮を木下少尉に托し　天皇陛下萬歲を奉唱しつつ壯烈なる戰死を遂げた。

氏や英邁にして才氣煥發將來に多大の抱負を藏して熱誠眞摯倦む事を知らなかつた。又部下に接するや恩威並び行はれ部下皆悅服眞に鐵血中隊を率ゐて聖戰に參加した。ああ櫛風沐雨幾辛酸を克服して江南の水運を利用し密かにして而も偉大なる功績を樹て以て皇軍の補給を圓滑にし又部隊を輸送して迅速なる作戰に貢獻する處甚大であつた。寔に是れ皇軍工兵の眞價を發揚し天晴れ典型的の指揮官であつた。惜いかな大龍口附近の嵐に散つたが其功績は江南戰史に不朽の光彩を放ち其名は大和櫻と謳はれて千古に芳ばしく其英靈や永遠に生き尙も皇國並に一家の守護神として其前途を加護し殊には愛子等の將來にみたま乍らに限りなき擁護を垂るる事であらう。

氏は戰死の日工兵少佐に進級し次で勳五等に叙し双光旭日章並に功五級金鵄勳章を賜つた。

陸軍步兵少佐從六位勳五等功五級　齋藤勝司

壯烈、敵前渡河掩護に苦戰奏功す

氏は神奈川縣中郡大村の人にして明治四十年一月十四日生れである。父は半藏母はたきと稱し妻靜野との間に一子勝彥

を擧げた。資性謹嚴の裡大膽なる氣魄と細心の用意とを兼ね備へ思慮周密にして特に同精心深かつた。酒は飲まなかつたが元氣は常に溌剌且つ卓拔なる識見を有つて居た。大正十四年三月神奈川縣立厚木中學校を優秀なる成績を以て卒業し同年四月陸軍士官學校豫科に入校し初めて志望の軍籍に列することとなつた本人の得意思ふべきである。昭和四年陸軍士官學校を卒業し同年歩兵少尉に任じ歩兵第五十聯隊附となりたる以來累進して同十一年歩兵大尉に任じ益々前途を囑望せらるるに至つた。其間同五年には獨立第五大隊附に補せられ同六年には滿洲事變に參加し戰鬪を交ふること前後八回の多きに達し大いに勇名を轟かした。同七年八月朝陽鎭附近の戰鬪に於ては接戰格鬪右胸部に刺創を受けたが幸に平癒した。滿洲事變の功に依り同九年四月勳六等に叙し單光旭日賞及賜金を賜はり又滿洲國より建國功勞章を授與された。同九年陸軍士官學校生徒隊附に補せられ將校生徒の訓育に任じ高邁なる人格と卓拔なる識見とを兼ね備へ同校内の評判者で人望を一身に集めて居た。

支那事變勃發するや氏は同十二年九月三日勇躍して征途に着いた。之より先氏は軍務多忙の中に寸暇を割きて遠近を問はず自費を以て部下の家庭を訪問して、父兄に訣別の挨拶を爲し「愈々今度は生きて歸れぬ身である就ては御子息の體は此齋藤が貰つてゆく」と部下を眞の我子として連れて行く許しを得更に家庭の狀態を詳細に尋ね貧しい者に對しては役場や方面委員を訪うて一々今後一切の事を依頼するなど出征する自身が銃後のことまで心を配つた人情は眞に麗はしい美談であつた。されば「此隊長の下に死なねばならぬ」と皆死を誓つて決然征途に上つた。果然氏が戰死するや部下の慟哭は語るも聞くも唯涙部下の遺族迄が「惜しい隊長さんを失つた」と泣いたと云ふことである。鹽尻町の松野氏は倅は既に齋藤隊長殿に差上げたのですから倅が其隊長と枕を並べて戰死してくれた事は私共としては何等心殘はない決して惜しいとは思はぬと述懐して居る。偉大なるかな將兵遺族打つて一丸たるを得しめたる氏の赤誠！

戰地に到着したる後昭和十二年九月十五日良鄕出發以來惡路を冒し河川を徒歩すること兩度部下と共に艱苦を分つた。南泊附近の戰鬪に當りては聯隊の主力として其行動頗る適切であつて上下の好評を博した。

九月十八日大隊が大石橋附近の敵を攻擊するに際し聯隊豫備として行動し軍旗を守護し又同日朝涿縣附近の攻擊には聯隊長直轄として大石橋西方より揚五莊方面に迂回中隊として行動したるが適時適所に進出し大いに聯隊の戰鬪を容易ならしめ且敵の自動車數輛を鹵獲した。思ふに涿縣の敵が大なる抵抗も爲し得ずして退却したるもの實に氏の功績に俟つもの大であつた。

九月二十一日大冊河黃村附近の攻擊に於て大隊主力方面の第一次渡河部隊として行動せしが攻擊命令を受くるや氏は敵彈を冒して河岸に進出し詳細なる偵察を行つた折柄月明なるに鑑み中隊を疎開し晝間に準じて攻擊せんと欲し渡河を準備した。此頃敵兵は我攻擊を察知し猛烈なる射擊を行つた。氏は主力機關銃の射擊開始と呼應し大冊河の渡河を決行し中洲に在つた敵を驅逐し敵岸に上陸した。水深くして腰に達し敵の陣地は數ヶ年を費して構築せる堅陣守兵は支那中央軍の精鋭數ヶ師にして皇軍を陣前に殲滅すべく頑强に抵抗せしが氏は之を物ともせず部下を叱咤激勵し敵の第一線陣地を奪取した。斯くして至難なる敵前渡河に於て先づ據點を確保し大隊主力の渡河を掩護した。其功績や實に偉大なりと云ふべきである。

當時左第一線部隊も渡河し敵陣地に突入せしも該方面は陣地堅固にして前進困難なるの狀況であつた。氏は部隊全般の爲最も迅速に當面の敵陣を突破するの必要を感じ鋭意突進を繼續し目前二十米には迫擊砲及手榴彈が物凄く炸裂して居たが再三の突擊に依り第二線を奪取し更に進んで突出するに至りしを以て前方のみならず左右後方より敵の十字火を浴びて死傷續出し戰況は頗る慘烈を極はめたが氏は毫も屈する所なく手榴彈を叩きつけて血路を開き敵兵數名を自ら叩き斬つて第二線に突出し數次の敵の逆襲を擊退し猛然として其第三線を奪取確保せんとした。卽ち小池小隊に命ずるに黃村占領を以てし將に同村西北角を奪取せんとせし時不幸にして一彈の爲大腿部を貫通され動脈を切斷し頗る重態に陷つた。然れども氏は其苦痛を包みながら折柄第一線正面に逆襲し來たれる約三百の敵に對し猛烈なる攻擊を命じ自から軍刀を振ひ突入せんとせしも出血夥しく再び立つ能はず壯烈なる名譽の戰死を遂げ北支の華と散りしは惜しみても尙ほ餘りある次第であつた。

氏の玲瓏高邁なる精神たるや氏を核心とし團結堅固なる實戰的中隊の練成を完了し氏が夙夜研鑽せる卓越せる戰術は滿洲事變に將た支那事變に常に赫々たる武勳を奏して一隊上下の信望を荷ひ前途洋々たる驥足を伸ばし得たるならんに聖戰の半ばにして玉碎せるは皇軍の爲轉た痛惜を禁じ得ない。さり乍ら人生死所を得るや洵に難し氏は此聖戰に參加して溫情古老に及び壯烈鬼神を哭かしめ報國の丹心天地を貫き其功績や皇軍戰史に異彩を放ち百世の將兵仰いで以て龜鑑となし其英靈亦永遠に生き尙も皇國並に一家の守護神として尊き加護を垂るべく殊には幼き愛子が胸に血肉に氏が魂を刻みつけぬでは措かぬであらう。

氏は戰死の日步兵少佐に進級し次で從六位勳五等に叙し雙光旭日章並に功五級金鵄勳章を賜はつた。

氏や眞に滿洲事變に於て偉功を奏し今又支那事變に參加し勇戰奮鬪能く皇軍の武威を宣揚し其大膽なる動作は先づ至難なる敵前渡河に於て前岸に據點を占領し突擊に次ぐに突擊を以てし深く敵陣地を突破し主力全般の戰鬪に至大なる貢獻を與へたるもの眞に軍人の龜鑑永く靑史を照らして餘りありと言ふべし。噫壯烈の最期なるかな。

陸軍步兵大尉正七位勳六等功五級　石倉三郎

遺憾なく機關銃威力を發揮し竟に敵地雷に斃る

氏は群馬縣群馬郡駒寄村大字漆原の人にして亡父を儀八母をワクと稱し明治三十八年九月一日を以て生れ妻カツラとの間には長男道武、次男秀昭の二愛兒がある。大正八年三月鄕里の小學校を卒業し續いて群馬縣立勢多農林學校に入學し同十一年三月同校を卒業し十三年十一月より駒寄小學校代用敎員として育英に從事して居つたが翌十四年十二月一年志願兵として高崎步兵第十五聯隊に入營し同十五年三月除隊し勢多郡大胡町農會技手となり爾來約八年熱心農村の指導開發に努め其間昭和二年四月陸軍步兵少尉に任じ正八位に叙せられた。而して昭和九年四月には勢多郡農會技手に榮轉したが同年十二月特別志願士官に採用せられて水戶步兵第二聯隊附を命ぜられ次で千葉步兵學校に入り機關銃の補備敎育を受けた。其後昭和十一年四月には麻布步兵聯隊に轉任したが同年五月より滿洲警備部隊に屬し齊々哈爾に駐屯中昭和十二年七月支那事變勃發するに及んで北支方面に出動を命ぜられ勇躍聖戰に參加するに至つた。

氏は小隊長として戰場に到着するや八月十六日までは天津附近の掃蕩及輸送の任に服し時に敵情の偵察或は警備或は保安隊の武裝解除等に參加し就中武淸縣城及其附近の敵情偵察の際の如きは斥候長として勇敢且積極的に其の任を果し所屬部隊の行動に貢獻せる處多かつた。

續いて八月十七日よりの外長城線敵陣地攻撃には機關銃小隊長として大隊長松浦少佐の指揮する第一線第五中隊に屬し終始勇猛果敢に奮鬪し殊に八月二十日湯淺部隊が察哈爾省張北南方地區長城附近の攻撃に移るや附近の地形は起伏錯綜天嶮を形成し假令弱敵の小抵抗に會するも前進極めて困難なる狀態であつたが氏は常に中隊長の意圖を體し有効適切に機關銃の威力を發揚し以て中隊の困難なる攻撃前進を容易ならしめた。就中長城線某火點の攻撃に於て第一線兩小隊中間地區より中隊主攻撃正面たる第一小隊の戰鬪に協力するに際しては勇敢にも最前線に進出して機關銃小隊の威力を遺憾なく發揚して頑敵を制壓し又勇猛果敢機敏に機動を行ひ以て中隊の戰果を擴張した。爾て敵前五六百米に進出せる頃中隊の右斜方向より盛に敵機關銃の斜射を受け爲に中隊の前進意の如くならざるに至るや氏は直ちに敵機關銃に猛烈なる射彈を送りて立所に之を撲滅し中隊の攻撃前進を容易ならしめ次いで第一小隊の攻撃目標たる(へ)火點の敵重火器散兵等に對し遺憾なく我が重機關銃の威力を發揚し爲に中隊は午後七時三十分諸隊に先んじ長城線(へ)火點を奪取するに至つた。斯くて中隊が(へ)火點を占領するや氏の小隊は直ちに前進して再び敗退する敵に對し猛烈なる射彈を送り多大の損害を與へた。

(へ)火點の奪取に引續き第五中隊は其の南側トーチカの占領を命ぜられしが當時同中隊第三小隊長負傷し連絡下士官中山軍曹代つて小隊の指揮を執りつつありし爲中隊長は機關銃小隊長たる氏に部下機關銃一個分隊と共に第三小隊を併せ指揮し該トーチカ占領を命じた。氏は勇躍第三小隊を指揮し猛烈に攻撃前進し遂に該トーチカに據れる敵を一掃し完全に之を占領した。折しも夕景より降り出せし雨は愈々激しく四圍暗黑となりし時豫て敵が該トーチカに仕掛けし集團地雷は突如一大音響と共に大爆發をなし惜しくも氏等は該トーチカに於て壯烈なる戰死を遂げ長城線の華と散つた。

噫聖戰の初期に於てあたら斯の有爲の士を喪ふ誠に痛惜極まりない。然れどもやがて竣成すべき新東洋の大建設を思ふの時氏の尊き犧牲は之が礎石中の礎石とも讃ふべく其の赫々たる武勳は氏の勇名と共に千載青史に異彩を放ち獨り氏の遺兒のみならず萬代に家系の誇りとなつて一門の士を感化激勵し其靈魂は護國の神となりて皇國を守護し遺族に祐を垂るであらう。

氏は戰死の日歩兵大尉に進められ正七位に叙し次で勳六等單光旭日章並に功五級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵大尉正七位勳五等功五級　田村房夫

壯烈工兵の鐵門爆破に肉接して突撃を敢行す

氏は山口縣吉敷郡小郡町大字下郷の人にして亡父を元右衛門母をよねと稱し明治三十二年八月一日を以て生れ妻さめとの間には芳子と云ふ愛兒がある。大正二年三月小郡尋常高等小學校を卒業し同年四月より山口區裁判所小郡出張所に勤務して居た。資性温厚にして忍耐力强く又思慮周密にして不言實行常に優秀なる成績を擧げて居た。區裁判所小郡出張所勤務中は日中の勤務終れば夜は中學校夜學部に通學し閑暇を得れば必ず家業を手傳ひ萬事に几帳面殊に其の父母に仕ふるや敬虔慇懃眞に世上の模範と推賞されて居つた。氏は幼時より身體極めて强健將來は軍人となつて國家に盡さんと心に期し人にも話して居つたが大正七年十二月現役兵として山口歩兵第四十二聯隊に入營することゝなつた。斯くて翌八年七月西

伯利亞事變に出征して歩兵伍長、約一ヶ年半後には歩兵軍曹となり聯隊本部附を命ぜられ昭和三年曹長に進み第二十一旅團司令部附に轉じ同年十二月には選ばれて少尉候補者學生として陸軍士官學校に入學五年十一月卒業六年三月歩兵少尉に任じ八年十二月中尉に進み次で昭和十一年三月には支那駐屯軍に派遣せられ爾來主として天津に在つて服務して居たが昭和十二年七月七日突如發生の支那事變に會し直に出動した。而して同月十四日所屬部隊が通州警備の爲北進を命ぜらるゝや氏は小隊長として物情不穩なる裡而かも百二十度を突破する炎暑を冒し勇躍衆を激勵し其の難行軍を遂行せしめ通州到着後は至嚴なる警備と一觸即發の狀況下に於て氏は常に一隊の志氣を旺盛ならしむるに努め中隊長を輔佐して警備勤務に教育訓練に熱烈なる活躍を續け以て中隊の任務遂行を遺憾なからしめた。

七月二十六日夜在通州萱島部隊は南苑方向に對する前進に先ぞち南門外支那軍一營約七百名の武裝解除の爲め午後十一時五十八分宿地たる通州師範學校を出發した。此の武裝解除に際し吾が部隊は万一に備ふる爲二十數個の擲彈筒を南門東側城壁上に排列し氏は選ばれて其指揮官を命ぜられた。氏は暗夜困難を排して自ら各筒に位置目標射程射角等の諸元を決定附與し愈々其射擊實施に當りては敵彈飛來する城壁上に在りて從容射擊指揮に任じ有效なる射彈を送り我が部隊爾後の戰鬪を大に有利ならしめた。斯くて二十七日拂曉愈々攻擊前進に移るや氏は第二中隊第一小隊長として大隊主力の攻擊正面たる第二中隊右第一線を擔任し敵の最も堅固に準備せる正面に向ひ先頭に立ち部下を激勵勇進せしめしのみならず或は單身高粱畑に潜入して敵の位置態勢等を確め適時適切なる意見を中隊長に呈して中隊の戰鬪指揮を容易ならしめ又主力機關銃歩兵砲等に射擊目標を通報して中隊の攻擊を容易ならしむる等第一線小隊長として遺憾なき活動を續けた。

やがて小隊は敵前約百五十米突附近に近づくや正面圍壁の銃眼よりする狙擊と右側廟内よりする近距離狙擊並に右方諾洽中學校舍よりする射擊とに依り文字通りの十字火を蒙りしも配屬重機關銃は勿論主力重機關銃隊に要求して左方の廟に據れる敵並に右方諾洽中學の敵を制壓し巧みに小隊を指揮して常に大隊の各線よりも最も敵に近く進出し、遂に中隊が道路東方丘上高粱畑の敵に對し突擊を敢行するに當りては卒先又先頭に立ち突入、敵を擊退し茲に戰捷の第一歩を獲得した。當時我は死傷續出せしが氏は聊かも屈する色なく次で中隊は敵の左側背を攻擊すべき大隊命令を受け諾洽中學校東側に移動し中隊長は氏の小隊を右第一線として敵の複廊に突擊準備を命じた。氏は巧に地形を利用して一進一止敵前七十米に近迫し諾洽中學校鐵門に對する我工兵の爆破成功と見るや機を失せず之に肉接し敵手榴彈間斷なく炸裂する間を敢然陣頭に立ち件の爆破鐵門孔より敵陣に突入せんとして起つた其刹那無念にも氏は敵の手榴彈の爲めに右下顎部及頸動脈咽喉部等に瀕死の重傷を負ひ中隊指揮班の三海軍曹に對し反覆「起せ〳〵」と叫びつゝ壯烈なる戰死を遂げた。

氏、兵馬倥偬の間七月二十日附を以て通州師範學校より鉛筆の走り書きにて鄕里の夫人に宛てた氏の絶筆となりし音信の一節を見るに

『今度こそ覺悟のしどき、之が絶筆となるかも知れん。天津を出發する時荷物を全部始末して若し戰死でもしたら直ちに內地に送り返へして貰ふやうに札まで附けて出て來た。芳子を朗かな女らしい一人前に養育して呉れ賴む。身體の餘り丈夫でないお前だから呉々も用心せよ。家族の者にもよろしく云つて呉れ。』

とある。氏の如き平素に於て身を修め德を積み毫も悔ゆることなき生活を營める士にして甫めて斯くの如く雄々しき絶筆

を草し得るものと思料し轉た敬服に堪えない。

又松原中隊長が氏の戰死を悼める信書の一節に曰はく

『君事に臨むや徹底的に實行せり戰に臨むや豪氣にして沈着、業務に就くや研究周密にして微細をも漏さず、指揮官として臨むや凛然として犯すべからざるものあり、教育者として臨むや溫厚篤實、生れながらにして持ちし才幹と其人格とは常に無言の中に人心を掌握す、蓋し軍人として典型なり(中略)君の最期に當り友人として田村君と叫んだ、君は靜かに顏を上げて見て呉れた、何か言ふことはないかと尋ねた、唯何物をも語らず、田村君しつかりして呉れと云へば頷き呉れて其死期の迫るも何物をも考ふる風なく從容として死に就いた。實に美事な最期であつた。

今更何と言ふ言葉もなく武士の華こそ斯くなくしてはならぬ。敵彈絶間なく身邊に落つる間僕は僕自身教訓を與へられた。君の死は悲しいけれども君の靈は永久に北支の地を護つて呉れる。皇軍の精神を生かして呉れる爲め軍人の本懷を盡して世を去つたのだ(下略)

嗚、直屬上官をして斯くの讃辭を發せしむ平戰兩時を通し氏の人格の高邁又其勳功の偉大さが偲ばれるではないか。氏の忠魂が今や護國の神として極東恒久の平和に加護を垂るゝは勿論一家一門の萬代に及んで甚大なる誇りと感化とを附與するを思ふの時其の價値の尊さは尋常一樣の長壽者も遠く及ぶ所ではあるまい。

氏は戰死の日歩兵大尉に進められ從七位に叙し次で勳五等雙光旭日章並に功五級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵大尉正七位勳五等功五級　中島覺

遭遇戰に機先を制し克く戰捷の途を拓く

氏は大分縣日田郡有田村の人にして亡父を松次母をアサと云ひ明治三十八年二月二十八日に生れ亡妻裕子との間に嗣郎賢郎の二愛子を擧げた。性溫順謹直にして上下の信望厚く鄉黨の中堅人物であつた。進取の氣象に富み熱誠倦む事を知らずと云ふ風にて諸事優秀なる成績を擧げて居た。例へば鄉里の在鄉將校團副分團長分會長青年訓練指導員社會教育委員青年團長消防機械係長等多數の公共團體の役員を兼務せるに拘はらず往くとして可ならざるなく常に模範者として表彰されて居た。殊に若くして父を喪ひし後は母に仕へて孝養至らざるなく數多の弟妹を慈しみ又教員として生徒に對する同情親切心深く校内敬慕の的となつて居た。鄉里の高等小學校卒業後直に大分縣立日田山山林學校に入學大正十二年三月同校卒業同年五月東京大林區署雇を拜命し大町小林區署に在勤昭和二年七月以來は鄉里西有田小學校の代用教員を拜命し翌三年三月朝鮮忠淸北道產業技手拜命在勤中の處父の死亡に依り歸鄉同年十二月より大分縣立山林學校助手として勤務して居た。大正十四年十二月一年志願兵として歩兵第四十八聯隊へ入隊し熱誠軍務學術の研究に從事し優良なる成績を擧げ又兵員に對する同情心深く之を勞はり率先垂範常に志氣を鼓舞し殊に行軍力に於ては聯隊隨一と稱せられて居た。昭和四年三月歩兵少尉に任官し正八位に叙せられ其後數回勤務演習に召集せられ成績優秀に付聯隊長より表彰せられ又旅團長師團長よりも表彰せられた。昭和七年特別志願將校として採用せられ歩兵第七十九聯隊附となり昭和十一年九月歩兵中尉に進級した。

支那事變勃發するや森本部隊に屬し昭和十二年八月下旬勇躍征途に就いた。斯くて九月中旬よりの涿州保定會戰に於ては馬各庄、凹世庄、夏村、東瓜坨庄、數庄頭、沈家佐の各戰鬪に參加し勇猛果敢適切なる戰鬪指揮に依り頑敵を屠つたが

就中九月二十三日沈家佐附近の戰鬪に於ては第二大隊第八中隊長として先づ尖兵中隊長となり適切機敏に敵情を搜索し正面の高地を占領して所屬大隊の展開を掩護し其後右第一線中隊長として多數の自動火器を有する敵を猛烈に攻擊し急峻なる山徑を攀ぢ登り頑强に抵抗せる敵を擊破して其左側背に進出し突入に方りては率先陣頭に立ち敵陣地の左翼を奪取し以て敵主力をして敗退せしむるの動機を作爲した。

續いて十月七日石家莊及び滏陽河附近の戰鬪に於ては所屬聯隊は靈壽附近に於て不期遭遇戰を交ゆるに至つたが此日氏は再び尖兵中隊長として相家宅西端に進出するや優勢なる敵が安家宅東端に展開中なるを知り其據點たる北崗上を奪取すべき意見を具申すると同時に猛烈なる敵火を冒し獨斷勇猛果敢に當面の敵を攻擊し以て機先を制し敵の攻擊企圖を破摧して大隊主力の展開を掩護し次で果敢なる突擊を敢行して甚大なる損害を與へ以て敵全線動搖退却の動機を作爲し、左追擊隊が靈壽附近の優勢なる敵を擊滅するの因を作つたのである。當時附近は高粱桿殘存し敵情地形不明なる上優勢なる敵と不期遭遇するに方り斷乎攻擊を決行し中隊長以下多數の死傷を出したに拘らず敵を潰亂に陷らしめたるは是れ全く氏の崇高なる人格と平素より指揮統御適切にして團結堅固而かも攻擊精神の旺盛なる中隊を練成して居つた賜に外ならぬ。されば氏の中隊は時の師團長より特に表彰狀を附與せられた程であつた。

當時の戰況を今少しく詳述すれば十月七日午前八時氏の所屬部隊は北支新樂縣西方約十二里に在る南伏流附近を前進中靈壽縣（南伏流の西南三里半）附近に敵兵陣地を占領しありとの情報に接し所屬部隊は第二大隊を中央とし右側に第三大隊左側に第一大隊を部署し氏の所屬たる第二大隊は北崗上を經て尹凡同と靈壽との中間地區を前進中であつた。氏は部下中隊と機關銃一小隊とを合せ指揮し尖兵中隊として前進した。午前九時半相家宅西端に達するや尖兵小隊は俄然北崗上の部落より急射擊を受けたので氏は速に挺進して前面の敵狀地形を視察するに敵は續々北崗上に向ひ前進中なるを認め適時大隊長へ意見具申をなし先づ左前方臺上の敵機關銃陣地に突擊して午前十一時同高地を奪取した。此神速機敏なる行動は大隊主力を側射すべき最も危險なる敵を驅逐したるもので實に第一歩の先制を得たものであつた。爾後大隊の中央第一線中隊長として奮戰中であつたが敵兵は續々增加し敵彈益々猛烈にして友軍の死傷續出した。氏は折敷のまゝ指揮して居たがやがて午前十一時四十分頃中隊長殿負傷！と悲痛の叫び聲が響き渡る。胸部貫通銃創で鮮血が上衣を染めて居た。駈つけた軍醫が注射を施せば目を開き幽かにも大隊長殿へ宜しく「天皇」と叫んだが後の聲は出でず壯烈なる戰死を遂げた。場所は敵前正に百五十米で氏の胸部には數發の敵彈が命中したのである。此頃漸く我歩兵砲も到着して部落の圍壁を猛射し正午頃壯烈なる突擊を行ひ全く北崗上の部落を占領し午後四時には靈壽の敵を擊破するを得た。

氏や慧眼克く戰機を看破し處置亦神速適切にして機先を制し難局に處し動かざる事磐石の如く率先範を垂れて衆心を掌握し天晴れ皇軍歩兵の本領を發揚し一隊戰勝の端緒を開いた。天なる哉前途有爲の逸材を以て惜くも聖戰の犧牲として玉碎したが其功績は不朽にして皇軍戰史に異彩を放ち其名は大和櫻と謳はれて千載に芳ばしく其英靈亦万世に生き尙も皇猷を扶翼し奉り又一家の守護神として遺族就中幼き愛兒の將來に尊き加護を與へる事であらう。

氏は戰死の日歩兵大尉に進級し次で正七位勳五等に叙し雙光旭日章並に功五級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵大尉正七位勳五等功五級　中村佐平

猛烈果敢の突擊を以て戰捷の途を拓く

氏は長野縣西筑摩郡奈川村の人にして亡父を龜太郎母をふじと稱し明治三十六年四月十日を以て生れ妻しづ江との間には仁美、文美と云ふ二人の愛兒がある。大正四年三月奈川小學校を卒業し爾後家庭に在つて父母の手助けをなし傍ら獨學を續けて居た。斯くて大正十二年一月現役志願兵として歩兵第六十聯隊に入營し下士官志願を爲し翌十三年十二月歩兵伍長に任ぜられ同十四年五月歩兵第三聯隊に轉屬同年十二月歩兵軍曹に昭和七年一月歩兵曹長に進み同年六月北支那派遣歩兵第一大隊第二中隊に編入天津駐屯の勤務に服し翌八年二月功に依り勳八等に叙せられ十月内地に歸還し十二月選ばれて少尉候補者學生として陸軍士官學校に入校し同九年四月勳七等に昇叙同年十一月陸軍士官學校を卒業し翌十二月歩兵特務曹長に同十年二月歩兵少尉に任官十一年五月滿洲駐屯部隊に轉じ七月從七位に叙し勳六等を賜はつた。昭和十二年七月支那事變起るや湯淺部隊に屬し北支方面に出動し八月二日には歩兵中尉に進級した。氏は意志堅固にして遂げずんば息まざる氣慨を有し堅忍努力達識萬能の士として平素上下の深き信望を擔つて居つた。其の戰地に到着するや速射砲中隊第一小隊長として八月十六日までは天津附近の殘敵掃蕩及警備勤務に服せしが八月十七日よりは外長城附近の戰鬪に參加し次で二十二日敵を萬全に向て追擊するや氏の小隊は午後四時頃第一線の第一大隊に協力を命ぜられ同大隊に追及の爲前進中彈藥補給の爲第一線に向て前進しつつありし自動車部隊が水魁北方三百米の地點に於て水魁部落及其北方高地の敵より猛射せられ死傷續出苦境にあるを知り氏は直ちに卒先して陣頭に立ち部下を激勵して水魁部落の敵前二百五十米の地點に進出し其速射砲を以て敵の重機關銃を撲滅し危急に瀕せる我が自動車部隊を救援し次で第一大隊に協力し水魁兩側高地上の敵

目動火器及同地南方の望樓に猛擊を加へ多大の損害を與へた事は同夜敢行せし所屬兵團の夜襲成功に偉大なる効驗を爲した次第である。更に翌二十三日午後三時敵は逆襲に轉じ來り我が第三大隊は之を迎擊した。此の時水魁東側高地に陣地を占領せし敵の重機關銃が我が第三大隊の攻擊を大に妨害しつつあるを見た氏は直に之を砲擊し遂に敵をして退却の已むなきに至らしめ鼓に赫々たる武勳を奏した。次で八月二十五日よりの張家口附近の戰鬪に在りては二十五日午前八時三十分第一線第十中隊及第一大隊に協力を命ぜられ楊家庄東北約千米の臺上にある聯隊本部の左に陣地を占領し最初待機の態勢にありしが午前十時頃より敵は氷走河左岸及其支流河原に逐次兵力を增加し其一部は我が第十中隊左翼方面より包圍の態勢を執り來り爲に我が第一線の前進は次第に困難の狀況に陷つた。是に於て氏は擾を逸せず敵火の下に剛膽沈着適切なる射擊指揮を以て先づ城壁上より我が第一線を縱射する敵機關銃を僅かに七射彈を以て撲滅し續いて敵包圍部隊に猛射を浴びせ之に殲滅的打擊を與へ鼓に第一線の攻擊は氣勢を輓回し敵は包圍の企圖を斷念して敗退するに至つた。又翌二十六日には石頭屯南方より我を砲擊する敵迫擊砲を射擊して之を沈默せしめ午前十一時老鴉生の攻擊に移るや地形極めて險惡にして前進頗る困難なる裡克く部下を督勵して前進し途中現出する敵の自動火器を逐次に撲滅して我が第一線部隊の前進を頗る容易ならしめ更に九月六日七日の天鎭附近の戰鬪に於ても速射砲中隊第一小隊長として活躍し續いて八日九日の陽高附近の戰鬪に於ては氏の速射砲中隊は第二大隊に配屬せられ氏は松浦少佐の指揮下なる舟津中隊に屬して奮戰した。而し

て八日午前十時より攻撃を開始し午後七時には城壁の一角を續いて九日午前六時には陽高城を占領するに至つた。

九月十日より十二日に亘る棗樂堡附近の戰鬪及同十三日より二十四日に至る大同附近の戰鬪に於ては何れも大隊長小浦少佐の指揮下に第九中隊長代理として參加した。其間十三日より二十一日までは第九中隊長として大同の警備に又二十二日より二十四日までは中隊長村澤大尉の指揮に屬し愈々其第一小隊長として九月廿五日より廿九日までは下社附近の戰鬪に參加し十月二日より崞縣附近に轉戰したが悼しくも氏は鼓に華々しい最期を遂ぐるに至つた。當時氏は小浦大隊村澤中隊の第一小隊長として四日午前六時半中隊は大隊に追及して豫備隊となり翌五日大隊は崞縣城の敵情並に地形を偵察した る後主力を以て夜暗を利用して山橋村北側に展開し黎明を期して敵の不意に乘じ攻撃に出でた。此の時氏は小隊全員を指揮して大隊の右第一線に加はるべき命を受け第一線に增加するや拂曉と共に猛烈なる射撃を開始し敵を震駭せしめつつ配屬機關銃の掩護下に勇猛果敢に前進し遂に山橋村中央部落の一角に突入同地を奪取した。然るに敵は堅固なる圍壁に據り手榴彈を以て頑強に抵抗したが氏は部下を激勵し之等の敵を排撃しつつ逐次戰果を擴張し午前八時遂に中央部落を完全に占領し旅團の進出並に大隊爾後の戰鬪準備を容易ならしめた。

而して同夜氏は中隊主力と共に同地を守備しつつありしが此間三回に亘り敵は執拗にも手榴彈を投じつつ猛烈に逆襲し來りしも氏は克く部下を掌握して機に應じ殲滅的打撃を與へて其の都度之を撃退し。次で大隊は翌早曉より山橋村東方部落の攻撃準備に移つた。時に我が砲兵主力も亦之に協力し敵陣地に對し巨彈を浴せたる爲め敵は此の猛烈なる射撃威力に全然姿を隱したるを以て此機に乘じ大隊長は突撃を命じ鼓に左第一線たる第九中隊は氏を先頭とし敵陣地に肉迫一發の敵彈をも蒙る事なく圍壁二、三十米に近接し得た。然るに敵は此時俄然再び姿を現はし猛烈に手榴彈を投擲し掩蓋機關銃も亦之に呼應して熾烈なる側射を開始し我が突撃を極力妨害した。剛膽なる氏は毫も之等に屈することなく敢然として突撃を反覆したるも意外に堅固なる圍壁に妨げられ且つ敵の手榴彈の飛來猛烈を極はめ竟に敵前十五米に於て其の全彈を左肩甲部に受け壯烈なる戰死を遂げた。

氏の經歷を閲するに所謂立志傳中の人たりし事疑を容れず。就中軍人としての修養に至りては誠に感激に堪えざるものあり。陣中時に泰然林の如く時に猛然疾風の如く其の沈着勇敢なる行動態度は生死の觀を超越し君國の爲には萬死を辭せず死を視ること歸するが如く以て己が武職を完うし赫々たる武勳を青史に留め勇魂卒然として天に歸す。將に是れ皇國軍人の龜鑑である。必ずや其忠魂は護國の神となり加護を極東恒久の和平に致し又一家殊に其愛兒の前途に尊き祐を垂るるであらう。

氏は戰死の日歩兵大尉に進められ正七位に叙し次で勳五等双光旭日章並に功五級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵大尉正七位勳五等功五級　藤井進

壯烈遣縣主陣地一番乘りの功を樹つ

氏は鳥取縣東伯郡社村の人にして父は伊藏亡母をつねと云ひ明治三十七年八月三十日に生れ藤井たけのの養子となり妻まつ子との間に幹雄孝子の二愛兒を擧げた。性溫良恭儉にして熟慮斷行の氣魂を有し特に慈愛心に富み責任觀念厚く諸人の信望を受けて居た。大正七年三月社高等小學校第一學年を終了後直に鳥取縣立倉吉農學校に入校し大正十年三月同校卒業大正十三年十二月一年志願兵として鳥取歩兵聯隊へ入隊し昭和三年三月歩兵少尉に任官し正八位に叙せられた。退營後は鄉里にありて農業に從事し社村青年團長青年訓練所指導員に就任し實踐躬行以て活模範を示しよく團員及後進者を指導

誘掖し又村内の爲公共事業に貢献する所多く村民の感謝敬仰の的となつた。昭和八年十二月特別志願士官として歩兵第四十聯隊へ入隊昭和十年十二月陸軍歩兵學校へ分遣せられ翌十一年三月同校卒業同年十二月歩兵中尉に進級し從七位に叙せられた。

支那事變勃發するや長野部隊に屬し第四中隊長を命ぜられ勇躍北支戰線に赴いた。氏は統御宜しきを得千差萬別の部下を打ちて一丸となし忽ち團結堅固なる中隊を練成するに至つた。蓋し氏の常住坐臥は自ら至誠奉公の現れにして部下の起居衛生に至るまで細心の注意を拂ひ又懇切丁寧にして且得意の教育技能は克く部下に實戰の諸要求を自覺徹底せしむるに至り氏自身亦戰機の看破並に指揮共に適切にして部下皆悦服して居たからである。

斯くて九月上旬馬廠附近の戰鬪に於ては所屬大隊は九日午前五時半より小王莊の敵陣地を攻撃し其一部を奪取したが殘敵は尙附近の陣地に據り頑强に抵抗して居た爲大隊長は大隊主力を第二中隊の右翼に延伸展開し小王莊の攻撃を續行せしめ氏の中隊を大隊豫備隊となし右側背の掩護に任ぜしめた。然るに流河鎭西北角附近に在りし敵の監視部隊が出撃し來り大隊の小王莊攻撃意の如く進捗せざるを目撃せる氏は獨斷流河鎭西側の敵監視部隊並に同地西北角の自動火器に對し猛攻を加へ敵を該方面に牽制し以て大隊の小王莊奪取並に其確保を容易にし併せて其後大隊の流河鎭北端への突撃を容易ならしめ同日午後三時十分附近一帶の敵を完全に掃蕩するを得た。

氏は其後滄縣附近の戰鬪に活躍するに至つたが九月十七日には大隊長の指揮する右捜索隊の左第一線中隊となり石家樓附近より攻撃する目的を以て運河左岸地區の敵情地形を捜索中であつた。此時右捜索隊右第一線中隊は大滿子營附近に達し同中隊より派遣せる岡村將校斥候は旱林庄――姚庄子間の道路偵察に從事中姚庄子附近の敵より狙撃せられ死傷者を出したが之が收容不可能となり該正面の擔任たりし藤井中隊に援助を求めて來た。氏は之を快諾し自ら部下の一部を指揮して之を收容せしむると共に敵情捜索に任じたが當面の敵の戰備が薄弱なるを看破し直に中隊主力を以て獨斷之を撃破し同部落を占領確保した。之が爲敵主陣地に對する偵察を極めて容易ならしむるに至り右捜索隊の任務達成に大なる利益を與へたのみならず運河右岸に進出しありし左捜索隊の李家樓攻撃の機運をも醸成し其攻撃實行を一日早むるに至つた。

九月二十三日午後六時二十分氏の中隊は大隊の右第一線中隊として重機一小隊の配屬部隊を併せ指揮し薄暮を利用し敵の監視部隊を驅逐しつつ敵主陣地の一部たる東花園附近の敵を攻撃するに至つた。抑々滄縣附近の敵陣地たるや敵が津浦線上の主抵抗線であり長日月の日子を費し半永久の陣地を構築し不落の堅陣を誇つて居た。氏が中隊は運河東側地區の陣地に向つたが其堤防上には堅固なる掩蓋機關銃が五個一列に重疊し其前面には二條の鐵條網と二條の水濠が張りまわされ運河の西側陣地からは重火器の火網が準備されてあるので全く難攻不落の堅陣たるを思はしめた。併し忠勇義烈の氏は意氣軒昂必勝を期し配屬の決死工兵を部署し自ら陣頭に立ち膝を浸する濕地を渉り泥深き水濠を超え歩一歩敵陣地に肉薄すれば敵は十字の猛火を集中して陣前に我を撃滅せんと必死に抵抗するので我が死傷者は續出するに至つた。氏は倒れし兵に確かりせよと勞はり乍ら軍刀を振りかざし猛然塹壕に斬り込んで主陣地の一角を占領した。時正に午後八時十分にして滄縣攻略戰の一番乘であつた。聯隊長よりは特に電話を以て祝意を表して來た程で此成功は全聯隊の志氣を鼓舞せるは申す迄もない。敵は無念に堪えかねて幾度が新手を代へて奪回を試みたが氏は嚴然部下を督勵し美事に敵を撃退した。だが

敵の堅壘は更に奥深く設けてあり重火器の敵彈は絶え間なく身邊を掠め飛んで居た。氏は惡戰苦鬪の中にも傷者の手當を命じ後續の部下を激勵し第二陣地へ突入の機會を待ち構へ二十四日の東天漸く白む頃ほひ二た度突擊命令を下した。依然として濕地や鐵條網の障碍に惱まされ又熾烈なる敵火に曝されながら敵陣地に肉薄すれば敵は手榴彈を霰の如く投擲し加ふるに逆襲を反覆し愈々慘烈なる戰況を現出したが氏は沈着常に陣頭に立ち部下を激勵して二個の掩蓋機關銃を奪取し次で第三番の大掩蓋機關銃に遭遇するや中隊の攻擊に協力すべき工兵に之が爆破を命じ中隊を之に連繫して同銃座の右側背に進出せしむべく行動に移つた。やがて傳家の寶刀一閃殺氣横溢天地に轟く大音聲を以て突入を命じ卒先斬込めば敵は懼れをなして一散に遁げ出したが氏は電光石火三四名の敵を斬り斃した。あゝ壯烈勇武部下皆仰いで以て一隊の志氣天を衝くの概があつた。愴くや此時敵の投げたる一手榴彈は氏の脚下に轟然として炸裂し氏を初め附近の部下十數名も重輕傷を負ひ氏は其場に倒れた。部下等は其身の重傷をも忘れ中隊長殿！　と叫んで走り寄つた。氏は氣息奄々とぎれ〳〵に工兵の五勇士を殺すな！　而して最後に　陛下の萬歳を奉唱せんとてバアーと唇を動かしたが午前三時五十分黎明の月冴え渡り銃聲の斷續する敵陣内に爾後の戰況に心を置き乍ら絶命した。部下等は暗涙に咽びつつ默禱を捧げ云はん方なき哀愁と落膽の交錯に陷つたがやがて憤然として復讐心に燃え逐次堅陣を粉碎し大隊豫備隊を以てせる戰果擴張と相俟ち二十四日午前十一時三十分全縱線陣地を突破した。

噫劍電彈雨の中に部下の小隊長に遭ひては未だ生きて居て呉れたか！　もう一息だと勵まし常に自ら陣頭に立ち戰機を捕へて適切機敏に堅陣を拔き以て所屬部隊に戰勝の途を開いた。寔に是れ智仁勇兼備の良指揮官であつた。宜なるかな畏くも侍從武官を現地差遣の砌り長野部隊長は氏の最後の勇戰奮鬪と其赫々たる武勳とを奏上し又鄕土の新聞社は氏が爲に作爲せる軍歌數種を掲載して其忠烈を表彰せしことや。氏の功績は滄州戰の華たるのみならず皇軍戰史に異彩を放ち其名は大和撫と謳はれ天晴れ皇軍將校の龜鑑たるものであつた。聖戰の半ばにして此人格力量共に卓越せる良指揮官を喪へるは痛惜に堪えないが其英靈や永世に生き尙も皇國竝に一家の守護神として尊き加護を垂るべく其芳名は千載に語り傳へて軍國の華と讃へらるるであらう。

氏は戰死の日步兵大尉に進級し次で正七位勳五等に叙し雙光旭日章竝に功五級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍砲兵大尉正七位勳六等功五級　杉本賢三

觀測班長として殊勳を奏す

氏は三重縣員辨郡梅戸井村の人にして父を吉左衞門母をよねと云ひ大正二年三月三日に生れ未た獨身であつた。性質淡白豪膽にして敬神仁義の念厚く殊に孝心深くして又弟思ひであつた。昭和二年三月笠間小學校卒業後三重縣立桑名中學校に入學し昭和六年三月同校卒業同年四月陸軍士官學校豫科へ入校其後野砲兵第十聯隊へ配賦せられ昭和十年六月陸軍士官學校本科を卒業して砲兵少尉に任ぜられ昭和十二年十二月陸軍砲工學校へ入校在學中勳員下令となり原隊へ復歸し八月中尉に進級し福榮部隊に屬し征途に就いた。母國を去るに當り實家に宛てたる信書は氏の面目躍如たるものがある。卽ち「出征に當り何等申上ぐる事なきも只々皆々樣御壯健にて心を協せ　御上の御爲に一家團結の御力を盡され度御願申上候私としては思ひ殘す事一物も無之勇氣百倍の喜に充ちて戰地に向ふべく候父祖以來受けし大恩を報じ奉るは此機會あるのみにて大いに一身を捧げて盡すべく候。では御機嫌よろしく」とあつた。

斯くて八月下旬より九月初旬に亘り津浦線二堡王口鎭劉莊の攻擊に當り中井支隊の配屬せられたる野砲兵第三大隊の大

隊觀測班長として活躍したが九月一日及二日は砲兵斥候となり王口鎮朱家村大劉村間の道路偵察並に小劉庄方向の敵情地形の偵察に任じた。其間氏は周到なる着意と豪膽なる行動とを以て正確機敏に所望事項を偵察し特に二日の如きは敵の警戒線内に潜入して尙村附近の敵陣地を詳細に偵知し以て支隊長の決心に重要なる資料を提供した。九月三日午前九時四十分支隊の東西子牙鎮の堅陣に對し攻擊を開始せし以後は大隊觀測所に在りて諸情報の蒐集に、關係部隊との連絡に、砲兵火力運用の諸計畫に、適切機敏に大隊長の戰鬪指揮を輔佐し以て大邀舖小邀舖及東西子牙鎮立藏莊等の步兵戰鬪に協力して砲兵大隊の全威力を發揮せしめ之れが爲支隊は九月五日夕迄に東子牙鎮附近一帶の敵陣地を完全に奪取するを得た。五日夜引續き劉莊の陣地を攻擊したが氏は大隊觀測所に在りて大隊長を輔佐し翌六日午後三時第一線步兵の突擊實施の機迫るや氏は觀測斥候となり第一線に挺進して大隊火力の射擊效果を觀察して適時大隊長の戰鬪指揮に資し。次で午後三時半步兵第六中隊長と共に我が砲彈に膚接して子牙河左岸劉莊の集團家屋の陣地に突入し機敏に屋上に登りて砲兵射擊の指導に任じ退却中の敵に對し殲滅的の打擊を與へ更に步兵と共に敵に尾して敵陣地の後端に進出し劉莊南方約一吉米の堆土を利用して收容に任じありし敵擲彈銃並に附近に蝟集混亂しある敗敵を求めて之に猛射を加へ全く之を壊滅に陷らしめ支隊戰勝の獲得に貢献する所偉大であつた。

九月中旬に於ける馬廠附近東辛莊の攻擊に際しては九月九日砲兵斥候となり周密大膽なる行動に依り十日早朝に於ける所屬大隊の行動を容易ならしめたるのみならず友軍步兵大隊が暗夜の爲攻擊目標を誤らんとせるを未然に防止した。十日午前五時半より支隊の攻擊開始より十二日拂曉東辛莊の敵陣地攻略に至る間は主として大隊觀測所に在りて大次花　李次花、張次花の敵陣地に對する步兵攻擊の支援。苟王村附近の敵陣地に對する騎兵隊の攻擊支援。東辛莊附近の陣地に對する攻擊準備射擊及攻擊支援等に關し大隊長の戰鬪指揮を輔佐し又十日夕及十一日午前には觀測班の一部要員を指揮して勇敢にも第一線步兵部隊の線を超えて敵陣地に接近し敵彈を浴びつゝ重要なる敵情を搜索し以て北趙扶及其附近の敵陣地に對する適切なる射擊計畫を立案愈々攻擊に方りては砲火の最大威力を發揚せしめ步兵の攻擊動作に支援した。

九月中旬滄縣附近南趙扶鎭の攻擊に於ては氏は十三日午後觀測班及觀測小隊の一部を指揮し北趙扶に於て敵彈雨飛の中に中趙扶南趙扶鎭附近の敵情及地形の偵察に任じ重要事項を搜索し十四日午後には北趙扶觀測所に先行して敵情搜索及射擊準備に關し各中隊に基準を與ふる等機敏に戰鬪準備を整へ又支隊長の命令に依り氾濫地帶を突破して兵團長に諸報告の提出並に連絡に任ずる等献身的に任務を遂行した。

九月下旬滄縣附近の攻擊に於ては九月二十二日戰場に到着するや所屬大隊陣地變換の爲先づ姚官屯驛北方地區に至る道路偵察に任じ次で敵彈集中の爲死傷續出しありし協力步兵部隊長の許に至りて諸協定を行ひ同日夕大隊が人合庄北端附近に陣地變換を行ふや放列陣地の左側に設けたる觀測所に於て敵彈飛來の中に樹木に登りて敵情搜索並に射擊效果の觀察に任ずる等大膽不敵の行動を以て大隊長の戰鬪指揮を輔佐し翌二十三日午前七時には直接協同部隊たりし步兵第三大隊本部に連絡し且其附近姚官屯驛北端に位置し射彈觀測に任ずると共に最も緊密に步砲兵間の連絡を保持し特に午前十時半姚官屯驛中央據兵の攻擊に方りては砲兵大隊の全火力を集中せしめて敵を壓倒し步兵の突擊を美事に成功せしめた。同日夕大隊主觀測所を同停車場中央に推進せる後は大隊長の許に在りて翌二十四日朝同停車場全部を完全に占領する迄不眠不休克

く大隊長を輔佐して適切に歩兵戰鬪に協力し敵に多大なる損害を與へた。

九月二十七日より十月五日に亘る德縣に向ふ追擊及同地附近の攻擊間氏は大隊觀測班長として道路極めて不良なるに拘らず分散追擊中なりし各中隊との連絡及歩砲兵間の連絡に關し不眠不休寢食を忘れて努力し九月三十日午前四時大隊本部及第七中隊を以て桑園停車場に到達したが兵力約一箇大隊の敵より數回に亘り襲擊を受けた。時恰も護衛歩兵なく氏は本部の下士官兵を指揮して第七中隊に協力し小銃拳銃白兵を使用し率先砲廠附近に進入せる敵に對し果敢なる突擊を行ひ敵拾數名を斃し午前六時頃歩兵の來着に先ち停車場外に之を驅逐し火砲を安全ならしめたるのみならず我軍用停車場を確保した。

十月中旬に於ける平原附近の戰鬪に於ては十月十三日午後三時雀家廟に先行して既に派遣せる三組の將校斥候より諸情報を蒐集し午後四時戰鬪開始後は大隊長の許に在りて戰鬪を輔佐した。當時所屬支隊長は平原城の西側に近く迂回して敵の背後を遮斷すべき企圖を有し砲兵隊は歩兵の側敵行動を掩護すると共に歩兵部隊に跟隨して速かに平原城の南側地區に進出すべき任務を與へられた。午後五時戰鬪尙酣であつたが迂回に任ずる歩兵隊は其行動を起し一時砲兵隊との連絡絶え砲兵隊亦陣地變換を要するに至りたるを以て氏は午後五時三十分出發正莊附近の陣地偵察に從事した。偶々迂回部隊は午後六時二十五分正莊の敵陣地攻擊中なるを知り敵の熾烈なる銃砲火を冒して正莊北方約三百米の地點に進出せる歩兵聯隊長の許に到り情報の交換及爾後の歩砲協定を終れる瞬間不幸敵彈飛來腹部に貫通銃創を受け壯烈なる戰死を遂げた。當時氏は介抱に當り居る部下を顧み「大丈夫だ」と答へ幽かにも「萬歲」と唱へ瞑目した。

氏や春秋に富み前途洋々其驥足を伸ぶべかりしに正莊一夕の風に散りしは皇軍の爲痛惜に堪えない。されど氏は出征の際述懷せる如く既に生死を超越し父祖以來の皇恩に報ひ奉るを以て己が使命となすの外餘念がなかつた。其犀利なる頭腦と平素の研鑽とは克く戰機を看破し縱橫適切なる戰鬪計畫を立案して所屬大隊長を輔佐し其細心豪膽なる行動は每戰々局に重大なる效果を齎らし以て歩砲兵協同の實を擧げ赫々たる戰勝の途を開拓した。寔に是れ皇軍砲兵將校の精鋭であり又一般軍人の龜鑑であつた。其功績は正に皇軍戰史に異彩を放ち其名は不朽に芳ばしく薫るであらう。今や風發叱咤の雄姿に接する能はずと雖其英靈は大天地に生き尙も皇國を守り又一族の守護神として淸き光と尊き力とを與へ授くるであらう。

氏は戰死の日砲兵大尉に進級し次で正七位勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵中尉從七位勳六等功五級　池淵輝久

機關銃小隊長として戰勝の途を拓く

氏は松江市殿町の人にして亡父を久太郎母をカヨと稱し明治四十一年七月九日を以て生れ妻靜江との間は二男久がある。大正十年三月島根縣師範學校附屬小學校を卒業し次で島根縣立工業學校修道館に入學し同十五月三月同校卒業、昭和二年二月鐵道省雇となり同五年四月日本大學高等工學部に入り同七年三月卒業再び鐵道省に入り同十二年九月進級して鐵道技手に任命せられた。

以上の外軍隊關係の閲歷としては昭和三年十二月歩兵第六十三聯隊に入營し所定の服役を終へて歸鄕せしが後七年三月陸軍歩兵少尉に任ぜられた。氏は資性溫厚にして寡默責任觀念極めて旺盛なる人であつた。

昭和十二年七月支那事變勃發するや間もなく應召編榮部隊に屬し北支方面に出征し早くも八月廿五日より八月四日に亘

る津浦沿線の戰鬪には第一機關銃中隊第二小隊長として之に參加し殊に九月三日大郝庄攻擊の際は附近一帶高粱、粟等密生し且つ出水泥濘の爲行動頗る困難なりしも之に屈せず小隊の指揮掌握最も宜しきを得戰鬪の初期より有効なる射擊を敵に加へ中隊の戰鬪指揮を容易ならしめ遂に大郝庄を占領するに至つた。大郝庄奪取後は直に將校斥候長として孫門口附近の敵情偵察に當り彈雨を冒し剛膽なる行動を以て巧みに敵至近距離に進出し機宜に適する有利の報告を齎らし中隊長に決心の基礎を與へ又大隊重火器使用に關し大隊長に有力なる意見を具申し以て大隊の戰鬪指揮を容易ならしむる上に一大貢献をなし續いて同日午後五時五十五分孫門口を奪取し更に夏庄の攻擊に移つた。此時氏は疊庄よりする激烈なる敵の側射を物ともせず大郝庄攻擊の際に倍徙せる困難に抗して戰場を馳驅し各所に陣地を變換し優秀なる觀測に依り適時適切なる火力を發揮し第一中隊正面の戰鬪を有利に導き其突擊に移るや敵の集中火を冒し附近の屋上を利用して有効なる追擊射擊を爲し夏庄陣地の奪取に重大なる素因を與へた。以上を綜合するに既に其武勳は偉且大なりと謂ふべきである。然るに更に九月五日午後一時燒窰盆敵陣地攻擊の爲行動を起すや氏は泥濘膝を沒する惡路と氾濫の爲水深殆ど身長に達せんとする凹地を突破して敵陣地の偵察に或は小隊の誘導に努力し中隊の陣地進入を容易ならしめた。敵は氏等機關銃陣地を發見するや猛烈に迫擊砲彈を集中して來たが氏は毫も臆することなく重大使命の遂行に專念し部下を督勵して適時適切なる地點に進出し克く機關銃の威力を發揮した。斯くて午後三時頃戰鬪は逐次進展して來たが國莊方面よりする頑强猛烈なる敵火

の爲左中隊たる第二中隊方面の戰況は意の如く進展しなかつた。之を見たる氏は直に中隊長に報告し其結果氏の小隊は大隊最左翼に陣地を變換し第二中隊の戰鬪に協力することゝなり氏は大聲にて「第二中隊長殿是から機關銃第二小隊が協力します」と叫びつゝ敵十字火を浴びながら氾濫地帶を疾驅陣地變換を敢行し鼓に急襲的猛射を送りて第二中隊の戰勢挽回に努めた。當時の戰況は筆舌に盡し得ざる文字通りの激戰なりしが氏は部下の身邊を案じつゝ自らは高粱、粟等の爲觀測を妨害せらるゝを以てさしも熾烈なる敵火の裡斷乎として高姿勢を以て觀測を繼續し適時適切なる地點に射彈を導き偉大なる效果を發揚しつゝありしに不幸敵の一彈は氏の左肩胛下部に命中し鮮血迸流凄愴言語に絶した。然かし氏は自若として迫り來る死の斷末猶且眼鏡を手より放さず觀測を續けやがて「第二中隊は前進せしや」「射彈は所望の地點に克く命中するぞ」と連呼し聲微かなれど莞爾として「天皇陛下萬歲」を奉唱し堅く眼鏡を握り締めたる儘午後四時五十五分壯烈なる戰死を遂げた。

氏は出征以來陣中常に戰友に語つて曰はく「僕は今回の出征に於て二人の兄の分をも働き一死以て皇恩に報ゆるのだ」と實に忠君愛國の至誠、犧牲的精神の橫溢唯只景仰の念胸裡に漲るを覺ゆるのみである。

嗚呼聖戰の初期氏の如き勇士を喪ふ。洵に痛惜に堪へず。然れども氏が近代兵器機關銃小隊長としての赫々たる武勳は永く皇軍戰史に輝き其忠勇義烈の行動壯絶なる最期は千載の下懦夫をして立たしめ其の英靈は不滅に生き護國の神として皇國を守護し又遺族一家の上に清き光と敎き慶福を垂るゝであらう。

氏は戰死の日步兵中尉に進級從七位に叙せられ次いで勳六等單光旭日章並に功五級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵中尉從七位勳六等功五級　伊藤英市

企圖心旺盛一面人情美に富める小隊長

氏は島根縣八束郡玉湯村の人にして父は國惠母はカメと云ひ大正元年八月十六日生れで妻愛子との間に長女壽枝次女洋子がある。資性溫良着實寡言實行の人にして思慮周密才幹あり自ら進んで難局に當り氣力旺盛熱意橫溢遂げされば已まざるの人であつた。青年學校教諭に任ぜられ應召直前まで服務し其期間短かゝりしも此間早出晩退日曜の如き一日として休暇せしことなく實に精勵恪勤生徒の信賴厚く職員は勿論一村の崇敬せし所であつた。又召されて出動するや自己を律する嚴正なるも部下を率ひるに骨肉の慈愛を以てし彈雨の下と雖も絶へず部下の狀態を氣遣ひ又部下の行動は仔細に其の留守宅にまで通知し置く等人情隊長として遺憾なく其特色を發揮して居た。昭和二年三月玉湯尋常高等小學校を昭和五年三月縣立農林學校を卒業直ちに松江市役所財務課に勤務し昭和七年十二月幹部候補生として松江歩兵聯隊に入營昭和八年十一月滿期除隊し同十一年三月歩兵少尉に任官し正八位に叙せられた。昭和十年四月島根縣立青年學校教員養成所に入所し翌十一年三月優等の成績を以て卒業八束郡玉湯村青年學校教諭に補せられ應召時に至つた。

支那事變起るや昭和十二年七月三十一日應召福榮部隊第六中隊に編入せられ勇躍征途に就いた。而して北支戰線到着後八月十七日より二十四日に亘る間天津附近の警備並に治安維持に任じ其の間或る日遺書を認め當番兵に「今日は一寸暇だつたから遺言狀を書いて置いた。俺に若しもの事があつたら遺族に送つて呉れ。背嚢に入れて置くからね」と言渡し又同人に「遺言狀は書いて置くがよい」と訓へ示した。八月二十九日二堡附近の攻擊に際しては中隊は獨立任務を帶びて搜索隊となり同日午前七時三十分行動を開始せしが午前十一時四十分氏は中隊長より部下五名を率ひ將校斥候となり二堡附近敵の警戒陣地の搜索及地形偵察を爲すべき任務を受け中隊に先行した。氏は常に斥候群の先頭に立ちて前進し危險を冒して敵陣近く接近し敵の射擊を受くるも其彈雨下に於て剛膽仔細に敵陣地を偵察し機を失せず其配備狀況を的確に報告して中隊餘後の展開並に攻擊を容易ならしめ遂に中隊は翌三十日午後二時三十分二堡を占領することを得た。

八月三十一日王口鎭攻擊に際しては午前二時在營地出發小雨降りしきる中を王口鎭に向て前進し午前五時四十分攻擊開始となるや中隊の右第一線小隊となり高粱畑然かも泥濘甚しき地形を逐次前進して敵前五百米に達した。敵彈は左右から飛來する、高粱畑の彼方よりも盛に敵砲彈が射込まれ物凄く脚下に炸裂する、何々隊長負傷と叫ぶ聲、豆を煎る如きチェッコ銃、戰場騷然たる中を氏は颯爽として奮進高粱の一列が倒れて行く、畑を出づれば敵の目標となり敵の射擊も一層激しく戰場愴徨の間にも部下を愛する氏は各分隊の位置人員に異狀はないか？　と屢々部下を氣遣ひ乍ら俺は向ふの堆土迄躍進するぞ！　と氏は全般の狀況を判斷し戰況を有利に進展せしめんが爲獨斷包圍攻擊を企圖し此頃一層熾烈となれる敵火を冒して部下を激勵拿握しつゝ一進一止勇敢なる行動に依り敵陣地の左翼側二百米の線にまで迫り以て中隊の攻擊態勢を有利に導き午前十一時五十分頃氏は尙も左翼側より敵を壓迫せんとして猛進せしが其時頭部に貫通銃創を受け幽かに陛下の萬歲を奉唱し壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。然れども中隊は氏の勇敢なる行動と有效且機宜に適せる戰鬪指導に依り午後五時五十分遂に王口鎭を占領することを得た。

將校准士官之部

氏の郷に在るや閭井の中樞となり一村崇敬の的たり。軍に從ふや統率宜敷を得部下敬慕の中心となつた。而して其戰陣に立つや斥候長として將又第一線指揮官として彈雨の下率先陣頭に立ち指揮適確衆心一致克く皇軍歩兵の精鋭を發揮した。殊に獨斷王口鎭を包圍攻擊せる處置は氏の戰鬪指揮の卓越せる技能を示せるものと云ふべきである。氏既に遺書を認めて囊中に收む。唯々小隊長たるの重責の存する所に遇往家を忘れ義に就き身命を君國に献げ斃れて已まんとす實に軍隊指揮官の模範であつた。緒戰に於て氏の如き有爲の指揮官を喪ふ痛恨禁ぜずと雖も死生命あり人亡ぶと雖も其勇名は俱ふることなく永久に青史に列し赫々の武勳は千載に輝き不滅の英魂は護國の神となり尚も皇國並に一家の前途就中愛兒の將來に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵中尉に進級し從七位に昇叙せられ次で勳六等單光旭日章並に功五級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵中尉從七位勳六等功五級　林　三平

重傷猶意闘し軍司令部の危急を未然に救ふ

氏は大分縣宇佐郡長峰村の人にして亡父を時太郎亡母をツルと云ひ明治三十七年八月十六日生で妻千鶴子との間に昭久昭夫、滿男の三愛子を擧げた。資性明朗責任觀念强く人格高潔部下に臨むや慈父の如く一同景仰の中心を爲してゐた。大正十二年縣立宇佐中學校を卒業同十五年四月一年志願兵として大分歩兵聯隊に入營昭和六年三月歩兵少尉に任官し正八位に叙せられた。在郷間は在郷軍人會大牟田市第七分會に在りて會勢の發展に盡瘁し昭和十二年四月以降推薦せられて副分會長となつた。

支那事變起るや召集せられて大賀隊に編入昭和十二年八月二十七日勇躍征途に就いた。中支戰線到着後十月十日より十三日に亘り所屬中隊が老丹宅附近の警備に任ずるや敵前二百米内外の地點に於て敵と對峙して居た。當時氏は殆ど不眠不休終始部下を督勵して極力敵情變化に留意し立派に警備の任務を完ふした。十月十四日より二十六日に亘りては中隊は許宅附近に位置し新鎭方面の敵を監視して居た。此の時も氏は小隊長として第一線に在りて敵兵壕の構築鐵條網の設置等諸種の警備作業と勤務に不眠不休の努力を致し克く其任務を完ふした。更に十月二十七日より十一月十二日に亘る間中隊が周家村附近に陣地を占領するや氏の小隊は周宅附近に陣地を占領せしが敵との距離近々百米を出でざる地點に於て晝夜の別なく敵機關銃の猛射を受くる中にありて部下を督勵し該地の守備を完うし殊に十一月十二日敵兵退却の徴あるを速かに察知して之を報告し上級指揮官の戰鬪指導に寄與せし所多大であつた。十月十三日より十四日に亘る劉河鎭附近の戰鬪に際しては大賀中隊第三小隊長として勇躍攻擊を開始し速かに吳蘇宅を占領し以て大隊の展開を容易ならしめ爾後劉河鎭の攻擊に當りては克く部下を掌握し機宜に適する指揮を爲し率先陣頭に立ちて奮戰遂に突擊を敢行して之を占領した。續いて十一月十五日より十二月十二日に亘る間軍司令部の警備に任ずるや大場鎭古里村常熟蘇州無錫句容湯水鎭各地に於ける直接警戒に當り克く其任務を完うした。

十二月十三日午前十時三十分南京方面より敵兵二、三千來襲せりとの情報に接するや直ちに中隊長に從ひ出動し午前十

時二十分子塘南方千五百米の地點に於て自動火器を有する敵約四、五百と遭遇した。此の時氏は右第一線中隊の第一線小隊長として敵の猛烈なる射擊の下に各分隊を適當の地點に散開せしめ戰鬪を開始し更に敵が中隊の右翼方面に迂回するを速かに偵知し一ヶ分隊をして之に當らしめ自ら陣頭に立ちて部下を激勵し群がる敵に猛火を浴せ奮戰大に努め機を見て攻擊前進に轉ぜんと敵の猛烈なる射擊下に於て戰線を奔走區處中遂に右大腿部に貫通銃創を受くるに至つた。然れども剛毅の氏は之に屈せず勇を鼓して引續き部下小隊を叱咤激勵しつゝ指揮して中隊當面の敵を東方に潰走せしむるに至つた。依て中隊は更に攻擊前進せんとするや氏は出血甚しく最早力盡き起つ能はず遂に後送の已むなきに至り厚き手當を受けたるも其甲斐なく十五日第三野戰病院に於て惜くも江南の華と散つた。本戰鬪間中隊は中隊長以下三十有餘の戰死傷者を生じたるも氏等の勇戰奮鬪に依り十四日午前七時三十分此大敵を潰亂せしめ湯水鎭北方高地を確保することを得た。此戰鬪終るや畏くも　宮殿下より御賞詞を賜はり又十二月二十一日尉靈祭執行さるゝや十八柱の英靈に對し　殿下親しく御參拜あらせられた。

氏の鄕に在るや鄕軍の中樞たり。出でゝ軍に從ふや軍隊の植幹たり。其人格德操は期せずして衆心を一體たらしめ而して其戰陣に立つや率先垂範戰鬪指揮適切小隊の全戰力を發揮して寡兵克く衆敵を震撼せしむ。是皆氏が身命を君國に献げ幹部たる衿持の下に其職責に邁往せる忠誠の致せる所と謂ふべきである。唯目指す南京を目前に控へて中途に斃る。長恨盡きずと雖大軍を擊破して未然に軍司令部の危難を除去し以て任務を完遂し且皇軍の威武を宣揚して一戰玉碎す。殊に殿下の御馬前に於て草むす屍となり畏くも光榮枯骨に及ぶ。死して餘榮ありと謂ふべきである。氏が樹てたる赫々たる武勳は千載に靑史を飾るべく、不滅の英魂は護國の神と仰がれ尙も皇猷を扶翼し奉り又英靈故山に留りては三兒が遺志繼承を照覽加護して已まぬであらう。

氏は戰死の日歩兵中尉に進級し從七位に叙し次で勳六等單光旭日章並に功五級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍砲兵中尉從七位勳六等功五級　岡崎宏夫

俊敏なる觀測小隊長敵襲を受け悲壯の戰死を遂ぐ

氏は山口縣豐浦郡王司村の人にして父は退役砲兵中佐岡崎輝明母はモトと云ひ大正五年二月十四日に生れ未だ獨身であつた。資性溫良純眞然かも豪放熱情的であつて部下を率ゐる若年なるに拘はらず寬嚴宜敷を得殊に溫情頗る厚く自ら瀕死の重態にあるも部下の手當を先にすることを忘れなかつた。豐浦尋常高等小學校尋常科を經て昭和八年三月山口縣立豐浦中學校を卒業引續き陸軍士官學校豫科に入校し豫科卒業の上士官候補生として小倉野戰重砲兵聯隊に配屬せられ昭和十二年六月士官學校本科を卒業した。卒業式には選ばれて天覽馬術の光榮に浴した。

支那事變起るや見習士官にて遠藤部隊第四中隊觀測小隊長として八月十日勇躍征途に就き北支戰線に到着八月二十一日戰地に於て砲兵少尉に任官した。其際家鄕に書を送りて「此軍服姿を一目にても御目にかけたればと……。來るべき戰鬪に於て永定河沿岸又は保定に於て新任少尉として花々しく普通の砲兵の如くならず一層更に〳〵第一線に推進以て此御父上樣始め奉り皆々樣の御情のこもれる軍服を身にまとひて死なんと覺悟否必ず死すべく此軍服をまとひたるのみにても滿足に有之候……」と認めてる。而て愈々九月七日より永定河附近の戰鬪開始せらるゝや七日北平出發觀測小隊長として連日多數の人馬材料を愛護しつゝ時に進路其他の偵察に先行し以て中隊の行軍を齊々圓滑ならしめ十四日梁各庄に於て戰鬪開始せらるゝや小里浦より大隊觀測班と共に挺進し敵の猛火を冒し陣地偵察及射擊準備並に敵情搜索に努め有利なる報告

を呈し且屢々重要なる目標を發見し之が制壓の爲中隊長を積極的に輔佐し以て友軍歩兵の永定河渡河に密接なる協力を爲し又敵が辛務附近を退却の際は速に之を發見し之に大なる損害を與へ得た。次で九月十五日より固安附近の戰鬪開始せらるゝや十六日觀測挺進班を指揮して前進し午前十時固安城北側に到着すると同時に突如敵の猛火を受け前進頗る困難なる狀態に陥つた。此の時氏は部隊長重要命令を第二大隊各中隊に下達し迅速に射擊を開始せしめ以て司令部及本部の危急を免がれしめた。爾後中隊の前進觀測所（固安城北側四百米）に至り獨斷該地附近に陣地を選定し速かに陣地の推進準備を行ひ中隊長を積極的に輔佐した。固安城壁破壞（歩兵突擊路）及活動中の敵機關銃の制壓には勇敢に射彈觀測の補助に努め克く其任務を達成した。九月二十一日保定附近の戰鬪開始せらるゝや二十一日挺進班を指揮し干坊附近に先行した。此の時敵の猛火を受けたるも之に屈せず偵察を行ひ適切なる陣地を選定し且射擊準備並に敵情捜索に努め翌朝よりの戰鬪に多大の貢献を爲した。而して二十二日攻擊前進開始と同時に第三分隊を指揮し干坊西側（敵陣地前約五百米）に陣地を推進し猛烈なる敵火の中にありて勇敢にも活動中の敵重火器を直接照準に依り制壓し續いて有効なる射擊は敵を震撼壓倒し我軍の志氣を鼓舞し友軍戰勝の因を作つた。翌二十三日には又挺進班を指揮し保定北側附近に至るや保定城又敵の各陣地より猛射を受けたるも之に屈せず偵察及大隊本部との連絡敵情捜索並に射擊に努め翌二十四日保定攻擊に當りては敵の猛火を冒し勇敢にも柳の樹に登り射彈觀測及敵情捜索に任じた。更に十一月二日彰德附近の戰鬪に於ては挺進班を指揮し辛庄

附近に至り陣地偵察並に射擊準備敵情捜索に任じ其指揮適切なりし爲迅速に射擊を開始することを得しめた。

十一月三日午前六時より彰德城内の擾亂射擊を開始するや敵は猛烈に我觀測所を射擊し頗る危險の狀態にありたるも氏は勇敢に射擊觀測及敵情捜索に努めた。而して午前六時四十分頃に至るや我が放列陣地の右側方約五百米棉畑より敵歩兵約三四百名逐次我陣地に近接しあるを發見し直に中隊長に報告すると同時に放列小隊長に傳へたが敵は間もなく一齊に射擊を開始して我が放列を猛射し更に棉の木に遮蔽しつゝ我陣地に近接し且右翼方向にも行動するの徴ありしを以て中隊は連續曳火榴霰彈の零距離射擊を爲し中隊の小銃携行者及輕機は勿論大隊本部より援助の小銃手及歩兵掩護小隊をして極力之が擊退に奮戰したが逐次負傷者續出し先任小隊長井上少尉も亦重傷の爲指揮をとる能はず放列は益々危險狀態に陥りたるを以て中隊長は直に觀測小隊長たりし氏をして放列の援助を命じ主として輕機及小銃手を指揮し敵の左翼を猛射し之が擊退に當らしめた。仍て氏は直に放列陣地に到り勇敢に應戰敵に多大なる損害を與へたるも敵は益々後方より增加し逐次約百五十米附近にまで近接し一層猛射を加へ來り危險は刻々迫つて來た。然れども氏は沈着剛膽毅然として陣頭に立ち部下を叱咤激勵しつゝ奮鬪して居たが午前七時五十分腹部に盲貫銃創の重傷を受け腸を露出するに至つた。然かし氏は屈せず尙も陣地に留まり腹部を右手に押へなから指揮し「敵を速かに擊退せよ」と絶叫しつゝありしが遂に力盡き起つ能はず砲手掩壕に運搬せらるゝに至つた。掩壕内は井上少尉始め貴き鮮血に染められたる十一名の負傷者により足の踏み場もなきまでに埋められてゐた。氏は仰臥せしめられ手當を受けつゝ「觀測小隊皆しつかりやれよ」「山崎（少尉の當番兵）成月（少尉の愛馬）を可愛がつてやれよ」と云ひ「天皇陛下万歳」を三唱し平素愛唱せる「嗚呼我戰友」の軍歌を歌ひ中隊長に對し「自分の選定した陣地が惡く澤山の兵を負傷せしめました濟みません〳〵」と述べ砲手掩壕より後方に搬送せんとせしに「自分より先に兵の重傷者を出して手當を早くして下さい」と頑張り入院後は軍醫に「早く彈丸を取出して第一

線に出得るやうに」と懇請し尚重態中にも拘らず部下たる通信掛下士官を病室に呼び觀測小隊の編成整備及秘密書類の返納等につき心配し指示を與ふる等處置する所ありしが十一月五日遂に手當の甲斐もなく二十二歳を一期として彰德城外の華と散つた。然し氏の勇敢なりし行動に依り前面の敵を逐次擊退するに至らしめ以て大隊全部の危險を免れしむることを得た。

氏若年に不拘部下に臨む至情あり其陣頭に立つや新進氣鋭積極勇敢指揮亦的確中隊の戰力を最高度に發揮せしむ。殊に其放列陣地に敵の攻擊を受くるや斃れて尚已まず遂に衆敵をして一指だも砲に觸れしめざりしは皇軍砲兵精神を顯現して遺憾なしと云ふべきである。氏や侍の家に生れ父の後を繼ぎたるを無上の光榮とし身命を君國に献げ唯々國軍の楨幹たる附託に背かざらんことを之れ倶れ死期迫るも職責あるを知りて一言も私事に及ばず氏の心頭唯是忠是義實に青年將校の範とすべきである。征戰中途にして氏の如き有爲の將校を喪ふ愛惜盡きずと雖も氏や螢雪の功を積み待望の將校となり時を得て聖戰に參加し數多の堅陣を屠り其本分を完うして散華す。氏の心境を借りて言へば錦衣颯爽雙親の膝下に見え喜びを共にし得ざりしを遺憾とすべきも其芳名其武勳は万古不朽に靑史を飾り盡忠以て其大孝に代ふ氏の本懷之に過ぎたるはないであらう。今や不滅の英魂は護國の神と仰がれ尚も皇猷を扶翼し奉り又一家の前途に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日砲兵中尉に進級し從七位に昇叙し次で勳六等單光旭日章並に功五級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵中尉從七位勳五等功五級　加守茂

敵襲を受けながら通信網を確保す

氏は德島縣德島市寺島町の人にして明治二十七年十一月十五日に生れ實父母及養父は既に歿し養母はイノと云ひ妻クニとの間に長男三千雄、二男嘉通、長女英子がある。資性豁達思慮周密にして勞苦を厭はず進んで難局に當るの美風を有し諸事熱心誠實責任觀念旺盛の人であつた。明治四十三年鄕里の高等小學校を卒業し爾來家に在て農事に精勵してゐたが大正三年十二月徴兵として歩兵第六十二聯隊に入營し再役下士志願を爲し同五年十二月歩兵伍長に任官爾後累進して大正十五年三月歩兵特務曹長に至り昭和七年七月歩兵少尉に任官の上豫備役に編入せられた。此間昭和三年十一月勳六等に叙せられ瑞寶章を賜はり昭和六年十二月正八位に叙せられた。又西伯利亞事變に際しては大正八年七月浦潮に上陸同十年十一月內地に歸着し賜金の恩賞に浴し前上海事變に際しては師團通信隊小隊長として昭和七年二月征途に上り同年三月內地に歸着其功に依り單光旭日章を賜はつた。軍隊を退きたる後は高野山大學豫科教師として奉職してゐた。

支那事變起るや昭和十二年八月十七日應召山室部隊に屬し勇躍中支方面の征途に就き田中大尉の指揮下に通信第一小隊長として八月下旬江南の一角に敵前上陸を敢行し引續き器材々料の揚陸、人員の集結等に任じたる後、川沙鎭附近に位置する本部隊に追及し奮勵以て錯綜せる揚陸材料の搬送、混雜せる人員の整理等を爲し八月二十三日午後五時頃司令部を基點として左翼隊及山砲兵部隊との間に各種の困難と戰ひつつ迅速機敏に通信網を構成し以て時を移さず通信連絡に任じた。然るに午後八時及午後十一時司令部位置移動せし爲め之に伴ひ再び通信網を改變構成し機を逸せず其通信連絡を確保した。

八月二十四日午前四時頃突如敵の遊擊隊來襲するや全線に亘り猛烈なる紛戰開始せられ混亂を呈するに至りしを以て氏は通信の中絶を憂慮し直に保線兵を增派して之が確保に努め氏自身は其殘部たる第三分隊を直接指揮して敵の襲擊に備へ且常に身を敵火の下に曝しつつ沈着冷靜部下を指揮督勵し各隊の時々刻々變化する複雜なる戰況を部隊長に報告すると共に其命令を各隊に傳へ遺憾なく上下左右の緊密なる連絡に任じ部隊長の戰鬪指揮に多大の貢獻を爲しつつありしが此頃周圍より飛來する敵彈益々熾烈を極め遂に其一彈は氏の右季肋部に命中して惜しくも其場に倒るるに至つた。氏は直に衛生隊に收容せられて手當を受けたるも其甲斐なく午前四時三十分名譽の戰死を遂ぐるに至つた。

按ずるに通信隊長の任務たる第一線指揮官の如く喊聲山川を壓するの壯觀なしと雖も所謂萬人の心を一人の心の如く活躍せしむる軍統帥上の重要機關である。其及ぼす影響と責任の重大なる寧ろ第一線に優るものありと云ふべく此任に服する幹部の隱れたる辛勞は蓋し想察に餘りありと云ふべきである。殊に紛戰に際して通信の故障は重大戰機を逸するの憂あり一瞬の中絶をも許さず氏の此難局に當るや區處適切、指揮的確然かも上海事變に經驗濟なる卓越せる手腕を揮ひ其通信を確保して遺憾なかつた。後日氏の所屬部隊は時の軍司令官より感狀を授與せられしも宜なりと云ふべきである。かくの如きは是れ氏が戰場に臨むや職責の存する所家を忘れ義に就き身命を君國に獻げて斃れて後已む忠誠の發露と云ふべきである。征途日ならずして老練の幹部を喪ふ痛恨靈きずと雖も氏の東亞建設に靈したる累戰赫々の功勳は千載に輝き不滅の英魂は護國の神となり皇謨の恢弘を守護し更らに故山にある愛兒を擁護し氏の遺志繼承を守護照覽して已まぬであらう。

氏は戰死の日步兵中尉に進級し從七位に昇叙せられ次で勳五等雙光旭日章並に功五級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍步兵中尉從七位勳六等功五級　狩谷平司

斃れて尙已まず分隊長に軍刀を與へて敵陣奪取を激勵す

氏は茨城縣新治郡田餘村の人にして父は光之介母はいゑと云ひ明治四十三年十一月十五日生で妻津宜との間には實に氏が英靈凱旋の日一女悅子が出生した。資性溫厚篤實然かも剛毅にして困難に遭遇するも屈せず部下を率ゐるに率先垂範恩威竝び行はれ其の信賴厚かつた。大正十二年三月田餘尋常高等小學校を卒業續て曉星中學校に入校昭和三年三月同校卒業翌年四月關西大學入學七年三月同學卒業九年より大阪帝國大學工學部に修學した。之より以前昭和七年十二月幹部候補生として水戸步兵聯隊に入營翌八年十一月滿期除隊し十一年三月步兵少尉に任官正八位に叙せられた。

支那事變起るや昭和十二年八月十八日應召し石黑部隊第一中隊に編入せられ勇躍北支方面の征途に就いた。而て九月十日以來中隊は永定河監視部隊として胡家舖に位置するや氏は更に部下半小隊を率ゐ同部落南側の渡河點を扼守し敵をして一步も乘ぜしめざるのみならず自ら敵の狙擊下に展望哨となり仔細に敵情地形を偵察し以て對岸の敵の堅陣に對し來るべき永定河の敵前渡河を準備し萬遺算なきを期した。九月十三日の薄暮夕陽既に沒せし陰曆九日の月下に中隊幹部集合し對岸より屢々敵輕機關銃の射彈を蒙りつつ明日の總攻擊に渡河掩護の重任を帶びて至難なる敵前渡河對岸陣地奪取の實行方法に關し細部に亘り最後の打合せを爲し一同悲壯の決意を固め其成功を祈念した。氏は中隊長より「おい狩谷少尉明日は部隊の一番乘りだ、シツカリ遣らうぜ、然し決して無茶をするなよ、大切な體だからな」と云はるゝや「部隊長殿明日はシツカリ遣りますよ、狩谷は此の二、三日猛烈に愉快で堪らないんです、決して輕卒なことは致しません、狩谷は部隊長殿と一緒に思ひ切つて御奉公が出來そうです」と答へしが更に中隊長より「無茶をしてはいかんよ俺にとつては大切な君

なんだ、緒戰に死なれては俺は困る、判つたか」と念を押され「大丈夫ですよ、部隊長殿無茶なことは決してやりません然し狩谷は猛烈に愉快です、何だか一生の念願が叶つたやうな氣持がするんです、明日は大に頑張ります」氏は敵情地形の偵察は既に成り部下は衆心一致今や氏が前進果ては突擊の命を待つばかり既に戰はざるに敵を呑むの概があつた。

愈々九月十四日氏の所屬飯田中隊は師團の渡河に先んじ永定河を渡河し主力の渡河を掩護すべき重任を負ひ午前九時行動を開始した。氏は第一線左小隊長として率先濁流に躍り込み先頭に立ちて動もすれば押し流されんとする急流を渡河し敵岸に上陸するや猛烈なる敵火の下に於て小隊に突擊を命じ軍刀を翳しつつ陣頭に立て突擊前進せしが將に敵陣地に突入せんとする一瞬無念下腹部に貫通銃創を受けて倒れた。然れども剛氣の氏は更に起ちて小隊を指揮せんとした。然かし重傷の身は最早起つ能はず今は之れまでと覺悟せる氏は軍刀を分隊長に渡し「此軍刀にて彼の陣地を奪れ」と悲壯なる一語を殘して遂に地に伏するに至つた。小隊長の壯烈なる行動に感奮せる小隊は直に第一分隊長室町軍曹を先頭に敵陣に突入し見事敵の堅壘を奪取した。氏は當夜衛生隊に收容手當を受けたるも其甲斐もなく名譽の戰死を遂ぐるに至つた。

氏の小隊を指揮するや常に彈雨の下率先陣頭に立ち指揮的確而かも嚴格の中に溫情寵り部下爲に氏に信賴すること厚く小隊は擧止恰も一體となり皇軍歩兵の精鋭を發揮して遺憾なかつた。其斃るるや「此軍刀にて彼の敵陣を奪れ」何ぞ壯烈なる氏斃るるも其氣魄は正に敵陣を震駭し戰勝の最大誘因となつたであらう。かくの如きは職責の存する所身命を君國に捧げ一死を鴻毛の輕きに致し斃れて尙ほ已まざる軍人精神の精華にして皇軍指揮官の模範とすべきである。緒戰に於て氏の如き精悍忠勇の指揮官を喪ふ愛惜禁ぜずと雖も士の戰場に臨むや百戰功なく軀全を愧づ一戰玉碎名を殘すに如かず。氏が莫々たる武勳は職責遂行の示範として皇軍戰史に輝き芳名亦千載に語り傳へられ不滅の英魂は護國の神と仰がれ尙も出でては益々聖戰の前途に祐助を致し入りては未だ見ぬ愛兒の將來に限りなき慈愛加護を垂るる事であらう。

氏は戰死の日歩兵中尉に進級し從七位に昇叙し次で勳六等單光旭日章並に功五級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍砲兵中尉從七位勳六等功五級　茅根寛二

難局下に連絡を確保し大隊をして危機を脱し部隊集結を了せしむ

氏は茨城縣多賀郡日高村の人にして亡父を仙藏母をつめと云ひ明治四十年十二月五日生れで妻久子との間に浩一弘子の二愛子を擧げた。性溫厚にして孝心深く寛容人に接し曾て不愉快なる容貌態度を外に見はせる事なく常時明朗親切にして人を責めず却て自己を反省するの風格を有し稀に見る人格者であつた。大正十一年三月日高小學校を卒業して水戸中學校に入學昭和二年三月同校を卒業し爾後日立町に於て自動車に關する事業に從事して居た。

昭和二年十二月幹部候補生として野砲兵第二十聯隊に入營し爾來誠實軍務に勉勵し昭和四年十一月砲兵軍曹の階級を以て退營し爾後家にあつて父の意志を繼承し專心目家の營業に從事し勤儉力行一家の柱石に任じて居た。昭和七年砲兵少尉に任官し正八位に叙せられ益々身を持すること謹嚴品位を保ち年を重ぬるに從つて鄕黨の信望は彌々加はつて來た。

昭和十二年支那事變勃發するや間もなく應召宮川部隊に編入せられ北支方面の征途に上つた。而て九月中旬永定河の戰

闘に參加し其際氏は砲兵大隊の連絡將校として石黒部隊との連絡に任じ殆んど同部隊と行動を共にし十四日には同部隊本部と共に彈雨の下永定河を渡過し刻々到達する諸情報及び之に基く歩兵隊長の決心或は處置又は砲兵大隊に對する希望等機を失せず所屬大隊長に報告し以て歩砲の密接なる協同を保持し戰闘を有利に導き夫等の結果遂に敵を擊破して森林地帶に追擊するに至つた。

續いて九月十五日より同十七日に亘る拒馬河の戰闘に於て所屬大隊は左追擊隊に屬して南下したが氏は此際も連絡將校として追擊隊の前衛司令官たる石黒部隊長との連絡に任じ敵の抵抗に會しては機を失せず砲兵威力を活用する如く熱心連絡活躍し以て戰闘を有利に進展せしめたるのみならず十七日拂曉敵が捨鉢的に猛逆襲して來た時も〇〇司令部との確實なる連絡によつて砲兵大隊に適切なる處置を採らしむるに至つた事は氏の偉大なる功績であつた。

九月十七日午後七時所屬砲兵大隊は館支隊に屬して氏は又支隊長との連絡に任じ史家莊を出發し淶水東南區に向ひ前進したが出發後程なく天候急變して大雷雨となり道路は忽ち濁流逆卷く川と變り車輛は車軸を沒する有樣にしてさなぎだに名だたる惡道は一層甚だしき難路となり砲車の輓曳は言語に絶する程の困難で馭者砲手の必死の努力も空しく前進思ふに任せず各車各部隊間の距離は次第に增大して大隊の行軍長徑は蜿蜒實に數粁に亘り遂に支隊長の命により翌十八日午前四時鐘揚屯（京漢線松林店驛西方約四粁）に集結することになつた。此夜眞の闇にして道路は前述の如く泥濘不良なるに拘はらず氏は克く奮勵努力以て支隊長本部との連絡に努め同四時頃氏は所屬大隊に第三回目の連絡に赴く途中鐘揚屯西方地區にさしかかるや突如數十名の殘敵に襲擊せられた。此時氏は速に所屬大隊に急報の處置を取ると共に自らは群がる敵中に斬り込んで數名の敵を斃し遂に之を擊退した。然かし惜しや身に數彈を受けて竟に悲壯の戰死を遂げた。

氏は各戰闘を通して終始部隊間の連絡者として重要なる任務に服し殊に通信設備の整はざる追擊戰闘に於て稀有の天候による惡路に逢着して具さに艱苦と戰ひ殘敵の危險を冒して奮勵努力任務の遂行に邁進したが不幸にして聖戰の半ばに尊き犧牲となりしは痛恨の極みである。然れども氏が終始一貫部隊間の緊密なる連絡を確保し且所屬大隊をして危機を脱せしめ支障なく部隊を集結し得しめたる功績は特筆に値する。又不慮の敵襲に際して奮戰格闘皇軍將校の武威を發揚した行爲は正に武人の面目躍如たるものがある。今や溫厚篤實にして而も勇壯なる風眸に接する能はずと雖その偉勳は軍民の龜鑑と仰がれて永く青史に輝き英靈は尙も皇運を扶翼し奉り遺族の前途に尊き加護を垂るる事であらう。

氏は戰死の日砲兵中尉に進級し從七位勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍砲兵中尉從七位勳五等功五級　義宮實三

老練なる砲車小隊長として勇戰奮闘す

氏は山口縣豐浦郡豐東村の人にして亡父は萬吉亡母はサダと云ひ明治二十七年一月十二日生れで妻アサノとの間に未だ愛子はなかつた。資性溫厚なるも嚴格寡言實行の人であつた。平素より自分は軍人なれば一旦緩急ある場合は一死報國必ず身を以て國難に殉ずるのであると云ふてゐた。自己を律する嚴なるも部下には溫情厚かつた。明治四十一年三月下關市

立高等小學校を卒業し丁年に達するや現役兵として重砲兵聯隊に入營し大正八年六月丙種下士官學生として重砲兵學校に入校翌九年三月同校修了引續き自動車操縱術修業の爲在校し同年七月同術修了大正十年四月東京財團法人電氣學校へ入校同十二年四月同校を卒業した。此間大正九年三月電燈使用術の修得優等に付銀時計一箇を下賜せられ且優等證を授與された。又同年十一月軍曹當時勳七等に叙し青色桐葉章を昭和五年十一月特務曹長當時勳六等に叙し瑞寶章を賜はつた

支那事變起るや昭和十二年七月二十日應召遠藤部隊に編入せられ勇躍征途に就いた。北支戰線到着後九月七日より十四日に亘る永定河の戰鬪に際しては中隊先任大隊長として戰砲隊の引卒に任じ七日北平出發以來訓練不十分なる馬匹を以て惡路と鬪ひて夜を徹して強行軍を續行し其戰鬪に當りては沈着勇敢克く部下を掌握指揮し彈藥補充の指導連絡等亦極めて周到適切にして中隊長の指揮を容易ならしめた。更に九月十五日より二十日に亘る固安附近の戰鬪に際しては惡路を冒し又永定河の河床軟弱にして車輛馬匹の埋沒甚しく極めて困難なる渡河なりしに拘らず氏の適切なる區處に依り一兵一馬の故障だも生せずして渡河し遂に城壁前方六百米に陣地を占領し城壁の破壞擾亂射撃急襲集中射撃等適切有效なる射撃を實施し共追撃に當りては疲勞せる人馬を叱咤激勵しつつ難行軍を續行し機を逸せず辛橋に達して渡河掩護射撃に參加し又九月下旬に於ける保定附近の戰鬪には猛追撃を要したが連日の惡路に砲兵諸隊の人馬は共疲勞極度に達し已むなく中隊主力のみ挺進し殘餘は主力に追及せしむる事となつた。氏は共挺進砲車小隊長として追撃隊に參加し干坊附近及保定附近の戰

鬪に參與せんが爲め不眠不休實に三晝夜に及び音聲嗄れ喉より出血するに至りしも尙意氣と熱とを以て諸障碍を排撃して所望の時期に陣地に進入し敵彈雨飛の下彈藥の補充に戰機に投合する射撃に全力を傾到して砲兵威力を發揚し爾後正定及滹沱河の戰鬪並に彰德附近の戰鬪に際しては約一ヶ月に亘る惡路追撃戰の爲遺憾ながら馬匹の疲勞衰弱甚大にして輓馬の編成に大なる支障を來たすに至つた。氏は滞在約一週間の間全く寢食を忘れ之れが恢復に努め爾後の戰鬪機動に多大なる效果を收めた。又戰鬪に方りては屢々敵の猛砲撃下の陣地變換殊に夜間の陣地占領警戒等に周到綿密なる着意を以て之が實施を圓滑にし又滹沱河畔の戰鬪間敵砲彈の急射を受け將に至大なる損害を受けんとせし際氏の獨斷適切なる處置に依り一兵一馬の損害だに生せしめざりしは砲側指揮官として老練の手腕を發揮せるものと謂はねばならぬ。又戰鬪各期に於ける射撃指揮は克く戰況に應ずる緩急を律し正確敏速なる射撃を實施せしめ火砲材料の愛護に努むる等中隊の戰力を遺憾なく發揮せしめ以て中隊長の戰鬪指揮を容易ならしめた。

十一月六日より舊魏縣並大名附近の戰鬪開始せらるるや謝町及び謝町東南側に於て適切機敏なる戰鬪を實施し十一日午後一時より大名附近の攻撃戰鬪に參加するに至つたが中隊の陣地は小庄部落東北端畑地敵第一線より約千米友軍第一線の後方五十米の地にありて成營方面より敵機關銃の側射を受くる狀態なりしに依り小庄部落に於て彈藥其他一切の準備を整へ敵彈集中の下氏の小隊を先頭に一門宛極めて勇敢に逐次進入を實施し次で逸早く成營附近の敵機關銃を制壓して他小隊の進入を掩護し更に敵陣地の要點を制壓する等機宜に適する砲撃に依り歩兵線も逐次前進を開始するを得午後二時半頃には我が攻撃進捗し愈々戰鬪激烈を極むるに至つた。然るに敵は衞戍地の關係上地理に通ぜる爲兵營附近及城壁上より猛火を注ぎ來り我歩兵の前進は頗る困難になつた。之が爲砲兵は逐次此等の敵を制壓しつつ歩兵に協力すると共に氏の指揮する砲車隊は更に敵の城壁前九百米に在る煉瓦燒場堆土附近に前進し城壁を破壞して突撃路を開設すべく陣地變換を行ひし

が途中無念右季肋部に盲貫銃創を受け竟に第一野戰病院に收容せられ其後手厚き看護を受けたるも其甲斐なく十一月二十日終に名譽の戰傷死を遂ぐるに至つた。然し氏の勇敢なる行動に依り中隊は破壞射擊に成功し幅二十米の突擊路を開設し日沒頃歩兵は此破壞により突入城壁高く日章旗を揭ぐるに至つた。

氏の小隊を率うるや率先陣頭に立ち其意氣正に壯者を凌ぐものあり其至誠と其熱とは衆心を一體たらしめ皇軍砲兵の精鋭を發揮して遺憾なしと謂ふべきであつた。殊に戰局困難に際しては每戰中隊の先陣を承り勇戰奮鬪氏が平素決意せる一死殉難の志を貫徹す。實に忠に志して忠に斃れ義に志して義に斃る國軍將校の範とすべきである。氏今や亡しと雖も不朽の芳名赫々の武勳は皇軍戰史と共に千載に輝き不滅の英魂は護國の神と仰がれ尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るる事であらう。

氏は戰死の日砲兵中尉に進級し從七位に昇叙し次で勳五等雙光旭日章並に功五級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵中尉從七位勳六等功五級　長瀨茂

兵候として敵陣内に潛入偉功を樹て更に奮戰々捷の途を拓く

氏は島根縣能義郡安田村の人にして父を長之助母をさだのと云ひその二男にして明治四十五年三月十九日に生れ岩宮清太郎同春子の婿養子となり妻百合子との間に一女孝枝を擧げたが愛妻の死亡に遇ひ實家に復籍した。資性沈着にして剛膽柔劍道は優に初段の域に達して居た。大正十五年三月安田高等小學校を卒業し米子中學校に入學昭和六年三月同校を卒業した。

昭和七年十二月幹部候補生として歩兵第六十三聯隊留守隊に入營し翌八年十月歩兵軍曹の階級に進み同年十一月退營超えて昭和十年七月勤務演習に召集せられ見習士官として初級士官に必要なる學術を修得し翌十一年三月歩兵少尉に任官正八位に叙せられた。

昭和十二年七月支那事變のため應召し中井部隊に編入せられ勇躍北支方面の征途に就き八月二十四日所屬大隊が獨流鎭の攻擊を實施するや氏は同陣地に據る敵情偵察を命ぜられたが緖戰に於ける此名譽なる獨立勤務に選定せられし事を無上の光榮とし勇躍出發し水深腰に達する出水地帶を前進大膽にも敵地直前の運河右岸にある部落に到達した。此時敵はすかさず左右兩方面より十字火を浴せ來りしが氏は沈着豪膽而かも細心なる注意を以て同地の橋梁は既に破壞せられある事又運河左岸部落に於ける敵兵占據の狀態を詳細に偵知し以て大隊の攻擊計畫に重要なる資料を提出して斥候の任務を完全に達成した。次で所屬澤山中隊は尖兵となつて攻擊前進を起して運河の右岸に達し同左岸の敵を攻擊するに方り中隊長より小舟を利用し渡河を命ぜらるゝや適切に部下を配處し勇敢にも敵彈雨飛の下に部下の一部と共に率先渡河して後續部隊の渡河掩護に任じ爾後漸次運河左岸に達したる隣接部隊と連繫を保ち廟附近の圍壁を利用して頑强に抵抗する敵に對し其翼を包圍する如く巧に地物を利用して肉薄し以て一意正面に向ふ中隊主力の突擊を有利ならしめた。斯くして大隊は午後六時獨流鎭を奪取するに至つたが本戰鬪に於ける氏の積極果敢なる行動は所屬大隊の戰勝獲得に重要なる素因を與へたので

あつた。

九月上旬中井支隊主力の東西子牙鎮附近に對する攻撃に於ては所屬中隊は同支隊の左縱隊に屬し主力の攻撃を容易ならしむる任務を受け九月三日午後狼窩に進出し敵の退路に迫つて大沿庄の敵と對戰するに至つた。優勢なる敵は大沿庄部落周圍に堅固なる陣地を占領し迫撃砲及び自動火器を以て我を猛射し殊に九月四日夜半に至り迫撃砲の集中射撃に次いで勢ひ鋭く夜襲して來たが氏は第二小隊長として泰然自若よく部下を激勵し巧に敵を引寄せ急襲的に之を猛射し周章狼狽する敵に對し更に殲滅的打撃を加へて之を撃退しよく陣地を確保した。更に九月六日劉莊にありし敵は友軍のため撃滅せらるゝに及んで我前面大沿庄の敵に稍々動搖の徴が現はれた。此の時氏は部下十五名を率ひて該敵攻撃の目的を以て大沿庄北端の敵情地形の捜索を命ぜられた。氏は所命の如く部下十五名を率ひて日沒と共に出發高粱畑や水濠を利用して敵に近迫し更に大艙にも敵陣地内に潜入し詳細に敵情地形を捜索し歸還の途に就いた。然るに其際敵に發見せられ急射を受けたが沈着直に擲彈筒を以て敵を反撃し隙を見て歸來報告を呈した。此の偵察報告によつて左縱隊は七日早朝敵の薄弱なる北方より敵を攻撃するに決し此時氏は先頭に立つて前進せしが敵は所謂虚を攻撃せられ爲に左縱隊は抵抗を受くることなく遂に一兵をも損せずして該地を奪取した。之れ氏の斥候として適切機宜の活動に負ふ所大なりと云ふべきである。其の後氏の中隊は小沿庄對岸を占領し更に東辛庄及び小河の敵陣地を占領確保して敵の退路を脅威し以て支隊主力の攻撃を容易にした。

東辛庄附近の戰鬪後所屬大隊長大村少佐は部下二中隊を率ひて追撃隊となり九月十二日姚馬渡に達した。然るに此時五六百名の敵が北趙扶に陣地を占領しあるを知り砲兵の協力下に大隊は獨力之を攻撃した。之より先き支隊の左縱隊にあつて活躍せる氏は命令により部下小隊を率ひて大村少佐の指揮下に復歸し北趙扶の攻撃に參加し當初豫備隊として右翼後を前進中左翼第一線の攻撃意の如く進捗せざりし爲部下約半數を以て左第一線に增加を命ぜられた。當時所屬大隊は少數の兵力を以て廣正面に亘る敵を攻撃せる爲左翼方面の兵力極めて薄弱となり第九中隊が西部北趙扶を占領せるに拘らず左側堤防の敵及び東部北趙扶の敵は依然頑强なる抵抗を續けて居たのである。玆に於て氏は勇奮先頭に立ちて敵の十字火中を物ともせず猛進奮戰したが敵火益々熾烈を加へ特に一軒家に立籠りたる敵の輕機銃は最も猛烈に側防火力としての威を逞うした。然かし氏は屈せず益々部下を督勵し數倍の敵を制壓しつゝ攻撃前進の結果隣接第九中隊の戰況頓に有利に進展し遂に戰勝獲得の基を作つた。此間氏は敵前至近の距離に近迫し將に敵陣地に突入せんとした時惜くも敵彈命中終に壯烈なる戰死を遂げた。

氏や敬虔上司に仕へ溫厚部下に接し責任を重んじ生死の境に毅然、指揮亦適確にして自ら上下の信望一身に集つた。一度び戰場に立つや慧眼俊敏にして屢々有力なる敵情を獲得し以て上司の戰鬪計畫を適切ならしめ堅陣を攻撃するや率先垂範必勝を期し疾風枯葉を捲くの概があつた。寔に是れ青年將校の典型にして天晴れ皇軍の威武を中外に宣揚し得た。然るに聖戰の半ばにして此前途有爲の士を喪ふ眞に痛惜に堪へない。さり乍ら氏の功績たるや皇軍戰史に光彩を放ち其名は大和錦と讃はれて千歳に芳ばしく其英靈亦永遠に生き尙も皇國を守り又肉身遺族の守護神として御たま乍らの加護を垂るゝであらう。

氏は戰死の日步兵中尉に進級し從七位に昇叙せられ次いで勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵中尉從七位勳六等功五級　内田滿

敵トーチカ陣地に對し決死の突擊を行ふ

氏は岡山縣苫田郡大野村の人にして父を卯次郎母をユウと云ひ大正三年三月十一日に生れ未だ獨身であつた。資性沈勇果斷にして孝悌友愛の情に厚く意志亦堅確にして獨立心旺盛であつた。實家に在りては近親緣者の別なく能く幼者を愛護善導し爲に戰死の報傳はるや尋常一二年の頃是なき幼童さへも良い兵隊叔父さんがなくなつたと悲嘆に暮れて居た。又學校に在りては下級生軍隊に在りては部下に對し骨肉の情を以て之を誘掖愛護し德望自ら氏の身邊に集まるの趣があつた。昭和四年三月津山小學校高等科を卒業し爾後岡山縣立津山中學校の給仕となりて獨學し昭和七年四月同校第四學年に編入せられ翌八年四月首尾克く陸軍士官學校豫科へ入校の榮冠を得た。十年三月豫科卒業士官候補生として鳥取歩兵聯隊へ配賦せられ同年九月陸軍士官學校本科に入學十二年六月本科卒業同年八月歩兵少尉に任官し正八位に叙せられた。

支那事變起るや長野部隊本城中隊に屬し勇躍征途に就いた。北支到着以來九月下旬滄縣附近の戰鬪に於ては所屬大隊は所屬部隊の攻擊重點たりし人合庄北方の無名部落の攻擊に當つたが氏は大隊の助攻方面たる右第一線となり部下を督勵し大隊の攻擊重點正面の敵火力を自己小隊正面に牽制し以て大隊主力の攻擊を有利ならしめ。同日午後七時十五分大隊が無名部落に突入するや機を失せず無名部落西北端の敵陣地を獨力攻擊して之を占領し大隊主力との連絡を緊密にし以て大隊の拂曉攻擊を容易ならしめた。

超えて同月廿四日午前零時半第一大隊の後方に轉進し殘敵を掃蕩すべき命を受け午前一時半行動を開始し第一大隊後方に前進し次いで同大隊に配屬せられ當面のトーチカ及掩蓋機關銃を攻擊すべき決死的の任務を與へられた。氏は運河方面より堤防上に方て抵抗する敵を擊退しつゝ前進し愈々敵掩蓋機關銃座に接近するや氏は各兵に手榴彈投擲の準備を命じつゝ率先陣頭に立ち嵐の如き敵彈を冒しつゝ掩蓋に肉薄し後方入口につめ寄れば敵は周章狼狽手榴彈を投げつけ防戰した。氏は之に屈せず勵聲手榴彈の投擲と突入とを命ずれは決死の部下勇士は前後を爭ひトーチカ内に手榴彈を投入して之を破壞し次で慘烈極まる格闘に移り深夜に響き渡る爆音血肉飛び散る屍の山を築いた。此時氏は阿修羅の如き目覺しき奮闘を續けて居たが不幸にして敵彈頭部を貫通し壯烈なる戰死を遂げた。

將校准士官之部

傷に在りて山名上等兵は小隊長の仇と叫び氏の軍刀を以て忽ち敵兵十數名を斬倒した。岩谷准尉は氏に代つて小隊を指揮し高粱畑に遁走する敵に尾して追擊し午前五時東天白む頃敵の最後堅陣たりし東花園部落の頑敵を屠つて朝風に日章旗を翻へした。斯くて滄州附近の全戰局に重大なる影響を與へ以て戰勝獲得に確乎たる素因を成形した。

氏や鄕土に在りては溫厚能く人を德化して範を垂れ軍に從ひては能く戰局を明察して難局を擔當し率先險難を克服して部下を督勵したる前途を有し將來其俊秀に期待すべきもの多かりしに早くも聖戰の中道に玉碎せるは國軍の爲痛惜に堪えない。さり乍ら人世死所を得るは難しとする所氏は克く忠誠勇武聖諭のまに〳〵魏絳の節を全うし百世に芳名を留め皇軍戰史に異彩を放つたものである。今や當にして嵐に散つたとは云へ其英靈は永遠に生き尙も皇運を扶翼し奉り一家の前途に亦尊き加護

を垂るゝことであらう。

氏は戰死の日歩兵中尉に進級し次で從七位勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍砲兵中尉從七位勳六等功五級　野崎　章

勇敢なる砲兵連絡將校

氏は岐阜縣武儀郡關町の人にして父は英一母はしづと云ひ明治四十四年四月二十二日生で妻女みねとの間に未だ子はなかつた。資性快活にして剛毅責任觀念旺盛進んで難局に當るの美風があり常に率先垂範部下爲に克く心服してゐた。昭和四年三月岐阜商業學校を卒業し同五年一月岐阜市井上羅紗店に勤務し同六年十二月幹部候補生として名古屋野砲兵聯隊に入營翌七年十一月滿期除隊し再び前記の店に復職勤務してゐた。昭和十年三月砲兵少尉に任官し正八位に叙せられ同年六月陸軍特別志願將校試驗に合格し同年九月小倉重砲兵聯隊附に補せられ同時千葉野戰砲兵學校に入校同年十二月原隊に復歸し爾來軍務に精勵研鑽修養大に努めてゐた。

支那事變起るや遠藤部隊に屬し第二大隊本部連絡將校として昭和十二年八月勇躍征途に就いた。北支戰線到着後九月七日より十四日に亘る永定河の戰鬪に際しては大隊の任務たる右翼隊右第一線大隊に直協する爲渡河後に於ける歩砲協定に參畫し歩兵の攻擊前進に當りては後岸より前岸に渡河の第一線隊長の要求及第一線友軍の狀況を刻々報告し眞に手に取る如くに狀況を明ならしめ克く大隊長の戰鬪指導を輔佐し大隊の任務を完全に達成せしめた。九月十五日より二十日に亘る固安の戰鬪に際しては同樣第一線歩兵の許に派遣せられ歩砲協同の實を發揮せしめて遂に固安城を攻略せしむるに至つた。九月二十一日より二十四日に亘る保定附近の戰鬪に際しては敵が保定の前進陣地たる北樓附近に陣地を占領するや之を攻擊する爲所屬大隊の直協歩兵大隊の許に至り克く連絡して大隊長の戰鬪指揮を容易ならしめ更に歩兵大隊が敵に尾して保定城を攻略するに當りては連絡に一段の意を用ひ遂に敵をして保定城を放棄せざるを得ざる狀況に至らしめた。九月二十四日より十月十一日に亘る正定及滹沱河の戰鬪に際しても協力歩兵大隊長の許に至り克く第一線歩兵大隊長の企圖及要求を所屬大隊長に傳へ特に滹沱河の渡河前進に當りては歩兵と共に渡河し迅速に電話線を架設し歩兵第一線大隊をして毫も後顧の憂なく渡河攻擊前進せしむるを得た。

十一月四日午前八時半頃より彰德城の攻擊開始せらるるや氏は歩兵部隊左第一線大隊に協力する爲同大隊長の許にありて克く彼我の狀況第一線歩兵の要求企圖を承知し適時大隊長に報告しつつありしが偶々右前方三百米の地點に於て友軍戰車が敵歩兵三、四十名より肉薄攻擊を受けつつあるを發見し附近に在る小銃輕機を指揮して之を射擊せしめ敵を殲滅して戰車の危急を救出するを得しめた。軈て彰德城壁に突擊路開設の任務を與へられたる所屬大隊の爲突擊路開設地點を偵察すべく第一線歩兵の前方部落へ進入し勇敢にも更に歩兵線を超へて鐵道線を踏越へ水濠を渡り城壁下十米内外にある鐵條網の線まで進出し剛膽にも仔細に砲彈による突擊路開設の目的を以て城壁を偵察し腹案成り報告の爲歸來せんとして再び元の水濠を渡り道路上に登り切りたる時惜しくも城壁上の銃眼より狙擊せられ右胸部に貫通銃創を受け其場に倒るるに至つた。高山伍長は氏を收容せんとせし

が之亦狙撃せられて斃れ漸くにして後方の家屋に收容せられた。此際氏は左物入中に祕めある遺書を家郷に送られたき旨依頼し負傷後二時間にして午前十一時四十分竟に名譽の戰死を遂ぐるに至つた。然し氏の偵察せし結果に依り城壁に突撃路は開設せられ我が歩兵部隊は午後二時三十分彰德城の一角を占領するに至り續て此堅城は完全に我有に歸した。之より以前氏は密かに馬持兵に香水一壜を與へ置き「余死なば之を振り掛けよ」と命じあり之が爲氏が戰死するや其英骸より芳香四圍に薫り木村長門守の昔も偲ばれてゆかしき限りであつた。

氏や東亞に妖雲漲るの秋軍旅の志を立て現役の班に列し技を磨くこと正に二年偶々時運に際會し其戰場に臨むや素より身命を君國に献げて斃れて已まんとす。遺書は深く嚢底に收め香は密かに從卒に托す今は唯職責に邁進するのみであつた。氏の任たる歩砲連絡は戰捷獲得上最も重視する所氏常に歩兵と行動を共にし彈雨の下活躍至らざるなく歩砲協同の眞價を發揮せしめて遺憾なかつた。殊に城壁破壞點の偵察の如き歩兵突撃の成否を双肩に荷ひ死地に身を挺して入念仔細を極め其重任を完うす何ぞ其職責に忠誠なる。惜哉天氏に時を借さず落城を見ずして斃れしと雖も氏の魂魄は恐らく突撃歩兵と共に雄翔して彰德城を震撼せしめたであらう。京漢沿線彰德城に登りて當時の戰蹟を偲ぶの時氏が樹てたる武勳は稔郁として芳香薫り其赫々の勇名は青史を飾りて萬古に盡きぬであらう。

氏は戰死の日砲兵中尉に進級し從七位に叙し次で勳六等單光旭日章並に功五級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍騎兵中尉從七位勳五等功五級　倉本林藏

斥候として重要なる報告を齎らし且奮戰す

氏は鳥取縣氣高郡勝部村の人にして父は常藏母はぎむと云ひ明治三十四年十一月二十日に生れ妻カメとの間に長女節子長男一郎がある。資性謹嚴にして寡默實行の人、沈着果斷の士であつた。而して自己には嚴にして部下には溫情厚く其人格德操は將兵一同の景仰せし所であつた。大正五年三月勝部尋常高等小學校を卒業續て大阪通信生養成所に入所したるも故ありて間もなく退學し翌六年一月農業補習學校に入校大正七年十一月同校を修了十二月現役志願兵として姫路騎兵聯隊に入營下士官を志願し採用せられ大正九年十二月騎兵伍長に任官し翌十年十月には選ばれて陸軍戸山學校體操科學生となり十一年二月同校卒業爾後累進して昭和五年十二月騎兵特務曹長に進級し昭和七年四月滿洲事變に出動哈爾賓に到着し各地に轉戰昭和八年十二月內地に歸還昭和十年一月騎兵少尉に任官正八位に叙せられ豫備役に編入せられた。在隊間は頗る精勤にして大正十二年には師團長より表彰狀を附與せられ又大正十五年には師團劍術競技會に優勝し留守司令官より賞狀を授けられた。滿洲事變に際しては其武功拔群にして勳六等に叙し單光旭日章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

支那事變起るや昭和十二年七月三十一日應召騎兵聯隊第一中隊に編入勇躍征途に就き北支戰線に到着するや八月二十一日一小隊を率ゐ末永部隊に配屬せられ良王莊出發以來泥濘膝を沒する高粱地帶を難行軍を續け騎兵斥候として常に部隊に先行し敵情捜索に努め同日午後四時以後畢庄子及徐庄子に據れる各約百名の敵を攻撃するに當りては歩兵部隊と共に勇戰奮鬪遂に此敵を撃退した。次いで靜海縣附近の戰鬪に際しては赤柴部隊に配屬せられ二十五日正午靜海縣に入城後直ちに

陳官屯附近の敵情偵察を命ぜらるるや氏は運河に沿ふ本道方面より急行挺進し東長屯附近に至つた。此の時敵第一線部隊より射撃を受けたるも更に意とすることなく鐵道線路方面より敵陣内に潜入し陳官屯附近の敵主陣地の偵察を爲し極めて重要なる報告を呈し赤柴部隊陳官屯附近の攻撃に寄與せし所多大であつた。

九月十五日中趙扶附近の攻撃に際しては午前七時尖兵中隊に在りし氏の小隊は泥濘中を勇敢に行動し乘馬接敵不可能となるや全數下馬を命じ午前七時十分中井部隊に連繫して敵の左翼を攻撃する目的を以て中隊が展開するや其の左第一線小隊となり勇躍火線を構成して攻撃を開始した。此頃敵の銃砲彈は熾に飛來せしも沈着剛勇なる氏は之に屈することなく克く部下を掌握し率先々頭に立ちて一進一止鋭意前進を續行し午前八時頃我前進を最も妨害しつつありし敵の前進據點たる丘阜の敵輕機關銃陣地を奪取した。其後敵は續々我右翼方面に增加し來り爲に聯隊は右翼方面に危險を感ずるに至りたる爲氏の小隊よりも一部を割いて此方面に增加せしが敵の一部は我左翼方面にも增加の徴あり氏は中隊長より小隊の前進を控制して極力我左翼を確保すべく命ぜられ熱心敵情を偵察しありし所午後四時十分惜しくも敵彈胸部を貫通し壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。然れども此奮戰に依り聯隊は苦戰中にも辛ふじて危機を脱し現狀を支へて以て支隊の右側背掩護の重任を完ふすることを得た。

氏や德望の人期せずして部下の信頼一身に集まり其戰陣に立つや率先勇敢然かも沈着周密、將校斥候として機眼卓拔屢々死生の巷に出入して適切重要の資料を提供し、指揮官としては所謂勇將の下に弱卒なく衆心一體以て小隊の戰力を遺憾なく發揮す。かくの如きは是れ氏が皇軍の楨幹たる負托の重きに省み家を忘れ義に就き身命を君國に献げて只管職責に邁往懃れて後已む忠誠の發露と云ふべきである。征戰幾何もなく氏の如き忠勇の幹部を喪ふ痛恨盡きずと雖も氏や曩に滿洲事變に偉功を樹て今次事變亦赫々の武勳を奏す。東亞建設の礎石となりたる氏が累戰の芳名は萬古に輝き不滅の英魂は護國の神となり皇謨の恢弘を守護し更に故山に於ける愛兒が遺志繼承を照覽加護して已まぬであらう。

氏は戰死の日騎兵中尉に進級し從七位に昇叙せられ次で勳五等雙光旭日章並に功五級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵中尉從七位勳六等功五級　三木作二

先遣小隊長として奮戰大隊主力の進出を容易にす

氏は兵庫縣揖保郡龍野町の人にして父は辰藏と云ひ大正二年六月二日生である。資性快活氣力旺盛部下を率うる率先躬行而かも極めて親切にして上下の信頼頗る厚かつた。

支那事變起るや昭和十二年八月沼田部隊に屬し關口中隊の小隊長として勇躍征途に就いた。北支戰線到着後八月二十四日敵陣地攻撃の爲に天津より南下を開始し翌二十五日は先づ三間房に在りし一部の敵を驅逐し之を占領した。二十六日前衛命令下るや氏は部下小隊を率ゐて先遣隊となり四黨口に至り敵情地形を偵察すべき任務を受け周到なる計畫と準備を整へ午後八時二十分二隻の鐵舟に分乘し三間房を出發した。附近一帶は敵が馬廠川の堤防を決潰せし爲大氾濫を爲し道路は水中に沒し四圍は丈餘の高粱畑にして然かも此日天曇り咫尺を辨ぜず方向の維持頗る困難屢々迷路に入りたるも氏は常に沈着して細心の注意を拂ひ凡ゆる困苦と難關を突破して任務の達成に努め翌二十七日午前三時頃漸く目的地たる北部四黨口に到達することを得た。依て警戒を嚴にし企圖を秘匿し適切なる部署、適確なる指揮に依り上陸し直に附近にありし敵砲兵を驅逐し一氣に北部四黨口を占領續いて部落内を掃蕩し更に南部四黨口の敵情を偵察せしに約一小隊の敵之を占領せるを確め引續き勇敢に之を攻撃して午前五時頃天明と共に敵を西方に撃退して完全に該村落を占領し大隊の主力の進出を

待つた。大隊は午前八時頃同地に到着したるを以て氏は先遣隊の重任を見事に果し中隊に復歸した。

其の後大隊が馬廠川堤防の敵を攻撃するに決するや氏は中隊の左第一線となり泥濘を冒し水濠を越へ高粱畑を踏分け頗る困難不利なる地形を克服しつゝ率先中隊の最前線に在りて一進一止鋭意攻撃前進を續け遂に敵前三百米に近迫した。當時敵の銃砲火は愈々熾烈を極め負傷者續出するの狀態となつた。然れども氏は之に屈せず部下を掌握激勵して益々我火力を發揚し敵を制壓しつゝ中隊の攻撃戰鬪を有利に導き今や亦敢然として戰線より躍り出でんとせし時惜しくも敵の一彈は腹部を貫通した。然かも剛毅の氏は之に屈せず尙も小隊を激勵しつゝ前進に前進を重ね敵前百米に達せし頃出血多量の爲に最早起つ能はず「天皇陛下萬歳」を三唱し其場に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。

氏の小隊に臨むや指揮適確率先陣頭に立ち身を以て部下を率ゐしのみならず居常骨肉も及ばざる温情があつた。從て部下克く氏に服し擧止恰も一體となり其戰力を發揮して遺憾がなかつた。殊に先遣隊として獨立任務を負ひ四黨口を占領せる戰績は人をして感嘆せしめし所であつた。實にかくの如きは氏が職責に全力を傾倒し一身を君國に献げて斃れて後已む決意の顯現と云ふべきである。緒戰に於て氏の如き有爲の指揮官を喪ふ痛恨盡きざるも氏や選ばれて重任を果し功成り名遂けて一戰玉碎す。其赫々の武勳は千載に輝き其芳名は万古に靑史を飾るであらう。

氏は戰死の日歩兵中尉に進級し從七位に叙せられ次で勳六等單光旭日章並に功五級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵中尉從七位勳六等功五級　下城平三

模範的將校斥候。豪膽敵陣内に潛入す

氏は群馬縣佐波郡殖蓮村の人にして父は庸治母はつると云ひ大正二年三月十七日生で未だ獨身であつた。資性温厚寡默而かも穎敏にして剛膽、事に當り堅實邁往の人にして品性高潔至誠以て部下に臨み其信賴極めて厚かつた。大正十三年三月殖蓮尋常高等小學校を卒業續て縣立工業學校に入校昭和四年三月同校卒業直に商工省繊維工業試驗所へ入所技術員として奉職昭和八年十二月幹部候補生として高崎歩兵聯隊に入營滿洲に派遣せられ齊々哈爾に駐屯翌九年五月内地に歸還し十一月滿期除隊し再び前記試驗所に復職昭和十一年歩兵少尉に任官した。尙ほ滿洲事變の功に依り勳八等に叙し瑞寶章を賜はつた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召森田部隊茂木隊に編入せられ勇躍征途に就いた。而て北支戰線に到着九月十二日午前五時半黄村驛に下車し同日午前八時より行動を開始し途中一泊翌十三日氏の所屬中隊は聯隊の先發となり氏は中隊長と共に午前七時宿營地を出發し急行軍にて午前十時半永定河左岸辛莊に到着した。而して氏は將校斥候となり聯隊渡河攻撃の目的を以て永定河右岸地區の敵情並に永定河の偵察を爲すべき任務を受けた。其の日氏等は朝來猛烈なる急行軍を爲し途中一回の休憩を爲したるのみにて實に三時間半に七里を突破せしに氏は疲勞の色もなく長辛莊に到着するや直に左岸地區を東奔西走屢々敵彈を受けつゝ晝間成し得る限りの偵察を丹念に實施し聯隊の到着を待つた。然るに晝間是れ以上の偵察は敵情上之を許さず中隊長の命に依り更に夜に入るを待ち且月の沒する正子を期して活動することに決し時の至るを待つた。午後十時になるや成功を期しつゝ露營地を出でゝ行動を開始し先づ月光を利用して一般偵察を遂げ驀て氏自身は兵

二名を伴ひ他の三名は之を分ちて一組と爲し斥候長と連絡しつゝ敵情を捜索すべく命令し自己身邊の危險を顧みず極力兵力を少くして潜行を容易にし敵陣深く進入して敵情を探らんとした。愈々正子となるや勇敢濁流渦卷く永定河の急流を徒渉し剛膽にもトーチカとトーチカとの間隙より敵陣に潜入虎穴に入りて虎兒を求むるより以上の危險を冒しつゝ慧敏に附近の敵情地形を偵察しありしに突如敵の監視兵より射撃を受けた。然かし氏は冷靜沈着息をころし巧みに之を避けつつ大膽にも更に深く敵陣内に潜行熱心仔細に陣内の情況を偵察しつゝありしが敵は逐次増加して百數十名に達し其攻撃を受くるに至つた。氏は素より萬一を豫期せる所少しも動ぜず沈着自ら拳銃を執つて監視兵二名を射殺し此危地を脱せんと歸還の途に就きしが其際無念腹部に貫通銃創を蒙り亦起つ能はず。氏の伴ひたる斥候二名は氏を背負ひて河岸近くまで後退せしも其一名亦臀部に負傷するに至るや氏は「俺は駄目だ此儘にして置け汝等は速かに歸つて偵察せる結果を中隊長に報告せよ」と命じ斥候兵の躊躇せるを頻りに督促した。下田上等兵は「斥候長は俺が連れて行く須田お前は負傷の身にて氣の毒だが報告に行け」と指示して須田一等兵を報告の爲に歸還せしめた。氏は最早最期の覺悟を定め敵と應戰中再び第二彈胸部を貫通し壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。然し聯隊は氏の貴重なる偵察の結果に因り最小限の犠牲を以て永定河の敵陣を奪取することを得た。

氏の斥候に任ずるや剛膽沈着慧敏にして熱心然かも偵察せし戰術判斷は一々斥候兵に知らしめ置き萬一の場合に備ふ。何ぞ其用意の周到なる。而して敵の發覺する所となるや少しも動ぜず徐ろに兵を督勵して速かに重要報告を提し自ら奮戰竟に斃る。かくの如きは職責の存する所素より身命を君國に献げて斃れて後已む決意の顯現に外ならずと雖も將校斥候の軌範として後世に傳へ以て鑑とすべきである。而かも斥候兵の氏を思ふの情親子も啻ならず氏が出動以來上官として如何に骨肉の情を以て部下を率ゐしか其人格を偲び景仰措く能はざる所である。其後長くも戰地に侍從武官御差遣あらせられし師部隊長より陣中美談とし武官に報告せらる。誠に死して尚餘榮ありと云ふべきである。噫緒戰未た開始せられざるに氏の如き勇士を喪ふ愛惜禁じ難きものあり。然れども氏や重任を果し以て所屬部隊の戰鬪計畫に貴重なる資料を提供し延いて戰勝獲得の一素因を與へしものにして其功績亦皇軍戰史に牢記せらるべく其芳名や千古に語り傳へ其英靈亦不滅に生きて護國の神と仰がれ尚も皇猷を扶翼し奉り又一家の前途に尊き加護を垂るゝことであらう。

氏は戰死の日歩兵中尉に進級し從七位に昇叙せられ次で勳六等單光旭日章並に功五級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵少尉正八位勳六等功六級　小野四郎一

寡兵敵の出撃部隊を撃攘奪取陣地を確保す

氏は大分縣宇佐郡佐田村大字廣谷の人にして父を重次郎母を多禰と稱し明治二十三年十月三十日を以て生れ妻よねとの間に三男二女の子寶を授けられた。明治三十四年三月佐田尋常小學校を卒業し次で安心院高等小學校に進み同三十八年三月同校卒業爾後家庭に在つて父を輔け傍ら地方の先輩に就き讀書、算術等を學び又村内自治、産業等に盡力し其功見るべきものがあつた。氏は資性温厚篤實にして克く兩親に孝養を致し妻子を勞はり愛し曾て人と爭はず交際廣く且深く地方一

般より厚き信望を擔ひ深く敬愛されて居た。

明治四十三年徴兵として歩兵第四十七聯隊に入營し下士官を志願して採用せられ累進して特務曹長となり其間西伯利亞事變に出動し又朝鮮師團に勤務して國境警備に任じ功に依り勳七等青色桐葉章を賜はり大正十四年十二月現役を離れ退營歸郷の後は專ら地方公共事業に盡瘁し或は帝國在郷軍人會佐田村分會長或は青年學校指導員に推され又佐田村收入役に選擧せられ傍ら同村産業組合長兼專務理事を兼ね殆ど私事を顧みる假もない程であつた。

斯くて支那事變勃發するや昭和十二年八月應召麻生中隊に屬して勇躍中支方面の征途に就いた。

氏の所屬中隊は九月十日より同十七日に亘りては川砂鎭次で九月二十二日より十月十日に亘りては長壽橋宅附近更に十月十一日より十一月二日に亘る間は羅店鎭附近十一月三日より同十二日に亘りては黄宅附近の守備に任じたのであるが氏は中隊附として殆ど不眠不休的に連日連夜連絡警戒其の他の勤務に努力し優秀なる功績を擧げた。次いで十一月十三日十四日の劉河鎭附近の戰鬪に於ては氏の大隊は小野部隊長の指揮に屬し十三日より劉河鎭を攻擊し遂に十四日未明敵陣地に突擊し一兵をも損せずして劉河鎭を占領した。而して十一月十五日より十二月十二日までは大場鎭、古里村、蘇州、無錫、勾容、湯水鎭等轉々として高等司令部の警備に當つたのである。

十二月十三日有力なる敵部隊は湯水鎭附近に現出し我が軍司令部は一大脅威を感ずるに至つた。茲に於て氏の所屬大隊は之が撃滅の目的を以て午前十一時二十分行動を起し午後零時二十分該敵に對し戰鬪を開始した。此時第一中隊の第二小隊長は部下一個分隊を以て赤燕山占領の特別任務を命ぜられた爲めに中隊長は中隊附たる氏に第二小隊長代理を命じ赤燕山及狼山の鞍部附近を占領し敵を攻撃すべく命じたる所氏は部下三十九名を以て直ちに指命の地點を占領した。當時氏の小隊長としての指揮は最も適切にして敵情判斷も亦當を得甘家山及一五三〇高地中間凹地内に到達せる敵の先遣部隊を射撃せしめて忽ち其十五、六名を射殺すると共に其後續部隊の前進を阻止し以て所屬大隊の葛巷部落附近への進出を容易ならしめ更に前地の敵情地形を偵察せんが爲斥候を派遣すると共に自ら眼鏡に依り敵情搜索中惜しくも左前方次山方向より の敵小銃彈により胸腹部貫通銃創を受け壯烈なる戰死を遂げたのである。

氏の德性竝に力量は年と共に圓熟し獨り郷土の信望厚かりしに止まらず軍に從ひても能く戰局を看破し周到なる處置と適切なる指揮とに依り常に積極有效に任務を遂行し上下の信賴極めて厚かつた。其佩用せる軍刃は岳父小野維平氏の贈れる名刀關の孫六で氏は常に愛刀を身より放さず古來傳統の大和魂をしつかと把握し一擧一動自づから部下への垂範となり中隊團結の中堅ともなつて居た。寔に是れ皇軍有爲の幹部にして其玉碎は痛惜に堪へないが其功績は天晴れ皇軍戰史に輝き其芳名は不朽に傳へらるべく其英靈亦永世に生き尚も皇軍並に一家の守護神として尊き加護を垂るべく就中各愛子の將來に清き光と强き力とを授け與へる事であらう。

氏は戰死の日陸軍歩兵少尉に進められ正八位勳六等に叙し單光旭日章竝に功六級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵少尉正八位勳六等功六級　加納俊次

壯烈。模範的歩兵砲小隊長

氏は兵庫縣加古郡神野村の人にして父を文藏母をはると稱し明治四十一年一月五日に生れ妻すみゑとの間に愛子、忠俊を擧げた。責性剛毅にして果斷酒煙草は一切之を用ゐず責任觀念旺盛にして諸成績亦優秀であつた。大正九年三月神野村尋常小學校を卒業しその後家庭に在りて農業に從事中昭和二年三月十九歳を以て現役志願兵となり姫路歩兵聯隊に入營し下士官候補生を志願して採用せられ伍長に任官し其後滿洲に派遣せられ各地の討伐並に警備に服し其の功に依り勳七等青色桐葉章を賜はり從軍記章滿洲建國功勞章を授與せられ累進して歩兵准尉となつた。

昭和十二年七月支那事變勃發するや沼田部隊に屬せられ歩兵砲小隊長として八月十日勇躍征途に就いた。而て同月二十一日氏の屬せる大隊が潮宗橋附近に陣地を占領しある約三百の敵を攻撃するや氏は敵彈の下沈着克く部下を掌握し極めて適切なる指揮を以て先づ敵の自動火器を撲滅し以て我が攻撃前進を容易ならしめ遂に敵陣を奪取するに至らしめた。次で八月二十七日より同月三十一日に亘り津浦沿線の敵を攻撃するに當りては氏の小隊は歩兵第七中隊に協力すべき命令を受けた。此の時氏は大に敵情地形を研究し其結果第七中隊長に意見を上申し馬廠川の兩岸に歩兵砲小隊を分置し小隊長は自ら觀測班を率ゐて兩分隊の中間に位置し能く兩分隊をして適切有効なる射撃を行はしめ敵に多大の損害を與へて第七中隊の攻撃を容易ならしめ更に機を失せず歩兵砲陣地を前方に推進して見事敵の掩蓋機關銃坐を破壞し遂に敵陣地を奪取することを得しめた。其の功績は偉大なるものであつた。

續いて馬廠攻撃に參加した。馬廠の敵陣地は要衛地點で敵は巧に地形を利用して堅固に陣地を構築し鐵條網其他の障碍物を設け多數の機關銃迫撃砲等を配備して我が軍を待ち構へて居た。九月九日氏の所屬大隊は敵の最左翼たる丁莊附近に向つて攻撃を開始した。然るに敵は俄然我が側方より重火器を浴せて來た。大隊長は直に歩兵砲隊に戰闘參加を命じた。氏は機敏に陣地を選定し直に放列を布きて此の敵に猛撃を加へ忽ち之を沈默せしめ我が歩兵部隊の攻撃前進を容易にし激戰數刻遂に敵を撃破し次で敗走する敵を追撃して同日午後三時青縣城を占領するに至らしめた。

更に九月十三日より滄州附近の攻撃が開始された。此の時氏の所屬兵團は滄州北方に於て數里に亘り堅固なる陣地を占領せる敵に向つて攻撃した。其の第一線諸隊は先づ敵の前進陣地を攻略して漸次敵を其本陣地に壓迫した。この間歩兵砲隊は待機の姿勢にありて專ら敵情地形の偵察を行つて居たが十七日一部を以て高官屯に搜索據點を占め更に李家婁或は人合庄附近に前進せんとして時機の到るを待つた。斯くて十八日氏の砲隊は安永少佐の指揮に入つた。この日正午の大隊命令に據れば氏の歩兵砲小隊は第七中隊の攻撃に協力すると共に西運河方向の敵を射撃して同方向よりする敵の側射を防遏すべしと云ふのであつた。夫れは此方面よりする敵の側射が友軍歩兵部隊に尠からざる被害を加へ甚しく其の攻撃動作を困難ならしむる懸念が在つたからである。この命令を受領したる氏は奮然として起ち上り午後一時我第一線に近く砲列を布き先づ敵側防機關銃に向つて猛烈なる制壓射撃を加へた。暫くして我砲撃の効果著しく爲に我歩兵線は敵陣に近迫し此の狀況を目撃した砲隊の志氣は大に昂つた。恰も好し此時友軍輕裝甲車も進出して來て敵を猛撃し第七中隊の火線は益々

敵に肉薄するに至つた。氏は部下を激勵して釣瓶打の猛火を以て敵を制壓すれば第七中隊は此機を逸せず突擊を敢行して敵陣地の一角を占領した。氏は機を失せず砲隊の陣地を進めんとしたが前面一帶は浸水泥濘地帶にて敵彈飛來して泥土を飛ばし砲隊陣地の推進頗る困難と見られたが氏は勵聲一番「砲を擔へ」と命じ猛然自ら先頭に立ちて泥濘中を躍進し李家婁部落に達して一層有利なる射擊陣地を占領し自身は直に民家の屋上に驅け上りて射彈觀測をなしつつ敵に猛火を浴せた。然るに敵の第二線陣地より射注ぐ銃火は物凄く飛彈は雨の如くであつたが氏は益々部下を叱咤激勵して敵に猛射を加へた。然るに氏は此奮戰中敵彈に頭部を貫通せられ惜しくも竟に壯烈なる戰死を遂げた。

氏出征の一週間前に愛兒忠俊を設け後繼者が出來たから安心して十分働けると云ひ同夜岳父より餞けせられし名刀助貞を抱いて出發した。氏の陣中通信に、

「母國出帆の時花と散らん覺悟の體清めに入浴したまま其の後は風呂にも入らず、くしけづらず轉戰又轉戰門出の祝ひに父上から戴いた日本刀にてはや十數人の敵を血祭りにしましたが刀には聊かの故障もありません業物を下さつたことをありがたく感謝してをります。（下略）」と誠に勇士の氣魄躍如たるものがある。

氏や義には滿洲警備並に匪賊討伐のために活躍して皇軍の威武を中外に宣揚し更に今次の聖戰に參加して赫々たる武勳を奏し以て東洋平和の鴻業に偉大なる礎石となつてくれた。氏が周到なる着意と熱誠なる服務と勇猛なる奮戰とは正に皇軍幹部の龜鑑であつた。今や風發叱咤の雄姿に接すること能はずと雖も氏の英靈は護國の神となり尙も皇國を守護すべく又氏の高邁なる軍人精神は愛兒の胸に深く刻まるることであらう。噫氏が高き武勳は赫々として皇軍戰史の上に光彩を放ちその芳名は千古に大和櫻と謳はるるであらう。

氏は戰死の日陸軍歩兵少尉に任ぜられ正八位に叙し次いで勳六等單光旭日章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵准尉勳七等功六級　西脇雄一郎

突如優勢なる敵匪と會し全滅する迄奮鬪す

氏は和歌山縣海草郡西脇野村の人にして亡父を善一郎母をハルヱと云ひ、明治四十四年十一月二十九日生れである。人となり果斷氣概に富み幼より軍人たるを希望し他面勤儉力行にして父母に孝養を盡し入營後に於ても暇ある時は花或は供物を携へて歸鄉し亡父の靈に額つき宛も生ける人に對する如く軍務の報告をなし追孝に努むるのを每とした。大正十五年三月西脇野尋常高等小學校を卒業し爾後家庭にあつて父母を助けて農業に從事し傍ら西脇野青年學校に學び昭和五年三月其業を了へた。

昭和七年一月現役兵として歩兵第六十一聯隊に入營軍務に精勵し一等兵を經て同年十二月上等兵に進級し同時に伍長勤務を命ぜられ、昭和八年暮現役滿つるや再服役を志願して同年十二月一日歩兵伍長に任ぜられ同九年十二月歩兵軍曹に進み昭和十年九月支那駐屯警備に任じ交代のため昭和十一年六月原隊に歸還して機關銃隊附として勤務に精勵して居た。

昭和十二年四月滿洲守備の爲渡滿し爾後三江省竹邨附近駐屯警備に任じ七月二十日より二十二日に亘つて磐棒子溝附近の匪賊討伐に從事し更に八月十日より一週間湯原縣内の討伐に際しては小隊長代理として或は豪雨泥濘を冒し或は嶮岨なる山地を跋渉し常に克く部下を掌握指揮し銃隊戰力の維持培養に遺憾なからしめた。殊に十一日レイヘ北側高地附近に於て敵匪と遭遇した際は沈着剛膽適切なる指揮を以て雨下する敵彈を冒し敵を急襲して之に多大の損害を與へ本戰鬪を有利に終結せしめたのであつた。尙氏は銃隊給養掛りを兼ね困難なる狀況下に銃隊將兵馬匹の給養を擔任し其戰力の維持培養に遺憾なからしめた。

氏は十一月二日歩兵曹長に進級し十一月四日龜井部隊命令に基き三道溜和田派遣隊と別れ堂垂討伐隊の小隊長として所屬本部隊に歸還の途次堂垂隊長以下と共に自動車二輛に搭乘し午後二時半頃地局子西北方約千米附近に達せし所突如正面及左右兩側より射擊を受け爰に先頭車にありし堂垂中尉は直に兵員を下車應戰せしめ後車にありし氏も直に下車し部下を指揮して主として南側の敵に對してゐたが敵匪は三方より猛射を加へ來り殊に兩側の輕機銃は其暴威を逞うした。玆に部隊の危機を見て取つた氏は事態を三道溜和田派遣隊に通報する事を應戰中の滿警に命じたが同人は忽ち敵彈に斃れたるを以て更に池上伍長に兵一名を附し通報の任に當らしめた。斯くて彼我の銃火は益々熾烈を極め、氏は部下を叱咤激勵奮鬪して居たが前車方面の銃聲次第に衰へ竟に機關銃の銃聲さへ止みたる爲氏は隊長堂垂中尉の消息を懸念しつゝ矛を轉じて道路北側の敵に機關銃射擊を行ひ小銃兵をして其の兩側より包圍せしめんと彈雨の間を前進し前車附近に達したるに堂垂中尉以下全員斃れあるを見悲憤やる方なく即座に自ら機關銃を執り射擊を加へたが敵彈熾烈にし不幸氏も亦左眼部に貫通銃創を受け終に壯烈なる戰死を遂げた。氏は當初急襲を受くるや沈着剛膽咄嗟の間機敏に和田派遣隊への連絡等適切なる處置を講じ不利なる狀況下に寡兵を以て衆敵に對し而も指揮官を失ひたる悲愴なる場面に於て敢然として攻擊を續行し自ら機關銃を握つて竟に戰場の露と消えたる忠烈勇壯なる行爲は鬼神を哭かしむるものがある。而して匪賊は氏が機を失せず和田派遣隊に通報せし結果多大の損害を受けて敗退したのであつた。氏が竹蓮鎭に移駐のため先發設營に先だち家鄉に

寄せたる音信に曰く「急に命令有り移駐設營の爲先發す、部下八名を率ゐて北滿竹蓮鎭と云ふ處。右の場所は匪賊巢の眞中故毛頭油斷出來ないと思ふ。此の度の先發は非常に重大である全く戰地の設營故如何になるかも不明此の手紙も最後かも分らん勿論　陛下に捧げた身充分奮鬪す、常に六字を胸に入れて何分後の事は依頼して置く」と然り竹蓮鎭は匪賊の巢窟であり氏の豫想は事實となつて現はれ氏は六字の名號の下に安心立命思ふ存分働いたのである。

氏は家にあつては孝出でゝは忠、忠孝兩全の士遺勳は竹帛垂れて後世に輝き其名は滿洲國の發展と共に益々高く英靈は護國の鎭めとして東亜に永遠の平和を導くであらう。

氏は戰死の日陸軍歩兵准尉に任ぜられ次いで勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵准尉勳六等功六級　上田福治

指揮機關長として勇戰奮鬪す

氏は兵庫縣揖保郡余部村の人にして大正二年二月一日生れである。亡父を重吉母をはると云ひ氏は未だ獨身であつた。性溫順なる一面に於て快活剛毅の氣性を兼有し職務に頗る忠實であつた。昭和二年三月鄉里の小學校高等科を卒業し昭和六年一月現役兵として姫路歩兵聯隊へ入營し下士官候補者として同年十二月熊本陸軍教導學校へ分遣せられ翌七年十一月優秀なる成績を以て同校を卒業し爾後果進して曹長に任ぜられた。

支那事變勃發するや沼田部隊藤原中隊の指揮機關要員として勇躍征途に就いた。斯くて昭和十二年八月三十日及九月二日乃至六日の津浦線沿線の戰鬪に於て泥濘と洪水とを意とせず又敵彈雨飛の中を敢然として大中隊間を馳驅し以て命令の

受領傳達並に諸連絡に從事し又中隊戰鬪の實行計畫に參畫し戰鬪に當りては積極的に中隊長の戰鬪指揮を輔佐する等其功甚だ大であつた。

九月九日所屬部隊は丁莊附近の敵陣地に對し夜間攻擊をなすに方り氏の所屬中隊は第二線攻擊部隊であつたが第一線部隊の突擊を容易ならしむる目的を以て午後九時行動を起し東部丁莊東南角陣地に突入した。此際氏は命令受領の職を小林伍長と交代し中隊長の許に在りて中隊突擊の進路を偵察して中隊を誘導し正確に所望點に突入せしめ以て第一線攻擊部隊の突擊を容易ならしめ丁莊夜襲成功の一素因となつた。續いて西部丁莊及其西南堆土の敵陣地奪取に際しては第二小隊の半小隊を指揮し勇猛果敢に奮戰し以て西部丁莊の占領を確實ならしめた。

九月十七日沙宮屯の黎明攻擊並に十九日雪官屯の攻擊に方りては中隊指揮機關長として終始中隊長代理岩崎少尉の許に在りて適切且積極的に中隊長代理を輔佐し其戰鬪指揮を容易ならしめた。次で九月二十一日所屬中隊は馬落坡の攻擊を實施したが氏は依然指揮機關長として中隊長代理を輔佐し午後九時行動を起し午後十一時愈々所屬中隊の展開を完了し攻擊前進を開始した。然るに敵陣地前に一水濠あるを發見するや氏は率先身を挺し水濠に躍り込み水深を偵察中不幸敵彈飛來頭部に貫通銃創を受け壯烈なる戰死を遂げた。

因に氏の所屬中隊長藤原大尉は丁莊の夜襲に於て片眼に貫通銃創を受け瀕死の重傷にて入院したが其の重態の間に大隊長宛に信書を認め氏の功績を讃へ功績調査上の考慮を願出でておる。即ち上田曹長は丁莊の夜襲に於て小官の許に在りて實に我手足の如く連絡に活躍し先頭に立ちて突入し其勇敢なる行動は鬼神を泣かしむる如き殊勳を樹て候に付功績調査に際しては「其點篤と御配慮相成度右依頼申上候」と部下を愛する中隊長の心情もさる事乍ら氏が忠勇武烈の程も亦眼前に彷彿たるを覺えしむる次第である。

氏や夙に軍人精神に透徹し其犀利たる頭腦は同輩に群を拔き一度戰場に立つや盤根錯節に其利刀を試みて餘蘊なかつた。惜いかな聖戰の中道にして玉碎したが其功績は天晴れ皇軍の華北戰史を飾り其名は大和櫻と千古に傳へらるべく其英靈は万世に生きて皇國を守り又一家の守護神として其多幸榮榮を加護する事であらう。

氏は戰死の日歩兵准尉に進級し次で勳六等に叙し單光旭日章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

下士官之部

陸軍砲兵曹長勳七等功六級　奥村正一

寡兵を指揮し群敵と抗戰我が砲廠を確保す

氏は岡山縣阿哲郡刑部町の人にして大正二年六月二十六日生れである。亡父は茂一郎母はマツ代養父は鶴太郎養母はシゲノと稱し氏は未だ獨身であつた。資性溫順にして孝心深く諸事に行屆いて居た。大正十五年刑部尋常小學校を卒業し其後人絹會社に勤務してゐた。小學校在校中は入學以來首席で通した。昭和八年十二月砲兵隊に入營滿洲に派遣せられ其功に依り勳八等に叙し瑞寶章を賜はつた。其後豐橋教導學校の課程を經て下士官に任官し同十一年軍曹に進級した。

支那事變勃發するや昭和十二年七月下旬勇躍征途に上つた。北支上陸後八月二十九日二堡附近の戰鬪に參加し同三十一日王口鎭の敵を攻擊するや砲兵隊は午前十一時戰鬪加入此時敵は望樓及周壁を據點として頑强に抵抗し爲に友軍歩兵の攻擊は一進一止進捗せず之を見たる大隊長は此望樓を破壞し之に據る敵を殲滅するに決し大隊觀測係下士官たる氏は第一線附近に派遣さるることとなつた。氏は放列より八百米前進し敵前僅かに百米の地點に在る堆土に進出した。然るに此堆土は敵の唯一の目標で敵彈盛に飛來し既に二名の歩兵は此位置にて戰傷せるが砲兵の觀測には最も適當の地點なりし爲氏は敢然敵火を意とせず其上に起ちて敵情捜索に當り軈て到着せる觀測將校と共に射彈觀測に當つたのであつた。之が爲大隊長の射擊指揮を容易ならしめ敵の望樓を破壞するに至らしめ歩兵に突擊の動機を與へたのである時に午後一時二十分であつた。本戰鬪に於てかくも短時間に王口鎭を占領するに至らしめたるは氏が勇敢沈着に其任務を遂行せしに依ると云ふも過言ではない。實に其武功は拔群であつた。其後東厚牙鎭東辛莊附近の戰鬪に參加し九月十五日中井支隊の南趙扶鎭附近敵陣地の攻擊に方りては渡邊砲兵大隊の觀測係下士官たる氏は大隊本部觀測所に於て終始敵の猛射の中に在りて部下觀測を區處し剛膽沈着絶へず敵情捜索就中重要目標を逐次發見し又的確に我が射彈を觀測し次で大隊長の戰鬪指揮を容易ならしめ大隊火力を最高度に發揮せしめたる其武勳は亦實に拔群なりと謂ふべきである。

九月二十六日滄縣城を陷いるるや渡邊砲兵隊は追擊隊に配屬せられ德縣城に向ひ夜に日をついで雜行長驅追擊中十月一日午後十一時頃桑園に到着嚴重警戒裡に露營をした。然るに午前三時三十分頃約三四百の敵兵桑園停車場構內我砲廠に夜襲して來た。氏は兵二名を伴ひ休宿地より急遽砲廠に駈着け構內砲廠附近に進入せる敵に對し第七中隊小銃携帶者及大隊本部砲廠監視兵と共に敵と接戰格鬪し其の數名を斃し更に其附近の殘敵を掃蕩中不幸にして左胸部に貫通銃創を受け壯烈なる戰死を遂ぐるに至つたのである。

氏の戰場に臨むや死生の巷に立ち毅然として觀瀉者たる職責を遂行した。就中王口鎭攻擊時の如きは職分の存する所身命を君國に献げて水火尙ほ辭せざるの概を最もよく現はしたるものであらう。又桑園に敵の夜襲を受けたる際僅少の兵員を指揮し其志氣を鼓舞し群敵と奮戰力鬪砲及彈藥積載の列車に一指だも染めしめなかつた如き實に危險を顧みず砲を守護せる行爲は皇軍砲兵の本領を發揮したるものにして又一般軍人の龜鑑たるものである。噫氏今や桑園の華と散りて亡しと雖も其功績は皇軍北支戰史に輝き其名は千載に芳ばしく不滅の英魂

は護國の神として尚も大陸の天地に雄飛して皇國を守り又一家の守護神として其多幸繁榮を加護するであらう。

氏は戰死の日歩兵曹長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級　石川昇

典型的教育者分隊長として壯烈散華す

氏は茨城縣水戸市田見小路の人にして父を茂木德次郎母をせきと謂ひ明治三十七年三月二十七日に生れ石川家の養子となり養父を末吉養母をみよと云ふ。妻もとの間には彰以下三名の愛兒がある。大正九年七月行方中學館第二學年にて中途退學し其後二年半貯蓄銀行に勤務し昭和二年三月師範學校乙種講習科卒業直に小學校訓導拜命翌年青年訓練所指導員となり又昭和六年三月實業補習學校農業教員養成所を卒業し同日復職昭和十一年六月商工青年學校の教職を兼任し翌十二年同校專任教諭となり文檢（作業科）にも合格した。實に教職に在ること十有一年終始一貫至誠横溢實踐躬行以て垂範示教に任じ生徒の敬慕父兄の信賴稀に見る人格崇高なる教育者にして生徒は軍神茂木と崇敬してゐた。氏の人格と熱意に依り良質ならざる生徒を改化遷善せしめた事例も今尚ほ逸話となつてゐる。大正十四年一月徴兵として近衛歩兵聯隊に入營し同年十二月伍長勤務上等兵を命ぜられ昭和三年十月歩兵伍長に任ぜした。

支那事變起るや昭和十二年九月十日應召加藤部隊谷岡隊に編入せられ其出發に際し學校職員に「必ず確かりやります」と述べ生徒には「再び皆樣に御目にかかる考へはありません皆樣も元氣で負けずに」と論し勇躍征途に就いた。中支上陸後九月二十七日より十月七日までは平家宅に待機し十月八日より劉家巷、戴家巷、塘北宅の戰闘に第一小隊第二分隊長として參加し或は選ばれて命令受領者として奮勵努力率先難局に當り然かも其行動は沈着剛膽勇猛果敢であつた。

十月二十二日午前十一時氏は第一小隊第二分隊長として徐家巷の敵陣地に對し射擊すべく劉家行南方四千米塘北宅地區に於て部下數名を指揮し陣地構築を開始せしが當時敵の迫擊砲陣は我陣地に集中せられたるにも拘はらず沈着克く部下を匿處し勇敢に任務を遂行しつつありしが午後四時敵の迫擊砲我陣地内に落下炸裂し右手上膊部右披右前頭部左角頭部及腹部等全身十數ヶ所に砲彈破片創を蒙り其場に倒れ昏醉狀態に陷り直に第四野戰病院に收容厚き手當を受けたるも其甲斐なく翌午前七時竟に名譽の戰死を遂ぐるに至つた。氏が治療中重態の中より「一死奉公以て君國に殉するの機會を得たるは男子の本懷之に過ぎたるはなし」と言ひ又「陣地は出來たか未だ出來ぬか」等死期迫るも一言私事に及ばなかつた。又戰死時腹卷中に秘めたる遺書中「一命之を君國に献ぐる男子の本懷之に過ぎたるものはない。おれは其局部に立つ時其持場々々に於て必ず精進し得る自信を持つてゐる。誓て卑劣なる振舞はないことを御前達は安心してくれ父上母上すべてを御安心下さい（以下子供に對する遺訓省略）」と記されてあつた。

氏は郷に在りては教育者の典型であつた。出でて戰場に立つや遺言の如く告別の辭の如く一身を君國に献げて唯々自己當面の任務に邁進した。其塘北宅に於ける陣地構築の如き彈雨に曝されつつ勃々たる雄心抑へ難きを抑へ平然として作業を指揮せる是れ直前の戰勝に燃えつつ銃劍を揮つて敵陣に突入するより寧ろ至難とせし所である。而かも斃れて死期迫る

も一言も私事に及ばず唯々其任務たる陣地構築の完否を案じて瞑す。職責の存する所家を忘れ身を棄て斃れても尚已まぬ其嵩高なる氣魄は感嘆の外はない。ああ聖戰の半ばにして斯の忠誠勇武の士を喪ふ。眞に痛惜に堪えない。然れども人生限あり名盡くるなし。氏が一身を捧げ全力を傾倒し毅然として至離なる任務を遂行せる其功績は正に皇軍戰勝の尊き礎石となつた。今や氏の壯容に接すべからずと雖も其芳名は永く後世に傳へて軍民の鑑と仰がるべく其不滅の英魂は護國の神となり尚も皇國の前途を擁護し又一家の守護神ともなりて遺族殊に愛兒の將來に尊き加護を垂れ更に鄕黨並に敎子に對しても尊き光と强き力とを與へ授くる事であらう。

氏は戰死の日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級　石平午太郎

輕機の威力を發揚し戰捷の途を拓く

氏は長野縣北佐久郡小諸村の人にして亡父は德次郎母はトメと云ひ明治三十九年十二月一日に生れ妻はなとの間に一子忠身を擧げた。資性善良極めて眞面目の人であつた。大正七年丸子町尋常小學校を卒業後農業に從事し昭和二年一月徵兵として松本歩兵聯隊に入營同年八月第一回に精勤章を附與せられ十二月伍長勤務となり翌三年十一月善行證書及下士適任證書を附與せられて歸休除隊した。昭和七年滿洲事變に際しては同年二月松本歩兵聯隊に應召補充隊勤務に就き同年四月伍長に任官同年十月召集解除となり功に依り勳八等に叙し瑞寶章を賜はつた。昭和四年五月長野縣巡査敎習所に入所爾來長野、松本、上田、赤穗等の各署に勤務し累進して昭和十二年十一月警部に進級した。

支那事變起るや昭和十二年八月二十一日應召し遠山部隊の補充隊に編入せられ十月勇躍北支方面の征途に上つた。十一月四日彰德附近の攻擊に於て氏は中隊長關大尉の指揮に屬し鎌倉小隊第六分隊長として最初豫備隊に在りしが我第一線が敵の第一陣地を突破し次で寺溝村の敵を攻擊するに方り所屬小隊は左第一線に進出し氏も亦火線分隊長として此攻擊に參加した。而して攻擊前進を起すや敵彈雨霰の如く降り來る中に氏は勇敢に分隊を指揮し其の輕機關銃の全威力を發揮しつゝ逐次躍進して敵前二百米にまで近接せしが此時寺溝村西南端附近に在りて我近迫を待ち構へたる敵の掩蓋重機關銃遽かに現はれ我小隊の側方より猛射し來り加之正面の敵亦熾烈なる火力を以て頑强に抵抗せし爲小隊は敵前近距離に於て頗る苦戰に陷るに至つた。氏はかくと見るや彈雨の下之を意とせず分隊を叱咤激勵して速かに此側防掩蓋重機關銃に對し射向を向け猛射を加へしが分隊協力一致最高度の射擊に遂に我小隊を惱ましつゝありしさすがの掩蓋重機關銃も撲滅さるゝに至り小隊は此機を逸せず尚も敵に近迫遂に突擊して同部落を見事占領することを得た。而かも小隊突擊に移るや殲射掃蕩し多大の損害を與へ實に胸のすくやうな戰捷を贏ち得るに至つた。然るに此時早く彼時遲し俄然敵機關銃の狙擊を受け其一彈氏の胸部を貫き無念の一語を殘して壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。されど氏の勇敢なる行動に依り所屬隊は午前十一時寺溝村の敵を擊破して同村を確實に占領した。

氏は迅速機敏に部落東端に進出し機を失せず敗退する敵を殲射掃蕩し多大の損害を與へ實に胸のすくやうな戰捷を贏ち得るに至つた。然るに此時早く彼時遲し俄然敵機關銃の狙擊を受け其一彈氏の胸部を貫き無念の一語を殘して壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。されど氏の勇敢なる行動に依り所屬隊は午前十一時寺溝村の敵を擊破して同村を確實に占領した。

氏は生來頗る眞面目の人、鄕にありても、軍隊に入りても、將又警察官としても終始一貫此性格に變るところはなかつ

た。其戰場に立つや彈雨の下率先常に陣頭に立ちて部下を率ゐ分隊を常に擧止一體となし輕機關銃の全威力を發揮して餘す所なく所屬中隊の戰捷獲得に重大なる素因を與へた。あゝ職分の存する所身命を清く君國に捧げて斃るゝまでも力闘し而も斃るるや「無念」と叫び息のあらん限りは尙も奮闘せんとす。氏の面目や眞に躍如たるものがある。氏の部下より遺族に宛て「石平伍長殿は此激戰に於て我々と共に終始果敢勇猛の奮戰振りで何時も第一陣に出でゝは猛射猛擊を行ひ一同齊しく感嘆してゐた」と音信してゐる。さもありしことゝ感嘆措く能はざる所である。惜むらくは此一戰に早くも此忠誠卓拔の分隊長を失ふ愛惜に堪へずと雖も士の戰場に臨むや既に生死を超越す其赫々たる武勳は皇軍戰史に輝き天晴れ軍人の龜鑑として永く後世に其芳名を傳へらるべく氏が不滅の英魂は護國の神となり尙皇國並に一家特に愛子の將來に限りなき加護を垂るゝ事であらう。氏は戰死の日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級　長谷川直次

勇敢なる輕機關銃分隊長

氏は兵庫縣多可郡重春村の人にして亡父を直吉母をしゆんと云ひ大正三年一月二十四日に生れ未だ獨身であつた。資性謹直にしし言葉少く剛毅にして責任を重んじ犧牲的精神に富んで居た。昭和三年三月重春高等科一學年を修業後播州西脇工業組合に勤務し九年三月農業補習學校を卒業した。在校中は成績優良他の模範であつた。昭和十年一月徴兵として姫路歩兵聯隊に入營翌十一年七月伍長勤務上等兵を命ぜられ同月歸休除隊となつた。

支那事變起るや昭和十二年七月三十一日應召沼田部隊に屬し勇躍征途に就いた。北支上陸後間もなく八月十五日夜半警備中便衣兵五名を捕縛し一同の志氣を緊張せしめた。其の後同月二十一日戰死傷者護送の命を受くるや天津に至り其任務を完了し再び所屬隊に向ひ追及せしが中隊は既に三軒房に轉進せし爲大隊命令に基き第七中隊長野條大尉の指揮に屬し二十七日第一線たる第三小隊の輕機關銃分隊長として趙連庄の攻擊に參加した。敵は第二十九軍にして鐵門橋の堅壘に占據し重機關銃は掩蓋銃座に據りて猛威を逞ふし加之迫擊砲彈を熾んに亂射し頑强に抵抗せしも中隊は午後三時攻擊前進を開始し彈丸雨下する下を逐次前進して敵陣地に近迫せしが敵の抵抗意外に頑强なりし爲突擊するに至らず敵前至近の距離に於て夜を徹し敵と相對峙して翌日の攻擊を準備した。翌二十八日再び戰闘を繼續し午後三時頃突擊の機愈々熟するや小隊長は氏の分隊をして小隊突擊の援助に當らしめた。氏は此命令を受くると共に正面及運河南岸の敵より猛烈なる射擊を受くるも意とせず直ちに分隊を率ゐて敵前三十米の地點に躍進し突擊點に猛射を加へて敵を震駭せしめ小隊をして敵の怯む機會を捕捉して突入せしめた。小隊の突擊成功するや氏も亦迅速機敏に之に追及して敵陣内に入り爾後小隊の敢爲前進に伴ひ常に射擊を以て之に協力し或は其突入を援助し或は敵が執拗にも再三繰り返せる逆襲を擊退し混戰亂闘の中遂に陣内六百米も深く突破前進せしが其際分隊の位置稍々低くして射擊意の如くならざりしを以て小隊と協調の爲最良の位置を求めんと欲し堤防上に登り陣地を物色中運河南岸の敵に狙擊せられ頭部に貫通銃創を蒙つて壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。

氏郷閥に在りては衆の模範たり、軍隊に入りては伍長勤務を命ぜらる。果せる哉其戰場に立つや忽ち天分を發揮し率先陣頭に立ちて分隊を率ゐ能く輕機關銃分隊の全能を發揚して遺憾なかつた。殊に突擊援助陣内の協調是れ小隊に於ける輕機分隊の最も重要なる任務であり一面頗る困苦なる動作である。然るに氏は勇敢機敏見事之を遂行して斃れた。職分の存する所身命を君國に獻げて斃れて後已む氏の如き人にして能くし得る所である。あゝ優秀精悍なる分隊長を此一戰に喪ふ轉た痛惜に堪えないが其赫々の武勳と職責遂行の範とは皇軍戰史の光華であり其芳名は後世永く傳へて以て鑑とすべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ又みたま乍らに皇國並に一家の前途に尊き佑助を垂るゝであらう。

氏は戰死の日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級　大森鶴松

沈着勇敢なる路上斥候長

氏は兵庫縣姫路市安田の人にして父を治郎吉母をシューと稱し大正五年七月十九日を以て生れ未だ獨身であつた。昭和四年三月手柄尋常高等小學校を卒業し同年四月縣立姫路中學校に入學同九年三月同校を卒業し同十一年一月現役志願兵として姫路歩兵聯隊に入營した。人と爲り木訥磊落にして孝心深く又學究心旺盛なる半面體育を重んじ體操教練等には格別の趣味を有し特に喇叭の吹奏を愛好し又水泳に堪能にして中學卒業前年の夏觀海流五里續泳試驗に堂々合格せし程の胸前を持つて居た。軍隊生活は氏が幼少よりの憧憬であつて現役志願兵としての入營は謂はば氏が熱望の達成であつた。氏は入營後下士官を志願し熊本陸軍教導學校に入校翌十二年七月同校卒業歩兵伍長に任官した。卒業と同時支那事變勃發し氏は八月沼田部隊に屬し勇躍北支の征途に就いた。

斯くて八月二十一日には潮宗橋附近、二十五日には趙連庄附近、二十七日より九月一日に亘りては小王莊附近翌二日より津浦沿線の各戰闘に參加した。當時連日の豪雨に至る所泥濘膝を沒し其の戰闘行動の困難は言語に絶するものがあつたが氏は分隊長として克己堅忍分隊員を激勵し奮戰克く努め特に九月七日より十三日に亘る馬廠攻擊の際氏の所屬隊は九日夜丁莊の敵陣地を夜襲し續いて青縣城に向つて敵を追擊した。此の時氏は連日殆ど不眠不休に拘らず敵火の下克く分隊を掌握指揮して勇敢に突擊し又追擊に際しては適時的確なる射擊を以て敵に多大の損害を與へ遂に氏の所屬小隊は青縣城の一番乘りを爲し城頭高く日章旗を樹てた。續いて九月十三日よりの滄州附近戰闘には興濟鎮李家婁馬落坡張新庄附近に戰ひ更に我が軍が德州に向つて追擊の際は二十八日泊頭鎮附近を占領せる敵を攻擊し何れも分隊長として勇敢に奮戰克く其職責を全うした。其後黄河北岸掃蕩戰に際し氏の所屬森本中隊は十一月十三日三官庄附近攻擊の爲先づ夏口鎮に向ひ前進

した。此の時氏は尖兵小隊に屬し其路上斥候長として前進した。然るに午後四時三十分頃突如敵の砲擊を受け同時に前方部落を占領せる敵は猛烈に我に向つて射擊を開始した。氏は直に部下を散開し敵を猛射して尖兵小隊の火線構成を援助し中隊の展開を容易ならしめた。斯くて中隊が攻擊前進に移るや氏は敵の銃砲火の下一進一止勇敢に部下を激勵しつつ敵に近迫した。然るに此猛攻中敵の一彈は氏の胸部を貫通し惜しくも壯烈なる戰死を遂げた。然し所屬中隊は氏等の奮戰の結

果間もなく敵陣を奪取した、

氏は孝心深く出征後も閑を得れば兩親に手紙を送つて慰めて居た。而て氏の實兄三次も特務兵として同じ北支に出征し氏の戰死する以前ゆくりなくも戰場に奇遇し其の情況を氏は仔細に認めて父に送つてる。其手紙を見るもの何人も親兄弟の間は斯くあれかしと思ふ程である此家庭に於て氏の戰死を思ふ時誠に惻隱の情忍び難きものがある。然れども人誰か死なからむ人は一代名は末代、士の戰場に臨むや果戰瓦全を愧づ。氏今や一身を捧げ重責を全うして玉碎す。正に之れ氏の豫期せし所ならむ。而かも氏が最後に於ける勇敢なる行動は敵を正面に牽制し我が展開を援護して包圍の目的を達成せしめた其慧眼と果敢なる處置は正に皇國軍人の龜鑑であり其功績は赫々として永く皇軍戰史に光を放つ事を思へば氏も亦滿足して瞑目せられし事と思ふ。

氏は戰死の日歩兵軍曹に進められ次で勳七等に叙し青色桐葉章竝に功六級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍砲兵軍曹勳七等功六級　大野信行

優秀なる觀測掛下士諸元を報告して瞑す

氏は埼玉縣浦和町の人にして父を近之丞母をはると云ひ明治四十三年五月二十七日に生れ未だ獨身であつた。資性明朗快活しかも小事に動ぜざる豪壯の風があつた。縣立浦和中學校を經て昭和九年三月日本大學法文學部法律科を卒業し同年九月埼玉縣雇として警察部警務課に勤務し同年十一月入營の爲職を辭し昭和十年一月徴兵として三島重砲兵聯隊に入營同年七月精勤章を附與せられ十二月伍長勤務上等兵となり翌十一年十一月善行證書下士適任證書を附與せられて除隊し翌十二年三月通信事務員を拜命して芝郵便局に勤務して居た。

支那事變起るや昭和十二年八月二日應召し木下部隊井戸川隊に編入八月十一日勇躍征途に就いた。北支到着後氏は第一小隊觀測掛下士官として戰鬪に參加した。而て九月二十一日の人合庄附近の攻擊に於ては觀測所と放列の間遠隔し且通視不能加ふるに敵の猛射を浴び射擊基礎諸元の決定頗る困難なりしにも不拘克く小隊長を輔佐し中隊射擊を容易ならしめた。而て翌二十二日北部人合庄に觀測所を推進するや竟に敵の發見する所となり敵は熾に猛射を加へ來り危險極まりなかりしも氏は果敢機敏に行動し迅速正確に射擊諸元を決定し以て中隊は東花園北方敵陣地附近の密集部隊を潰亂に陷らしむるを得た。更に翌二十三日南部人合庄に於て右翼隊歩兵第一線の前進を妨害する敵を發見し速かに射擊諸元を決定し初發より有効彈を發射し迅速に之を制壓することを得た。又二十四日午前四時頃東花園附近に於て敵の逆襲を受くるや此時亦冷靜迅速に射擊諸元を決定し完全に此敵を阻止することを得た。

十一月二十日より黄河北岸の掃蕩戰開始せらるるや二十二日は黄河右岸の工事妨害並に要點制壓の爲め射擊諸元の決定敵情捜索及射彈觀測に任じ以て中隊長の射擊指揮を容易ならしめ二十四日は前々日來津浦線上を移動しつつ巧に我鵲山觀測所を射擊し且我行動を妨害しつつありし敵の列車砲を射擊するに方り我觀測所は敵に暴露しありたる爲敵の銃砲彈の猛射を受け絶へず附近に砲彈炸裂したが氏は沈着剛膽少しも危險を顧みず迅速機敏に射擊諸元を決定し中隊の射彈は最初よ

り列車砲の附近に落達し爲に速に敵列車砲をして進退不可能に陷らしむることを得た。次で黄河鐵橋南端附近にある敵砲兵に對し測地成果を利用して射撃する爲氏は測板作業を實施して居た所惜しくも敵小銃彈の爲下腹部に貫通銃創を受け直に收容後送せられたが後送中午前二時十二分竟に戰線の華と散つた。氏は後送せらるる際「中隊長殿殘念です」と云ひ死期迫るも「方向角二千五百九十」を正確に再三連呼し「陛下の萬歳」を叫び最後に「兄貴によろしく」の一語を殘して絶命した。

氏の家郷に送りし書面中「元氣で決して遲れをとるやうな事は致しませんから御安心下さい」又「人生の悟りといふものは死地に入つた時に得らるるものと今回始めてわかりました。無慾の世界程輝かしいものはありません」又「私達觀測掛は敵前百五十米勇壯の最大限筆紙には盡せません」とあり氏の戰場に臨むや砲兵の最も困難且重要なる觀測掛として猛火の下死線を超へ沈着剛膽常に正確なる射撃諸元を提供し殊に速度を利用して我射程外に逸走せんとせる列車砲に對し機を逸することなく之を捕捉せしめたる如き實に野戰重砲の全威力を發揮せしめて遺憾なかつた。然かも傷づき死期迫るも自己職責の存する所身命を君國に獻げ斃るるも尚已まざる眞に是れ軍人精神の精華と謂ふべきである。氏郷に在りては前途洋々の身出でて軍に從ひては有爲の士之を思ふの時轉た愛惜の情に堪へぬ。されども人は一代名は末代、士の戰場に臨むや累戰瓦全を愧づ氏今や一身を捧げ重責を完うして玉碎す氏の最後の一言蓋し感慨無量のものあらんと察せらる。ああ赫々たる其武勳と透徹せる責任觀念とは千載に傳へて鑑とすべく不滅の英魂は護國の神となり尚も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るる事であらう。

氏は戰死の日砲兵軍曹に進級し又選信省通信書記補に任官し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級　勝田一

優秀なる分隊長敵の奇襲に玉碎す

氏は兵庫縣氷上郡遠阪村の人にして父を達治母をしずえと稱し大正六年三月二十四日に生れ未だ獨身であつた。性質溫厚孝心深く模範青年と稱せられた。昭和七年三月幸世高等小學校を卒業し爾來家庭に在りて農業に從事し餘暇を以て獨學に精進すると共に青年訓練所に入り入營時に及んだ。

昭和十年一月現役志願として篠山歩兵聯隊へ入營し同年十一月選ばれて陸軍教導學校に入校し在校間機關銃の射撃成績優秀に付第一種射撃徽章を授與せられ翌十一年十一月卒業歸隊し間もなく歩兵伍長に任官せしめられた。氏の軍務に從事するや熱誠横溢し其成績常に優秀にして昭和十年度秋季演習間指揮機關として活躍し他の模範として聯隊長より表彰せられた。

昭和十二年四月越生部隊に屬し第二機關銃分隊長として勇躍渡滿し五月七日より六月二十四日に亘る間は密山縣平陽鎮に在りて警備に任じ戰鬪資材及陣營具類の整備其他特別教育の助教として多岐多忙を極めたるに拘らず常に積極的に任務を遂行し次で七月七日以來同月下旬に亘りては依蘭縣依蘭に移住し同地方警備の重任に就いた。其間氏は前記業務に精勵し克く部下班員を確實に掌握指導し自ら難局に當り警備の重任遂行上聊かも遺憾なからしめた。

斯くて七月十三四日には太平庄の討伐に參加し適切に部下を指揮掌握し交戰に際しては克く戰況を明察して重要部に部下の火力を集中せしめて多數の敵匪を殪し戰勝の一素因を作爲し同月十五六日の黄魚島附近の討伐及同月二十七日より二十九日に亘る團山子附近の討伐に於ては終始一貫勞苦を厭はず進んで難局に方り率先範を垂れ部下を確實に掌握指揮して

所屬部隊の戰勝獲得に寄與せる所甚だ大であつた。

七月三十日より八月四日に亘る馬廠附近の討伐に於ては氏の所屬せる機關銃隊は團山子治安隊の監視及討伐據點の構成並に匪情及地形搜索の命を受け團山子に派遣せられた。當時所屬隊は機關銃隊の外小銃隊をも編成したが氏は小銃分隊長を命ぜられ極めて緊張裡に匪情偵察其他の劇務に服する中八月一日夜約八十名の匪賊は馬廠に侵入し同部落に放火せる旨村民の通報に接し所屬部隊は二日午前六時三十分團山子出發馬廠に向ひ出動した。午前九時馬廠へ到着したが附近の地形は玉蜀黍畑多く其高二米に達し又耕作地以外は水深五十糎内外の濕地にて部隊の行動甚だ困難なるに拘らず氏は小銃分隊を率ひ勇敢に馬廠部落に進入せしに敵は既に遁走し同村南方約千米の無名部落に潛伏中なる情報を得午前九時二十分馬廠を出發更に同村に向ひ前進した。此時突如我部隊先頭より約百米前方の地點に敵砲彈炸裂し匪團の近きを知つた。玆に於て所屬部隊は直に疎開隊形に移つたが敵の第二砲彈は氏の前方約十米に落下炸裂し不幸にして其破片を受けて兩足を骨折せられ出血甚だしく歩行意の如くならざりしも氏は毅然として部下の志氣振作に努め更に自ら分隊の先頭に立たんとしたが遂に及ばず其場に倒れ午前十時二十分後方に收容せられ手厚き加療看護を受けたが八月四日竟に殉職の華と敢つた。

氏は優秀なる才幹を有し上下の信望厚く終始一貫報國の丹心に燃え眞に精悍有爲なる下士官であつたが不幸匪彈を受けて尊き人柱となつた。而かも氏の雄腕を十分に發揮するを得ずして玉碎せるは寔に痛惜に堪へぬ次第である。然れども大局より考察すれば支那事變勃發と共に滿洲にある共產匪は皇軍の背後に一大脅威を與へんが爲滿洲國内に於て由々しき陰謀を企て各地に蜂起して其安寧秩序を攪亂し初めたのでありそれを適時適切に鎭定或は徹底的に懲膺し大事に至らしめざりしは全く氏等の尊き犧牲奉公の賜物であつて其重任遂行は對支皇軍の功績と何等徑庭ある譯ではない。今や颯爽たる雄姿に接する能はずと雖氏の崇高なる犧牲的行動は天晴れ軍人の龜鑑であり其英靈は永世に生き皇國並に一家の守護神として其將來を加護することであらう。氏の父は「國家の爲に捧げた命です病死しても仕方がないですが戰死は本人もさぞかし本望に思ふて居る事でせう。お國の爲役立つた事は男子の本懷家門の名譽として滿足此上もありません。世間には獨りぼつちさへ失つてる事を思へば私の方には未だ後に二人も殘つて居ますから」と健氣に語つた。氏は極めて剛膽にして何時も部下に笑つて死ねよと言ひ聞かして居たが兵の辛苦を思ひやると下す號令も血を吐く思ひであると通信して居るが是れ亦寛猛相濟す其片鱗の現はれと云ふべく父子双璧の美談たるを失はぬ。

氏は戰死の日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し靑色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜つた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級　垣内孝

企圖心旺盛、中隊の苦境を打開す

氏は岡山縣苫田郡富村の人にして母をひさよと云ひ大正三年四月十六日に生れ未だ獨身であつた。資性溫良克己心强く氣慨に富みし人であつた。昭和四年三月富尋常高等小學校を又同九年十二月津山市商業專修學校を卒業し靑年訓練所の課程と同等以上の課程を修了せし事を校長より證明されて居る。又小學校高等科一年の際一年間一日一善を實行之を記錄し

て賞狀を附與せられ高等科卒業の際は操行善良學業優秀衆の模範として表彰せられた。又專修學校卒業に際しては日本國防協會長森岡大將より入營準備模範兵講習錄全學期修了證書を授けられた。氏が認めたる日誌中「昔は武士の子は武士町人は町人百姓は百姓となり出世することが出來なかつたが今日は學問次第なれば大臣の椅子にも坐ることが出來る其れを思へば學問して出世の糸口なきにしもあらず將來は軍人となりて世の人や國家の爲に盡したい」と記載してある。以て氏の向學心と軍人希望との熱烈さを窺ふことを得やう。昭和十年一月

徴兵として岡山歩兵聯隊に入營翌十一年十二月歩兵伍長に任官した。在隊間は劍術特に優秀にて賞狀を附與せられ又平素勤儉にして在隊三年間に百圓の貯金を爲した。

昭和十二年七月支那事變起るや赤柴部隊第二中隊に屬し八月勇躍北支に向つて征途に就いた。內地出帆に際し母親に送りし書面中「內地の土も最後かと思ふと感慨無量です」と記載しあり萬死に一生をも期せざりし決意の程を想察し得るのである。北支上陸後は天津良王莊附近の警備に任じ八月二十一日は畢庄子徐庄子の戰鬪に參加し八月二十二日午後二時頃敵の逆襲を受くゝや勇戰奮鬪之を擊退した。

八日二十三日東邊庄の戰鬪開始せらるゝや氏は第一中隊第一小隊第六分隊長として第一線となり此攻擊に參加した。午前五時中隊攻擊前進を起すや忽ち掩蓋銃座に據る敵の側防機關銃現はれ猛烈なる側防火を浴せ來り中隊の攻擊前進頗る困難となつた。これを見たる氏は其猛烈なる敵火の下沈着よく部下を掌握し前日本拂曉攻擊の爲に豫め偵察しありし陣地（制高地點）に進出し迅速機敏に該掩蓋重機關銃に急襲的猛射を浴びせて瞬く間に沈默せしめた。中隊は此機を逸せず前進を開始せしが氏も亦第一線に追及すべく敵の猛射を意とせず率先分隊の先頭に立ちて部下を激勵し果敢なる前進を續行した。然るに其途中不幸敵の一彈右大腿部を貫き其場に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。

氏幼にして善行を續け克己心强く俗に所謂負けず嫌ひの人であつた。果せる哉戰に臨むや盤根錯節に會するも不撓不屈率先陣頭に立ちて分隊を率ゐ沈着剛膽或は迅速なる陣地占領となり或は適確なる射擊指揮となり或は敢爲前進となり常に分隊を打つて一丸とし飽迄目的に向て邁進し輕機分隊の全威力を發揮して遺憾なかつた。實に職分の存する所身命を君國に献げ將來に燃ゆる望を一擲し全力を傾倒して萬死に一生をも期せざりし氏の如き人にして能くし得た所である。氏人生に洋々の前途を殘し聖戰中途にして斃る。惜みても餘ありと雖も士の尊ぶ所は出世にあらず名を惜むにあり瓢全にあらず名を殘すにあり。氏や待望の軍人となり一戰玉碎念願の如く世の人の爲國家の爲に盡して芳名を後世に遺す。本懷之に過ぎたるはないであらう。氏今や亡しと雖も赫々の武勳は千載に輝き不滅の英魂は護國の神として尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝであらう。

氏は戰死の日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並功六級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級　上山樟太

壯烈、死を以て父の敎訓を守る

氏は岡山縣邑久郡邑久村の人にして父を瀧藏母を政子と云ひ大正二年九月二日に生れ妻滿壽子との間には未だ子はなか

つた。昭和六年三月吉備商業學校を卒業した。氏の父瀧藏氏は元來短身の爲に徴兵檢査に不合格となり恰も日露戰役に際會しながら從軍叶はず其爲戰役當時せめて軍事公債を求めんとせるも家貧にして其一枚すら購ふことを能はず已むなく夜業に一枚三厘の蒐依を編みて漸く赤十字社に入社せる程の篤志の人であつた。夫れ故氏の生るるや兵役御奉公の念願を氏によりて達成せんとし貧困の中養育大に努めた。氏は生來虚弱なりしも長ずるに從ひ體力の向上に努め特に商業學校在校中は劍道の主將として名譽を擧げ一度も敗をとりしことなく更に斯道に精進遂に大日本武德會より四段を允許せられた。昭和八年十二月岡山歩兵聯隊に入營間もなく渡滿翌九年四月幹部候補生を命ぜられ五月屯營歸着十一月伍長に任官除隊した。歸還後滿洲事變の功に依り勳八等に叙し瑞寶章を賜はつた。後又昭和十年四月巡査練習所に入所し巡査を拜命した。

昭和十二年七月支那事變起るや間もなく應召し赤柴部隊に屬し出征した。其出發に際し父は氏に「白木の箱か金鵄勳章かでなければ再び家の敷居は跨がせぬぞ」と力强く敎訓した。氏は敎訓を體し八月十日勇躍征途に上つた。北支上陸後八月二十三日午前五時過より所屬隊が西邊庄の敵を攻擊するや氏は第一小隊連絡掛として敵の銃砲彈雨霰と注ぐ中に絶へず敵情を監視し敵の機關銃や迫擊砲の位置を確かめ擲彈筒を以て機を失せず之を制壓し各分隊をして常に小隊長の意圖の如く誘導し敵動搖するに至るや率先敵陣に突入して敵に多大の損害を與へた。次で東五里庄の敵を攻擊するや右翼分隊を指揮して敵を包圍し勇敢にも第一番に敵陣地に突入して之を占領し。八月二十九日には王官屯附近三十一日には雙樓及挑家庄附近九月四日は馬集次で五日には曲庄、陳庄の敵を攻擊して之を占領し更に五日午後二時より後屯の敵を攻擊するや敵の銃砲火身邊に集中するも意とせず一進一止敵に近迫して率先敵陣に突擊して午後四時之を占領した。

九月十日馬廠河を敵前渡河して攻擊するに方つては決死隊に加はり午後三時五十分砲兵支援射擊終了と共に一番發動艇に乘艇陸官屯東方運河右岸に一齊上陸し敵の銃砲彈雨下する中を意とせず左右に移動しつつ各分隊を誘導し敵の側防機關銃を發見するや擲彈筒分隊輕機分隊をして之を射擊せしめ其彈着を觀測しつつ其射擊を指導して遂に之を制壓し敵と四、五十米に接近せし際小隊長戰死するや直に小隊長に代り小隊を指揮して奮戰し午後四時二十分正面の敵逆襲し來れるも竟に之を擊退し更に殘敵の逃るるを追つて猛烈に追擊した。然るに其際不幸敵彈右胸部を貫通し午後四時四十分遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。氏の重傷を負ふて壕に收容さるるや「自分の父は身體が小さくて兵隊にも行けなかつた。今度自分が出征する時稻を抱いで歸るか稻に乘せられて歸れと云つた。然るに自分の奉公の功少くして慚愧だ。必ず七生して國を護るぞ」と苦しき息の下に語り「天皇陛下萬歳」を三唱して竟に逝いた。

氏の戰功を知らんと欲せば先づ氏の父を見ねばならぬ。人誰か愛憐の情なからん而かも大義の前には儼乎として其子に敎訓す此父にして此子あり。果せる哉氏の戰場に立つや眷々父の敎訓を奉じ彈雨の下身命を君國に獻げて一死を鴻毛の輕きに措き其活躍は實に目覺しきものがあつた。殊に武技は自ら恃む所あり每戰率先敵中に突入し其壯烈鬼神をも哭かしむるものがあつた。然かも斃るるも已まざらんとし死期迫るも七生報國の決意を遺す。何ぞ其の忠烈なる。今や氏の如き得難き勇士を喪ふ惜みても尙餘ありと雖も氏や一身を獻げ全能を傾倒し父の敎訓を履行して斃る。加之氏の成功は聯隊長より特に侍從武官に報告する所となる。死して餘榮ありと云ふべきである。父の敎訓と氏が赫々の武勳とは共に國民の鑑と

して千載に傳へらるるであらう又氏の勇魂は後世輩出すべき勇士等の魂に甦へり皇國の前進を加護すべきは勿論一家の將來にも尊き佑助を垂るることであらう。

氏は戰死の日歩兵軍曹に進級し又巡査部長に進み次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級　加藤次郎

決死傳令遂に戰捷の途を拓く

氏は兵庫縣城崎郡中筋村の人にして父を菊三郎母をやなと云ひ大正三年九月十五日に生れ未だ獨身であつた。責性篤實積極的にして一家逆境中ありたるも屈せず艱難を克服するの氣概を有してゐた。氏は家庭の都合上昭和三年三月中筋尋常高等小學校高等一年にて中途退學せしも向學心强く獨學怠りなかつた。青年訓練所に於ては學級の首腦となり熱心且自發的に校風の振作に寄與せし所多く衆の模範として校長及査閲官より屢々賞詞を受けた。昭和十年一月徴兵として鳥取歩兵聯隊に入營し同年十二月伍長勤務上等兵を命ぜられ翌十一年十二月歩兵伍長に任官し此間精勤章劍術徽章及射撃の賞狀を附與せられた。

支那事變起るや昭和十二年八月長野部隊に屬し勇躍征途に就いた。北支上陸後家鄕に送りし書面中「我々の任務を達成すべき時は近づいた。今は最早何も思ふ事とて無之正義の刄にて暴戾なる支那兵を斬つて斬つて斬りまくり十分懲らしめたいものと存じます。誓靈忠報國」と又第二信には「豫て覺悟の上なれば決して人には後れはとり申さず父母樣や家名を恥かしむる如き行動は爲さざるやう心に誓ひます此手紙が最後かも計り知れ申さず」と認めてあつた。而て九月七日より馬廠附近の攻撃開始せらるるや七日勇躍將校斥候に加はり敵火の下單身敵陣地前約百米に近迫し勇敢剛膽敵の側防機關障碍物の狀態等を仔細に偵察し斥候長を輔佐して貴重なる資料を提供した。又十日小王莊と流河鎭の殘敵掃蕩を開始するや兩村落の中間高粱畑に潜伏せる十餘名の敵兵頑强に抵抗し容易に沈默せざりしが氏はかくと見るや自ら擲彈筒を操作して見事瞬時に此敵を撲滅した。又此掃蕩間中隊主力の右側に挺進せる第三小隊長との連絡を命ぜらるるや危險を冒し絶へず其連絡を維持し以て中隊の掃蕩戰を容易ならしめた。

九月二十三日姚官屯附近を占領せる堅固なる敵陣地の攻撃に方つては大隊の右第一線たる所屬中隊は敵火を冒しつつ一進一止敵前三百米に近迫した。此頃銃砲聲殷々として轟き約二百米右方に離隔せる第三小隊との音聲連絡は絶對不可能となり且敵火の爲に傳令は數名負傷するに至り全く其連絡杜絶せんとした。此の時中隊連絡掛たる氏は自ら肉彈となり敵火の中を躍進して之と連絡をとり尙かくすること實に三回に及び第三小隊をして中隊長の掌握下に意圖の如く突撃準備を進捗せしむることを得た。斯くて午後二時中隊は第一小隊を右側掩護に當らしめ主力を以て姚官屯驛に突入せしが此時第一小隊は孤立の狀態となり三方面より猛烈なる敵火を蒙り頗る苦境に陷つた。然かし其位置たるや中隊の突撃の爲のみならず大隊全般の右側掩護上絶對死守すべき要地なりし爲中隊長は氏に此旨傳達すべく命令した。氏は敵彈雨下する中を勇躍發進第一小隊に向つたが忽ち敵彈の爲右下腿に貫通銃創を受けた。而かも氏は之に屈せず遂に小隊長の許に到達し確實に此命令を傳達した。然るに第二小隊は激戰中なりしを

以て氏は繃帶する暇もなく之に加はり小隊長を輔佐し小隊は數度の逆襲を擊退した。氏は其後野戰病院に收容せられ手厚き看護を受けたるも其甲斐なく十月三日同院に於て悼ましくも華北戰線の華と散つた。然かも所屬隊は氏の勇敢なる行動に依り同日午後三時四十分遂に姚官屯驛を占領するに至つた。

氏の鄕に在るや雛局踏破の氣骨あり衆の模範とせし所であつた。其戰場に立つや亦勇躍屢々死地に身を投じて以て重要任務を遂行し而かも負傷するも屈せず尙奮戰す眞に氏の面目躍如たるものがあつた。然るに聖戰の中途にして可惜有爲の下士官を喪ふ洵に愛惜の情に禁へず。然れども氏や一身を捧げて其重任を全うし芳名家門を飾る。其赫々たる武勳は正に皇軍戰史に輝き永く後世に傳へて以て軍人の龜鑑とすべく又不滅の英魂は護國の神と仰がれ尙も皇猷を扶翼し奉り且一家の將來に尊き佑助を垂るる事であらう。

氏は戰死の日步兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍步兵軍曹勳七等功六級　田村敏夫

至忠至孝、勇敢なる分隊長

氏は山口縣宇部市の人にして父を普槌母をスマと云ひ大正三年十二月十七日に生れ未だ獨身であつた。資性溫厚實直兩親に對し極めて孝心深く又弟妹に對する愛情も誠に濃かであつた。昭和四年三月沖山尋常高等小學校を卒業し其後昭和十年末まで宇部市役所に勤務其間商業學校補習科英語科を修了昭和十年には第二種特種自動車運轉手免許證を下附せられた。氏は幼より軍人を希望し十八歲の時海軍を志願して二十歲の時現役志願を爲したるも痔疾の爲不合格となりしが徵兵檢査の時は快德合格するや藏外志願兵として入營し二年來の宿望を達した。斯くて昭和十年十二月龍山步兵聯隊に入營翌十一年六月には精勤章を附與せられ同年十二月伍長勤務上等兵を命ぜられ同十二年六月下士適任證書を附與せられて歸休除隊となり爾來曹達工業株式會社に勤務して居た。

支那事變起るや昭和十二年七月十八日森本部隊に應召深野隊に編入せられ勇躍征途に就き北支到着後九月一日步兵伍長に任官した。父普槌氏は氏の戰死後曰く「私共家の者凡ては敏夫が出發する時に生きては歸らぬと勇み立ちて出て行きましたのでその時から覺悟はきめてゐますのでもう諦めてゐます」と又氏の戰地より家兄に送りし書面中今生の御願にと「父母も老先短き生命故最後まで孝養を盡されん事を只管御願申上ます之れが兄上樣として君に忠であると思ひます」又「近日中當地發保定に進擊開始の豫定之れが最後かも知れません」と氏が忠孝一途の精神と萬死に一生をも期せざりし決意の程を窺はるゝのである。

九月十六日所屬隊が寶店站占領に引續き望楮攻擊に方るや氏は右第一線小隊たる第三小隊の第四分隊長として中隊第一線となり午前五時三十分圍壁に據る敵に對し攻擊を開始し猛射を浴びせ敵をして抵抗を斷念して退却の已むなきに至らしめた。續て寶店鎭を攻擊するに方つては中隊直轄として中隊長の意圖を體し要點を射擊しつゝ敵の抵抗を排除せしが特に中隊の前進を最も妨害せる右突角のトーチカを猛射して之を制壓し中隊の前進を容易ならしめたるも逐次敵に近迫するに從ひ敵彈益々猛威を逞ふし死傷續出中隊の前進愈々困難となり一時

壕を構築するの已むなき狀態となつた。かくと見るや氏は獨斷以て現に我に最も危害を與へつゝある敵の中央トーチカに猛射を浴びせて之を沈默せしめ逐次突擊準備中顏面に擦過銃創を負ふた。然し氏は毫も屈せず中隊突擊の機熟するや中隊の突擊點たる敵陣地の東北角に更に一層の猛射を加へて之を制壓し中隊をして其機を捕捉して突擊せしめた。續いて氏も亦直に分隊を提げ突擊を敢行し敵前七八十米に達せし時敵の側射を蒙り惜しくも頭部に二彈貫通し壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。

氏や家に在りては孝養至らざるなく出でゝ戰場に立つや忠孝一途の精神に基き勇戰奮鬪家を忘れ一死を鴻毛の輕きに致し進んで猛火の下に立ち分隊を掌握指揮して幾度か堅陣を制壓し中隊の攻擊を容易ならしむ。眞に至孝にして至忠の人と言ふべきである。征戰幾何もなくして氏の如き有爲の分隊長を喪ふ眞に愛惜の情禁ぜずと雖も氏や一身を獻げ分隊長たるの職分を完うして斃る。特に待望の軍人となり然かも戰場に立ち華々しく戰つて玉碎す。其赫々の武勳と忠孝一途の示範とは永く後世に傳へて以て鑑とすべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ尙も皇國の前途並に弟妹等の將來に尊き加護を垂るゝであらう。

氏は戰死の日步兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し靑色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍步兵軍曹勳七等功六級　高木茂

壯烈斃れて後も敵情捜索の眼鏡を離さず

氏は兵庫縣姫路市五軒邸の人にして亡父を榮母をていと云ひ大正三年一月十四日に生れ未だ獨身であつた。資性頗る謹嚴にして責任觀念旺盛世人の信用厚かつた。昭和三年三月船場小學校高等科を卒業し其後市內セルロイド加工中谷商店に勤務傍ら靑年學校に通學昭和九年三月同校を卒業した。而して小學校靑年學校共組長に選ばれ成績優等であつた。昭和十年一月徵兵として姫路步兵聯隊に入營同年八月精勤章を附與せられ同年十二月伍長勤務上等兵となり翌十一年七月歸休除隊した其在隊間は射擊優秀で射擊章を附與せられてゐる。

支那事變起るや昭和十二年七月二十七日應召沼田部隊に屬せられ八月勇躍征途に就いた。氏の所屬中隊では下士官適任證書所持者中八名が伍長に任官したのであるが氏は人格力量共に拔群にして第一位として任官し衆望を擔ひ好評嘖々たるものであつた。殊に所屬小隊長は氏を片腕と恃み其信賴は絕大であつた。北支に上陸するや九月二日より六日に亘り津浦線の同月七日より九日までは馬廠附近の同月十三日より二十六日までは滄州附近の戰鬪に夫れ〴〵分隊長として參加し常に率先陣頭に立ち部下の掌握適切にして克く輕機分隊の威力を發揮し各戰捷の途を開拓し中隊戰鬪に貢獻せる所甚だ大であつた。

斯くて所屬部隊は九月二十七日より德州に向ひ追擊に移つた。氏は中隊長安武少佐の指揮に屬し左追擊の左側衞として津浦線南側道を李黃家に向ひ急追した。恰も午後一時柴庄部落に其精銳を誇る敵中央軍の騎兵が陣地を占領しあるを知り中隊は直に展開して此敵に對し攻擊を開始した。氏は中隊の中央第一線たる第一小隊の第五輕機關銃分隊長として右第一

線に展開し攻撃前進を起した。彈丸雨飛の下之を物ともせず勇敢にも率先陣頭に立ちて分隊を掌握指揮しつゝ又輕機の最大威力を發揮して敵を制壓しつゝ第一線の前進を容易ならしめ逐次敵に近迫し敵前百五十米に達し克く戰機を看破して有利なる目標を捉へて適切有效なる射擊を行へば敵は大なる苦痛を感し氏の分隊を目がけて猛烈なる集中火を射注いだ。氏は全般の戰況を察し此猛火の中に毅然として屈せず双鏡を以て敵情を具さに視察中飛來せる敵彈鼻下より後頭部に貫通し無念右手に堅く双眼鏡を握りたる偉壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。

氏幼より學術優秀而かも極めて謹嚴一郷の模範となり出でゝ軍務に就くや克く其俊秀を伸べ其德部下を驅つて渾然一體幾度か死線を突破す。而して柴庄の激戰に兇彈に斃れたるも堅く双眼鏡を握りて放たず尙も敵情を搜索せんとする氣魄を止めて其崇高なる責任觀念と壯烈なる臣節を全うした。所屬小隊長は此身の不德より此勇士を喪つたと男泣きに泣いた。所屬分隊の部下は親鳥を喪へる雛の如く悲んだ。だが弔合戰は悲憤骨髓に徹し間もなく此頑敵を粉碎し此日午後五時三十分には李黃家の敵を擊破して同部落を占領した。あゝ赫々たる氏の遺勳は天晴れ軍人の鑑皇軍戰史の光華であつた。今や氏の壯容に接する能はずと雖も其芳名は永く後世に語り傳へらるべく其英靈亦不滅に生きて護國の神となり尙も皇國並に一家の前途に尊き佑助を與へる事であらう。

氏は戰死の日歩兵軍曹に進級し次いで勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級　高橋重夫

勇敢なる擲彈筒分隊長

氏は兵庫縣多可郡杉原谷村の人にして父を寅吉母をこまきと云ひ大正五年五月二十日に生れ未だ獨身であつた。性剛健着實にして孝心深く弟妹に優さしく又郷黨の公共事業にも盡力し世人の信望厚かつた。昭和四年三月杉原谷尋常小學校卒業後神戸市立第一神港商業學校へ入校し同九年三月同校卒業同十年一月現役志願兵として姫路歩兵聯隊へ入隊した。氏は幼少より頭腦明晰にして小學校在學間は首席を以て終始し商業學校在學間も成績拔群の譽高く心身共に鍛練され爲に軍隊生活に入りても其成績優秀にして入營年の十二月には早くも上等兵となり同時に伍長勤務を命ぜられ翌十一年七月には善行證書及下士官適任證書を附與せられ輝やかしく歸休除隊となつた。除隊後は青年團幹部及び在郷軍人分會班長に推され熱誠努力以て之が向上發展に貢獻せる所甚だ多かつた。

昭和十二年支那事變勃發するや召集せられて沼田部隊に屬し同年八月勇躍征途に就いた。斯くて九月中旬に於ける馬廠附近の戰鬪には第九中隊第三小隊第四分隊長として勇戰奮鬪小王莊を攻略し其後警戒勤務に又火線中隊間の水上勤務に服し常に積極的に任務を完了し九月二十一日所屬部隊が第一回夜襲を決行するに方りては氏の所屬中隊は此夜襲を容易ならしむる目的を以て敵陣地の一據點たりし王庄子の堅陣に對し牽制を命ぜられ膝を沒する泥濘地を前進し敵前三百米に達するや敵の發見する所となり敵銃砲彈の猛射を受け携行せし水濠渡渉用梯子も半數は破壞され突入不可能となつた。玆に於て泥水中に浸る事三日間不眠不休部下を激勵し適時適切なる射擊に依り當面の敵を牽制し克く其任務を遂行した。第二回の夜襲に際しては中隊は當

初聯隊豫備隊として第五中隊の後方に位置し敵前九百米に於て軍旗並に聯隊本部の直接掩護を命ぜられた。氏は志氣益々旺盛にして敵砲彈及殘敵の猛射を浴びつつ第一線部隊に跟隨して敵陣内に侵入し高粱繁茂の泥濘地を猛進し東天漸く白む頃朝靄の裡に張新庄の部落を認めた。此時我が第一線大隊は既に該部落を包圍する如く攻擊中であつたが所屬中隊長は敵の退却を豫想し且呉官屯方向より時々敵射擊を受けあるを認め獨斷一部を以て先づ第一線大隊の右翼に連繫し張新庄南方地區に派遣し敵の退路を遮斷せしめ軍旗小隊來着するに及び中隊主力を以て該方面に進出せんとした。然るに其前進途上先きに派遣せる部隊より敵の優勢なる逆襲部隊と遭遇戰を交へある報告を受くると共に直接警戒の爲派遣しありし斥候よりも呉官屯方面より優勢なる敵の逆襲部隊の來襲せる旨の報告があつた。玆に於て中隊長は先づ呉官屯方面より來襲せる敵を擊破し續いて先遣部隊方面の敵を攻擊するに決し行動を起すや俄然側面に優勢なる敵現出し不期遭遇を交ゆるに至つた。彼我兩軍は壯烈なる近接戰の後之を擊退し爾後取敢へず兵力を集結し張新庄の確保を命ぜられた。本戰鬪間氏は擲彈筒分隊長として九月二十三日午後十時三十分行動を起し翌二十四日午前七時五十分中隊主力に在りて右翼に逐次增加する敵を制壓すべき命を受けたが距離測定正確にして最初より有效彈を出し第六彈發射時には早くも敵の一翼を混亂せしめ戰捷獲得の素因を與へた。

十月十五日山東省恩縣城を攻略後該地方の宣撫と治安維持を命ぜられたが當時邢王莊附近には多數の匪賊出沒し一般民衆も抗日意識旺盛であつた。それ故騎兵約一中隊に機關銃一分隊歩兵半小隊を配屬せしめて宣撫隊となし十月二十四日恩縣を出發し二泊三日の豫定を以て胡王莊蘇留莊方面へ出動せしめた。氏は歩兵隊第四分隊長として此一隊に參加し同日午後官莊に達し至嚴なる警戒裡に宿營に就いた。二十五日午前零時頃附近に銃聲を聞くや小隊命令に依り戰備を整へ午前五時頃には分隊員を擲彈筒の射擊位置に就かしめ同二十分には北方より下士哨前に攻擊し來れる敵を射擊中であつたが更に其東方よりも敵彈を受くるに至り下士哨の後退を收容した。氏は豫め周到に射擊準備を整へて居たので克く敵の機先を制し多大なる損害を與へた。敵は辟易して北方を避け東方及西方に移動を初めた。此時氏は先きに配置しありし警戒兵の位置に更に一名を增派したが門を出づるや否や敵の狙擊を受け負傷せる爲氏自ら敵情を確めんと出門したる一刹那敵の狙擊を受け頭部に貫通銃創を受け壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。されど氏の周到適切なる射擊準備と適確機敏なる擲彈筒の射擊指揮は克く十數倍の敵を拒止し一歩も敵をして部落内に侵入せしむる事なく歩兵小隊をして容易に騎兵中隊主力の位置に集結せしむるを得た。

氏は慧眼にして能く戰機を看破し事前の準備亦周到且其射擊指揮適切にして每戰戰局に重大なる利益を獲得せしめた。實に是れ皇軍歩兵の精華にして天晴れ軍人の鑑鑑となすに足るものであつた。然るに衆戰の半ばにして此有爲精悍なる分隊長を喪へるは惜みても尙餘りある次第であつた。併し氏の功績は皇軍戰史に輝き其名は大和櫻と謳はれ其英靈は永世に生き尙も皇國並に一家の守護確として尊き加護を與へる事であらう。

氏は昭和十二年十月一日歩兵伍長に任官したが更に戰死の日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並功六級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍工兵軍曹勳七等功六級　高崎勝藏

溺死の重傷を負ひながら部下を激勵突入せしむ

氏は茨城縣猿島郡長田村の人にして父を平一郎亡母をさいと云ひ大正四年五月九日に生れ高崎ちかの養子となり未だ獨

身であつた。資性孝心深く活潑にして氣概に富み進んで難局に當るの美風があつた。農に從事するや極力親の勞を減ぜんが爲め自ら耕し其日の豫定は無理にも完了せざれば決して休息しなかつた。昭和五年五月長田高等小學校を卒業し其後一年間國民中學會の通信教授を受け更に一年間書道墨池會に入會して斯道に精進し青年訓練所に於ては勤勉精勤章を授けられた。昭和十一年一月徴兵として水戸工兵大隊に入營下士官候補者となり同年十二月工兵學校に入校其素養試驗には全國下士官候補者百七名中第一位を占めた。

支那事變起るや昭和十二年八月末岩倉部隊第二中隊に屬し勇躍征途に就き十月一日工兵伍長に任官した。北支到着後屢次の戰鬪に第四小隊第二分隊長として參加したが九月十五、十六日珠璃村西曹莊附近の戰鬪に於ては拒馬河渡河の爲左作業區隊石川准尉の指揮に屬し第二渡場長として折疊舟二舟を指揮し渡河準備の爲危險を冒して渡河點を偵察して貴重なる報告を提出し且周到に準備を進め午後三時五十六分愈々其渡河を開始するや敵彈雨飛戰況慘烈を極め漕渡至難なる情況下に於て部下を叱咤激勵しつつ或は自ら水中に飛入りて舟を援助し缺員舟に對しては豫備員を迅速に補充する等渡河長として適切勇敢に活動し壯烈なる敵前渡河を成功せしめた。此武勳に對し所屬隊は時の軍司令官より感狀を附與せられた。次いで九月十七日より二十二日に亘り琢州南方地區の追擊に方りては琉璃河揚家宅附近の軍橋を修理し戰車及重砲を速かに進出せしめ九月二十二、二十三日大冊河畔黄村附近の戰鬪に於ては聯隊主力が二十二日夜半保定西南方鐵道線路の破壞を企圖するや敵包圍下の黄村を出發し更に敵陣地を突破し屢々敵の反擊を排除して進出を容易ならしめた。

更に十月五日より十二日に亘る臨漳及大名附近の戰鬪に於ては大名城西門爆破の爲破壞區隊長石川准尉の指揮に屬し第一破壞班長として其の準備間綿密周到なる爆藥の點檢並に爆破豫行を行ひ十一日午後三時四十分愈々破壞の爲前進を起すや敵彈熾烈を極めたが勇敢に班の先頭に立て前進し大名城北側兵營に到着して玆に直に爆破地點を偵察し而て爆破の爲班の位置を移動せんとせし時惜しくも敵に狙擊せられ左前胸部に貫貫銃創を受け其場に倒るるに至つた。斯くて衛生班に收容せられ手厚き看護を受けたるも其甲斐なく十三日の午後五時半惜しくも華北戰線の華と散つた。然れども破壞班は午後七時三十分多數の死傷を生ぜるも遂に爆破に成功し工兵の手によつて大名攻略一番乘りを敢行した。是れ氏の準備の周到と決死的行動の賜と謂ふべきである。

氏の戰場に臨むや率先勇敢に奮鬪せし事は將兵一同の敬服せし所であつた。十月三十日母校々長宛書面に「遺憾ながら未だ大した戰にも會へず今後幸に大戰に惠れたなら其時こそ決死の働きをして鄕土に花を咲かさんと思つて居ります」と氏義に拒馬河の敵前渡河に於て拔群の功を樹て所屬隊は感狀を附與せられしが氏は其功に滿足せず將來の活躍を待望して居た。果せる哉大名西門の爆破、氏が滿身の力を罩めて成功を確信したるに無念中途にして倒る。其の敵彈を受るや重傷にも屈せず戰友に向つて「なんだ金子已れにかまつて居たら敵にやられてしもうじやないか已れにはかまわず突擊を」と大聲に叱呼し身は起つ能はざるに至れるもこの氣魄こそ秋霜烈日其意氣既に堅壘も眼中になく部下をして水火の中に驅る獅子吼ではあるまいか。寔に是れ皇軍工兵の眞價を發露して遺憾なしと云ふべきであつた。聖戰の中道にして斯の有爲精悍の士を喪ふ轉た愛惜の情に堪へずと雖も氏や決死活躍所期の如く鄕土に花を飾り其赫々たる武勳は天晴れ皇軍戰史に輝き其芳名や千載に語り傳へられ不滅の英魂は護國の神となり尙も皇軍並に一家の將來に尊き加護を垂るる事であらう。

氏は戰死の日工兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍砲兵軍曹勳七等功六級　高山實

上官の危急を救はんとして敵彈に斃る

氏は山口縣豐浦郡豐東村の人にして亡父を梅次郎母をコマと云ひ明治三十七年一月一日に生れ妻トキワとの間に長子芳子を擧げた。資性鋭敏才氣煥發友情に厚く公共に盡し母親には孝養至らざるなかつた。大正六年三月岡枝小學校高等科を卒業したが學業の成績は在校間第一位であつた。大正十四年徴兵として下關重砲兵聯隊に入營翌十五年伍長勤務上等兵となり滿期除隊となつた。

支那事變起るや昭和十二年七月末應召遠藤部隊に屬せられ八月中旬勇躍征途に就いた。北支上陸後は第二大隊本部附として九月七日より十四日に亘り永定河附近又十五日より二十日に亘る間は固安附近の戰鬪に參加し二十一日より二十四日に亘る保定附近の戰鬪に於ては惡路を冒して數日に亘る連續猛烈なる追擊に終始大隊觀測車を引率し千坊附近に於て敵砲擊の際は大隊の觀測掛として勇敢に任務を遂行し更に追擊に移るや再び惡路を冒して猛進し九月二十四日保定城攻擊に於ては同日午前中氏は平漢線堤防並木に登り猛烈なる敵火を冒し敵情捜索並に射彈觀測に從事し更に翌二十五日より十月十一日に亘る正定及滹沱河附近の戰鬪に於ては保定に留駐し兵器掛下士官として兵器の補修整備に任じ十月二日保定出發連日大隊觀測軍を誘導し七日には將校斥候の一員として里屋少尉の指揮に入り正定附近陣地偵察に任じ熱心斥候長を輔佐して克く其任を果し同日午後羅家莊攻擊には觀測掛下士官として服務し克く其任を全うした。次で翌日第一線に觀測所を推進せし際は器材を整理して觀測掛將校を輔佐し滹沱河の戰鬪に於ては正定城壁に觀測所を設備し敵情捜索に任じ熱誠機敏機宜に適する敵情を捕捉し以て觀測勤務を容易ならしめた。更に十月十二日より十一月四日に亘る彰德附近の戰鬪に於ては大隊の兵器整備補修に全力を盡し爾後の戰鬪に遺憾なからしめたが偶々辛庄に於て放列に敵襲を受くるや里屋少尉指揮下に小銃分隊を指揮して勇戰奮鬪遂に優勢なる敵を南方に敗走せしめた。

爾後王莊に陣地を變換し彰德の攻擊開始せらるゝや氏は觀測所にありて終始熱心且勇敢に觀測將校を輔佐して遺憾なからしめ殊に十一月四日には月岡中尉の指揮下に歩兵第一線の前進觀測所に前進し敵情捜索射彈觀測を輔佐し次いで連絡掛將校野崎少尉が第一線歩兵の前方城壁至近の距離に於て負傷するや氏は率先身を挺して之を救はんとした。然るに此時敵の狙擊を受け竟に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。

氏の戰場に在るや戰友と共に「我等軍人として最後の御奉公だ確かりやりませうやれよ」と勵まし合ひつゝ砲兵の最も重要なる兵器の整備に或は最も緊要なる觀測所の設備に任じ其第一線に立つや嘗て愛子に送りし書面中「お父さんも前後七回大戰爭をしましたが皆樣が御祈してくれる御蔭で敵の彈丸にも中りません敵の彈丸にも馴れて怖くもないようになりました雨の樣に飛び來る彈雨の中にても平氣で寢られるやうになりました」とあり自己の身は家族の祈りに守られて今日まで無事に任務を遂行し得たるを感謝し更に敵彈に慣れて毫も恐怖心なしと家族を安心せしめ而かも內心深く最後の御奉公を期しつゝ

彈雨の下に敵情捜索前進觀測の勤務等常に泰然沈着勇敢全力を傾倒して重砲兵の最大威力を發揮せし心境を味へば氏の豐なる情操と崇高なる責任觀念の横溢せるを察知するに難くない。殊に彰德に於ては上官負傷するや直に其の危急を救はんとし危險を冒して率先身を挺して竟に斃れし犧牲的精神の發露は天晴れ皇軍軍人の眞價を發揮して餘蘊なしと云ふべきである。あゝ參戰以來其赫々たる武勳は千載の下皇軍戰史に輝き不滅の英魂は護國の神となり尚も皇國の前途に加護を垂れ又一家の守護神として遺族殊に愛子等の將來に尊き佑助を與へ授ける事であらう。

氏は戰死の日砲兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級　中村陸三

攻撃精神旺盛勇敢なる分隊長

氏は廣島縣高田郡井原村の人にして父は宗太郎母は梅と云ひ大正三年二月一日に生れ未だ獨身であつた。資性純情にして一切の汚濁をも之を美化するの高き理想を有し事に當つては一意專念爲し遂げずんば已まざるの美質を有してゐた。昭和三年三月井原高等小學校を卒業し其後井原村役場に入り昭和六年以降同役場書記として勤務してゐた。村内模範青年として名聲嘖々青年團副長に選ばれ團の發展に盡瘁してゐた。昭和九年十二月徴兵として龍山歩兵聯隊に入營下士官候補者として採用せられ翌十年十一月豐橋教導學校に入校良好の成績を以て同校を卒業同十一年十一月歩兵伍長に任官した。

支那事變起るや昭和十二年七月十六日森本部隊深野中隊に屬し勇躍征途に就いた。北支到着後天津、豐台、黄村、郎坊長辛店等の地域を東奔西走し或は警備に或は連絡に或は殲敵掃蕩等に任じ殊に七月二十八日は内苑の戰鬪に參加し勇戰奮鬪克く其任を完うした。氏が戰地より累次家郷に寄せたる書面中（原文を簡約にす）兩親に宛て「人は一代名は末代肉彈で戰ひ〳〵て敵を蹴散らし九段の華と散ります」弟に宛てゝは「お前も今年徴兵檢査で甲種合格とは幸だ。僕が戰死したら仇を討つてくれ此激戰は肉彈で行かねば落城せぬと覺悟してゐる白木の箱で歸る戰死せば靖國神社だ神だと思ふて喜んでゐる。お前と遭ふのは靖國神社だ待つて居る早く〳〵僕の所に來い」と萬死に一生をも期せざりし決意の程を窺はるゝのである。又郷土の青年學校生徒に宛てゝは「自ら進んで所謂積極的に物事を爲し人を使はんとせばよく人に使はるゝことが必要である」と諭し上の命ずる所水火尚辭せず進んで死地に赴かんとする心構への歴然たるものがあつた。

九月十五日望褚攻撃の爲費店站南方五百米の地點に達するや木村將校斥候の一員となり勇敢剛毅斥候長を輔佐して敵情捜索に努め有利なる報告を齎して其任務を完ふした。九月十六日望褚の攻撃に方りては右第一線たる第三小隊の分隊長として午前五時三十分圍壁に據る敵に對し攻撃を開始し勇猛果敢敵の背後に迫り多大の損害を與へて之を敗走せしめた。引續き費店鎮の敵を攻撃するや當初豫備隊たりしが驀て左第一線に加入し沈着剛膽彈丸雨飛の中を小隊の樞軸となり敵の左側背に迫り中隊主力の突撃を容易ならしめ且手榴彈を投擲して第一線トーチカを占領し附近陣地に據れる三百の敵を遁走するの已むなきに至らしめ續て第二線トーチカに對し突入すべく部下分隊を區處し將に突進せんとするや敵彈頭部を貫き昏倒せしが尚前進を連呼し部下を激勵しつゝありしも次第に意識不明となり再び起つ能はざる

に至り衛生隊員に收容せられ第四野戰病院に於て名譽の戰死を遂ぐるに至つた。

氏は何者にも辟易せざる精神力を有し鄕に在つては模範青年又其戰場に赴くや激戰を前に抱懷せる所信は家鄕に寄せたる文中眼々として流露されある通りであつた。果せる哉搜索に出でゝは斥候伍長の尊稱を擅にし又分隊を指揮するや砲聲殷々たる中に於ても氏の號令は戰線に徹し實に勇敢每戰陣頭に立ちて分隊を率ゐ敵の堅陣を片端より蹴散さずんば已まざるの概があつた。其敵彈に斃倒するも尙前進を連呼し身は斃れても尙勇躍第二トーチカを奪取せんとする氣魄を留めて居た。誠に壯烈鬼神を哭かしむるものがある。あゝ征戰幾何もなくして此忠勇の分隊長を喪ふ愛惜の情に堪えずと雖も所屬中隊は同日午後五時費店鎭東北角を占領し同地を確保するに至つた。是れ氏の忠勇義烈が其一素因を成せるもので其功績は皇軍戰史に牢記せらるべく其芳名は千載に語り傳へられ不滅の英魂は護國の神と仰がれ更に皇國並に一家の前途に限りなき加護を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日步兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し靑色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍砲兵軍曹勳七等功六級　長瀨唯義

溺死の重傷尙火砲及部下を思ふ

氏は高知縣高岡郡高岡町の人にして父を信喜母を以智叅母は國惠と云ひ大正四年九月三日に生れ未だ獨身であつた。資性溫順にして志操堅確且剛健であつた。昭和四年三月高岡高等小學校高等一年を終へて其後高岡町産業組合事務員として勤務してゐた。昭和十一年一月徵兵として善通寺山砲兵聯隊に入營し同年七月精勤章を附與せられ翌十二年八月伍長勤務上等兵を命ぜられた。

昭和十二年七月支那事變起るや八月永津部隊田中隊に屬せられ勇躍中支方面の征途に就き九月一日砲兵伍長に任官した。氏の戰地より家鄕に寄せたる書信中「彈丸に當つて死すとも病魔には決して斃れない心算です。私の活躍を御期待下さい。きつと御父さん達の御期待に副ふべき働きを致しますから」と中支上陸後九月四日より十月十日に亘る羅店鎭及月浦鎭附近の戰鬪に於ては田中中尉の指揮に屬し基準砲車分隊長として敵彈雨飛の中にありて沈着適切に部下を指揮し分隊の團結と戰力發揮に最大の努力を拂ひ常に分隊長の模範として終始してゐた。就中九月二十四日顏家屯東三宅の攻擊に際しては其部下の指揮的確にして終日の射擊に一點の支障なく精度良好なる射彈を出して第一線部隊の攻擊に大なる貢獻を爲した。

十月十一日より同月十九日に至る南翔北方地區の戰鬪に於ては同樣基準砲車分隊長として沈着克く正確なる射擊を繼續しありしが十月十九日日沒頃より敵砲兵特に其の迫擊砲は猛威を振ひ主として白沼、北陸宅　蘇家宅附近を猛射し逆襲の企圖明瞭なるものがあつた。依つて中隊は最も活動しつつありし陳巷附近の敵に對し午後八時三十分より陳宅西側の陣地に於て夜間射擊を實施せしが敵砲彈は益々激しく砲側に落下した。氏は之を意とせず砲側にありて銳意分隊の指揮に沒頭しあつたが其際偶々氏の直前に敵砲彈炸裂し瀕死の重傷を負ふに至つた。然るに氏は負傷の刹那「砲車に異狀はないか俺に構はず他の者を見てやつてくれ」と云ひつつ尙も分隊員を督勵し射擊を繼續せ

しめしが午後九時五分竟に名譽の戰死を遂ぐるに至つた。氏の遺書には「天皇陛下の爲我は笑つて昇天する思ひ殘す事更に無し」と血判にて記してあつた。

氏の家鄕に寄せたる書面中「私の武運長久を祈る前に部下二十三名と馬十一頭の武運長久を祈つて下さい」とあり氏の部下を率ゐる恩威並び行はれ分隊は宛も擧止一體每戰砲火の全威力を發揮し基準分隊に恥かしからぬ模範分隊であつた。殊に氏は征途に上るや遺書の如く、通信の如く、一身を君國に献げ全力を傾倒して家鄕の期待に背かざらんことを期し職責に邁進した。其斃るるも砲を念ひ、部下を思ひ、而かも尙屈せず射擊を繼續せんとして竟に瞑す。眞に皇軍砲兵精神を顯現して遺憾なしと謂ふべきであつた。氏今や亡しと雖も赫々の武勳と透徹せる責任觀念とは永く後世に傳へて範とすべく氏が不滅の英魂は護國の神と仰がれ尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るる事であらう。

氏は戰死の日砲兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級　諸岡正義

沈着戰機に投合して戰果を收む

氏は茨城縣稻敷郡古渡村の人にして父は坂本幸太郎母はちかと云ひ明治四十五年四月二十七日に生れ諸岡家の嬶養子となり養父を豐三郎養母をあきと云ふ。妻クニヨとの間には氏が戰歿後出生したる一男正義がある。資性溫順正直純情の人にして父母及び養父母に對し孝養忘りなかつた。昭和五年三月縣立江戸崎農學校を卒業し其後農業に從事してゐた。又青年團幹部在鄕軍人會古渡分會の役員として率先躬行、團及分會の發展の爲に盡瘁し鄕黨の信望厚かつた。昭和七年十二月水戸歩兵聯隊に入營、滿洲に出動して各地に轉戰し其功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を賜はつた。昭和十年動務演習召集の際成績優秀にして下士適任證書を附與せられた。

支那事變起るや昭和十二年八月二十二日應召し石黑部隊に編入歩兵伍長に任じ機關銃中隊に屬し同月二十七日勇躍征途に就いた。北支上陸後九月十二日より十六日に亘る永定河及拒馬河附近の戰鬪間は旅團及師團豫備に屬し其警戒に方り九月十六日所屬大隊が敵の退路遮斷の目的を以て拒馬河を渡河追擊中氏の分隊は松林店驛に於て西方に對し警戒しつつありしが午前四時頃敵の退却する列車の進入するを發見し獨斷陣地を變換して下車する敵に猛射を浴びせ敵を阻止した。此獨斷は頗る機宜に適せるものであつた。次いで九月二十一日大冊河畔石頭村附近に於ては午前二時行動を開始し泥濘膝を沒する濕地帶を數條の河川を踏破し午前四時小樓高地帶の敵陣地を奪取し同地を確保することとなつた。此の時氏の分隊は逆襲阻止の任務を受くるや間もなく大冊河西方より敵約三百名旗皷堂々逆襲して來た。氏は分隊をして直ちに猛射を浴びせしめたが小隊長傷つき射手三名も斃るるに至つた。氏は自ら銃を執り彈雨の間沈着正確なる射擊を以て敵に多大なる損害を與へ遂に敵の企圖を挫折せしめ此敵を擊退して陣地確保の任務を全うした。

十月十二日氏の中隊は第一線となり氏は猛村西北方無名部落にありしが正午頃敵の一縱隊孟村より西南方に前進するを認め直ちに之に急襲火を浴びせた。敵は狼狽して一部は西南方一部は反轉して孟村に逸走せしが之と同時頃孟村の土壁よ

り集中火を受くるに至りし爲直に之に目標變換を爲し敵の銃眼を射撃して之を制壓し大隊の攻撃を容易ならしめた。轉て中隊の前進に方りては氏は前日の負傷にも屈せず分隊の先頭に立ちて前進し敵前二百米に陣地を占領せしが第十一中隊が前進中稍々右に偏せし爲敵前に於て斜行移動を爲し突撃準備を爲さんとするに方り敵の側防火現れて之を猛射せし爲同中隊の突撃困難となるや氏の分隊亦熾烈なる敵火を受けつつも之に屈せず此敵側防火器を猛射して制壓し協力中隊の突撃を容易ならしめた。然るに惜しいかな此時敵の一弾氏の腹部を貫き氏は壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。

氏の郷に在るや良民の先達となり出でて戰場に共分隊を率ゐるや率先躬行以て分隊を擧止一體たらしめ彈雨の下よく戰機を捉へ獨斷機宜の射撃を爲し殊に小樓に於ては銃側に兵なきに至るも屈せず自ら銃をとりて奮戰し、孟村に於ては負傷の痛手癒えざるも撓まず分隊を率ゐて陣頭に進む。かくの如きは職責の存する所身命を君國に献げて一死を鴻毛の輕きに措き斃れて後已む忠誠の人にして能くし得る所である。噫氏今や一身を献げ分隊長たるの職責を完うして斃る共赫々の武勳と透徹せる責任觀念とは永く後世に傳へて軍人龜鑑と仰がれ皇軍戰史を飾るであらう。氏が戰死の後遺兒生れ氏と同名の正義と命名された。氏が心身の延長は卽ち此愛兒必ずや愛兒の將來に加護照覽を垂るるべきは勿論尙も皇國及遺族の前途に佑助を垂るる事であらう。

氏は戰死の日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級　内村博

身二彈を受けながら死闘す

氏は長野縣更級郡川島村の人にして父を林之助母をたねと云ひ大正二年二月二十八日に生れ未だ獨身であつた。昭和二年三月日新尋常高等小學校を卒業し爾後農業に從事してゐた。昭和九年一月名古屋歩兵聯隊に入營同年四月滿洲に派遣せられ牡丹江省穆陵に駐屯警備に任じ且前後十回に亘り匪賊討伐をなし同十一年一月内地に歸還歩兵伍長に任官し尙滿洲派遣中の功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を賜はつた。除隊後は長野縣巡査を拜命し巡査練習所を首席にて卒業其後松本警察署勤務を命ぜられ精勤してゐた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召遠山部隊に屬し勇躍征途に就いた。而して北支に上陸し九月十六日南泊の戰闘に際しては主として警戒捜索に任じ同月十七、十八日大石橋附近の戰闘に於ては十八日午前二時豪雨を利用して逆襲し來れる敵に對し奮戰克く戰ひ遂に之を撃退し續いて平漢線西側地區の追撃戰に參加した。

九月二十一日大冊河畔黄村の攻撃には氏の所屬中村機關銃小隊は第一中隊に協力を命ぜられ正午該中隊の左翼に進出した。此の時氏は自己分隊を以て我が前進を特に妨害せる敵の掩蓋機關銃に猛射を浴びせ以て中隊の攻撃を容易ならしめ又數回に亘る敵の逆襲に對し沈着適切なる指揮を以て敵に多大の損害を與へて之を撃退するに至つた。然るに多數の兵力を擁する敵は更に共兵力を增加して重ねて逆襲し來り加之之れと同時に左前方至近の距離より掩蓋陣地に據れる敵機關銃は我正面に對し猛火を注ぎ來り爲に中隊は一時苦戰に陷つた。當時氏の分隊の陣地は此敵掩蓋機關銃を制壓するには稍々不適當なりしを以て氏は一層有利なる地點に陣地を變換し此敵を撲滅して以て中隊

の困難なる戰局を打開せんと欲し分隊長以下擧止一體となり敵彈雨霰の如く飛來る中を匍匐前進し機關銃を目的地に推進して猛烈に射擊を開始した。然るに此の時飛來せる敵の一彈は惜しくも氏の左胸部を連續二發も貫通し竟に其場に斃るゝに至つた。併し此時中隊は戰況愈々急迫を告げ其正面の一部は敵に肉薄して白兵戰を交ふるに至り最早一刻も猶豫すべからざる危機なりしを以て氏は敢然重傷に屈することなく率先部下を激勵しつゝ分隊を指揮し遂に友軍に危害を與へつゝありし敵機關銃を撲滅し中隊をして敵中に突入せしむることを得た。續いて中隊の陣内戰を支援すべく前進を起したが其刹那又もや敵砲彈の爲數ヶ所に破片創を受け竟に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。

氏の戰ふや率先陣頭に立ちて分隊を率ひ常に擧止一體分隊の機關銃威力を最高度に發揮した。殊に協力部隊の戰機を看破し其苦境を見るや一彈と雖も有効なる射擊を加へんとし身の危險を忘れて陣地を變換し尙敵が暴威を逞うするや身は血潮に染まるも屈せず任務の爲に奮鬪した。其壯烈眞に鬼神を哭かしむるものがあつた。如斯其職務に忠誠にして斃れても尙已まざりしは實に氏の偉大なる靈力の致す所唯々感嘆の外はない。征戰幾何もなくして此の忠良なる分隊長を喪ふ誠に惜みても尙餘ありと謂ふべきである。然かし氏や死鬪を續け見事機關銃分隊長たるの職分を完うして斃る。死して悔なしと謂ふべきである。其赫々の武勳は天晴れ皇軍戰史に鄰き其の芳名は永く後世に傳へて以て鑑とすべく氏の英魂は護國の神と仰がれ又皇國の將來並に一家の前途に尊き佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級　黑崎正雄

重傷を負ひながら寡兵克く奮鬪す

氏は栃木縣芳賀郡南高根澤村の人にして父を幸一亡母をイシと云ひ大正三年五月一日に生れ妻ハマとの間に一子幸子がある。資性活潑にして情に厚かつた。昭和七年三月縣立眞岡農學校を卒業昭和十年一月徴兵として宇都宮歩兵聯隊に入營成績優秀にして同年十二月伍長勤務上等兵を命ぜられた。

支那事變起るや昭和十二年八月十八日應召坂西部隊に屬し勇躍征途に就き九月八日歩兵伍長に任官した。

北支上陸後九月十四日永定河畔胡林南方地區に於て戰鬪開始せらるゝや氏は中隊の右第一線たる第二小隊の第三分隊長として沈着剛膽克く分隊を提げ一意任務の達成に邁進し中隊をして堅固なる第一陣地を神速に奪取することを得しめた。

同日胡林南方地區の戰鬪後追擊に方り柏村部落に於て氏は中隊長より永定河に於て斃れし死傷者を收容し中隊に追及すべき特別任務を授けられ午後四時中隊と別れて該地を出發した。其任に就くやよく部下を督勵し十五日正午任務を完全に遂行し直ちに中隊に復歸すべく急行軍にて進發せしが北支の曠野は渺茫千里進路明ならず不知不識方向を誤り漸く十六日午前十時駱駝灣部落を距る僅かに二十米まで近接した。其時突如砲を有する六百の敵より猛射を受くるに至つた。分隊は直ちに應戰恰も來合せる第八中隊の中里曹長の指揮に入り部下を督勵して奮戰せしが我は寡兵なるに敵は優勢なりしを以て忽ち其包圍する所となり全員決死奮鬪最早彈藥も盡き最後の突擊を爲さんとするに當り不幸敵の一彈は氏の脚部を貫通し其場に倒るゝに至つた。併し氏は身に重傷を負ふも圖囊内に重要書類のあることを忘れなかつた。而かも是れまでなり

と覺悟し部下に其書類を交付し最後の一戰を試むべく尙も猛然起ちて分隊を指揮せんとせしに又もや一彈腰部を貫通し無念の一語を殘して壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。分隊は戰死二名負傷五名を出し殘員九名となりしも幸に師團の急援隊到着し交戰二時間の後此敵を擊退することを得た。

氏の分隊を指揮するや沈着剛膽突如大敵と遭遇するも周章てず驚かず其重傷を負ふて起たざるに至り尙且重要書類の處理を忘れず「大敵たりとも懼れず」の　聖訓を拳々服膺死期迫るも膽に銘じて奮戰を續けし如き眞に大勇の人と云ふべきである。氏聖戰幾何もなくして斃れ其無念や想察するに難からずと雖も偶々獨立分隊長として存分の手腕を發揮し而かも相手として不足なき大敵と長時に亘り力鬪し幸に增援隊を得て當面の頑敵を屠り玆に第一期作戰に尊き礎石となりし赫々たる武勳は皇軍戰史に牢記せられ其芳名は永く後世に傳へて以て鑑とすべく氏が英魂は護國の神と仰がれ尙も皇國並に一家特に愛子の將來に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級　松下好三郎

勇敢精鋭なる分隊長

氏は鳥取縣西伯郡上道村の人にして父を傳一母をあきと稱し明治四十三年十月十三日を以て生れ妻ヨネ子との間に長男勇夫を擧げた。大正十三年三月上道村小學校を卒業し次で鳥取縣立倉吉農學校に入學昭和二年三月同校を了へ更に五年四月同縣立青年學校教員養成所に入り六年三月卒業の上西伯郡渡尋常高等小學校訓導に任ぜられた。斯くて七年一月徵兵として歩兵第六十三聯隊に入營し同年四月滿洲事變に出動歩兵上等兵となり八年四月內地に歸還翌五月陸軍伍長に任ぜられ滿期除隊となり歸鄕後直ちに東伯郡穴鴨尋常小學校訓導に任ぜられ九年三月西伯郡境尋常高等小學校訓導に轉任し益々地方育英の事に身を委ねて精進しつつあつた。氏は責性直情徑行責任觀念强く勤勉努力の士で小學校奉職中も敎授の方法手段等を工夫し指導懇切熱心絕えて倦むことなく「年中無休」との綽名を附せられた程であつた。而かも家庭に在つては父母に仕へて至孝弟妹をいたわり家庭頗る圓滿であつた。

昭和十二年七月支那事變勃發するや氏は間もなく應召輜榮部隊に屬し勇躍征途に就いた。斯くて愈々北支に到着するや輸送警備其他諸種の勤務に寧日なく續いて休息の暇もなく八月二十五日より津浦沿線の戰鬪に參加した。然かし此時氏の中隊は大隊の豫備隊であつた爲花々しき奮戰にあづからなかつたが第二小隊の分隊長として大蘇附近孫門口附近、夏庄附近更に又燒窰盆附近の戰鬪には連日連夜危險勞苦を顧みず能く其の任を完うした。其の後氏の所屬隊は馬廠驛附近の殘敵を掃蕩し更に滄縣攻擊に際しては張家馮頭を確保守備した。次いで十月十一日より十五日に亘る平原附近の攻擊に當りては所屬隊は十三日正莊の敵陣地を攻擊した。當時氏の屬する河上小隊は中隊の豫備隊として前進したが途中左第一

線に增加を命ぜらるるや氏は分隊長として雨下する敵火の裡を克く部下を掌握して勇猛果敢に攻撃し遂に敵隊近く迫りて中隊が突撃を敢行するや氏も亦分隊を率ゐ勇敢に突撃した。然かし敵の鐵條網地雷等の爲此の突撃は遺憾にも頓挫したが中隊長以下不屈不撓更に一段の勇を鼓して再び突撃を敢行遂に頑敵を驅逐して敵陣を占領した。續いて黃河北岸掃蕩戰に際し所屬隊は十月十五日楊莊の敵を攻撃した。此の時も氏は第一線に分隊長として勇戰奮鬪し敵陣を突破して安仁街南側地迄に進出した。而し所屬隊は其夜正子を期し敵を夜襲することとなつた。氏は夜襲準備の爲連日連夜の疲勞も顧みず敵情地形殊に前進路の偵察を爲し夜襲決行上有益なる資料を小隊長に呈した。愈々正子となるや中隊は夜霧の下隊伍を亂さず一歩一歩潛行し途中敵の射撃を受くるも默々として潛行を續け敵陣地を距る約三十米に近接した。此時雲晴れ其の星明りに夢より醒めし敵は急驟の如く猛射を浴びせて來た。中隊長は躊躇すべき時にあらずと一擧突撃を號令した。鼓に中隊は怒濤の如く敵陣に突入紛戰亂鬪の白兵戰は展開せられた。當時氏は部下分隊を激勵しつつ共に突入し手榴彈の炸裂物凄き中に縱横無盡に格鬪したが惜しや其際氏は顏面に盲貫銃創を受け壯烈なる戰死を遂げた。時に十四日午前一時であつた。

噫、氏や人格玲瓏玉の如く其赤心の迸る所戰場に立つや率先垂範驚れて後猶已まざるの意氣を以て頑敵に對す。其勇敢なる態度は正に全隊の志氣を鼓舞し「壯烈松下軍曹」との軍歌だに出現を見るに至つた程である。適れ忠勇の士、氏の體驗を以て他日再び敎鞭を執らしむるに於ては蓋し幾多忠勇の士を養成したらんに安仁街の一戰に散華せしは眞に痛惜に堪へない。然れども氏の功績たるや天晴れ皇軍戰史に輝き其芳名は千古に語り傳へて後人を感化すべく其英靈亦不滅に生きて護國の神と仰がれ其靈德は尙も皇國並に一家殊に愛子の將來に尊き加護を垂るる事であらう。

氏は戰死の日歩兵軍曹に進められ次いで勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級　松本米二

豪膽機敏堅陣を突破す

氏は兵庫縣揖保郡網干町の人にして父を治良吉亡母をこめと云ひ大正三年六月一日に生れ未だ獨身であつた。資性敎厚にして孝悌信義の道を盡し鄕黨靑年の模範であつた。又一家の柱石としてよく家を整へ又在鄕軍人會網干分會の役員として分會の發展に盡瘁してゐた。昭和二年三月網干尋常小學校を卒業し其後生魚商に從事してゐた。昭和十年一月徵兵として姫路歩兵聯隊に入營成績優秀にして上等兵に進み翌十一年十一月善行證書及下士官適任證書を附與せられて歸休除隊した。

支那事變起るや昭和十二年七月三十日應召沼田部隊に編入せられ勇躍征途に就いた。北支上陸後八月十五日より九月十四日に亘る馬廠附近の戰鬪に際しては三間房附近の警備に任ぜられたが殆ど不眠不休精勵克く其任務を完うした。

九月十五日より滄州附近の戰鬪開始せらるるや氏は堀尾少佐の指揮する第二小隊に屬し二十四日所屬中隊が豆店南方の頑强なる敵陣地を攻撃するに方りては第一線たる第三小隊の擲彈筒分隊長として夜半の午前零時三十分より行動を起し

而かも夜間に拘はらず確實に部下分隊を掌握し常に其先頭に立ち遂次敵に近迫した。愈々敵陣地に肉薄し丈餘の水濠に遭過するや直ちに之に飛び込み部下を指揮して濠壁に足掛を作らしめ之を攀ぢ登つて對岸濠上に進出し機を失せず工兵の鐵條網破壞作業を援助し其突擊路完成するや速かに敵第一線陣地に突入、引續き果敢前進して第二線第三線と突破し次々に之を占領した。然るに氏は機敏にも敵が奪取せられたる陣地を奪回すべく逆襲の徴あるを察知し其の機先を制すべく分隊を率ひて之に向ひ前進せしが恰も敵は濠傳へに進み來りしを以て先づ其の先頭の一名を突如銃劍を揮つて刺殺せしに敵は不意に襲はれ其氣勢に怖れを爲し愴惶として退却した。其後引續き突進を繼續し午前六時三十分遂に張辛庄を占領するに至つた。依て占領地確保の爲分隊を指揮して散兵壕を構築しつつある際惜しくも胸部及背部に砲彈の破片創を受け壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。

氏は鄕黨模範の青年であり一家の柱石であつた。一家を背負ふて起つ責任觀は戰陣に立ちては分隊を率ひ勝敗を双肩に荷ふ上にも一貫してゐた。又生業に於て培はれたる澄刺たる元氣は戰場に臨みて は勇猛果敢の闘士として現はれた。水深丈餘の水濠に率先跳込める其勇氣、決死工兵隊の鐵條網破壞作業に協力せる敏活機宜に適せる射擊指揮、逆襲部隊に對處せる果斷等悉く是れ滅私奉公の大義の顯現といはねばならぬ。嘗征途幾何もなくして氏の如く忠誠勇敢の分隊長を喪ふ轉た愛惜の情に堪へざる所である。然れども氏が赫々の武勳と忠烈とは天晴れ皇軍戰史に輝き其芳名は永く後世に傳へて鑑とすべく其英靈は不滅に生きて護國の神と仰がれ又皇國竝に一家の前途に限りなき加護を垂るることであらう。

氏は戰死の日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級　福田茂治

猛烈なる敵彈下に傳令の重任を果たす

氏は鳥取縣日野郡石見村の人にして父を宮本定四郎亡母をたつと云ひ明治四十五年二月二十四日に生れ後福田家に婿養子となり妻熊子との間に美幸以下三人の愛兒がある。資性溫厚頭腦明晰進んで難局に當るの美風を有してゐた。大正十五年三月福塚小學校高等科を又昭和三年三月には農業補習學校を卒業し昭和八年一月青年訓練所の課程を修了した。此間終始一貫學業に精勵し他生の模範であり數度の表彰を受けた。又青年團支部長として支部の發展に盡瘁してゐた。昭和八年一月徴兵として松江歩兵聯隊に入營同年二月滿洲に派遣警備討伐に功を樹て勳八等に叙し白色桐葉章を賜はつた。同年十二月伍長勤務上等兵を命ぜられ翌九年四月善行證書下士官適任證書を授けられて歸休除隊となり五月內地に歸還し同年十一月歩兵伍長に任官した。

支那事變起るや昭和十二年七月二十七日應召福榮部隊に屬せられ勇躍征途に就いた。北支上陸後は八月二十四日獨流鎭の攻擊を始とし同月二十九、三十日二堡附近の、同月三十一日王口鎭の、九月三日より六日に亘りては東西子牙鎭附近の攻擊に中隊指揮班員として參加し彈雨の下小中大隊間或は砲兵との間を馳驅して中隊長の戰闘指導を輔佐し其使命を完うした。次いで九月十日東辛庄東南區に向ひ前進した。當時敵は我に數倍し迫擊砲重輕機關銃を以て掩蓋銃座より猛烈に射

拿し來り中隊の前進極めて困難の狀態となり夜を徹すること二夜、此間第一小隊は前方堤防上を占領し苦戰を重ね中隊主力は小河正面の敵と交戰中にして各方面共敵の逆襲を受くること數回に及び第一線小隊は其の都度之を擊退したるも戰場騷然として中隊長の指揮掌握頗る困難の狀態であつた。然るに氏は此間に處し指揮班員を督勵して中小隊間の連絡確保に努め中隊長の戰鬪指揮を容易ならしめつつありしが殊に第一小隊爾後の行動に關する中隊長命令の傳達を命ぜらるるや中小隊間の地區は敵彈雨霰と飛び來り危險極まりなかりしにも拘はらず敢然身を挺し彈雨を冒して小隊の位置に至り重要命令を傳達して中隊爾後の戰鬪を有利に進展せしむるを得た。

九月十五日南趙夫附近の攻擊に於ては中隊は敵の右側背より包圍攻擊すべく早朝より行動を開始せしが敵は迫擊砲重機關銃を猛射し頑強に抵抗し剩さへ陣地前の射界は清掃せられ火網内の攻擊前進容易ならず。薄暮となるや其の機を利用し敵に近迫し陣地の西北方二百米に達した。氏は此間彈雨を冒し絶へず上下の連絡に活躍しつつありしが殊に左小隊前進及爾後の戰鬪に關し中隊長の重要命令を傳達し指揮班に復歸するや敵の逆襲を受け果敢之を擊退せしが其際敵彈頭部を貫通し壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。

氏や鄕に在りては模範青年たり軍隊に入りては討伐の功を樹て滿洲の建國に寄與せし所勘くなかつた。更に今次征途に上るや選ばれて指揮班員となり常に難局に當りて中隊長の輔佐至らざるなく家を忘れ一身を君國に獻げて其職分に邁進す滅私奉公の人にして能くし得た所である。氏聖戰中途にして斃るると雖も赫々たる其武勳は天晴れ皇軍戰史に輝き其芳名は永く後世に傳へて以て鑑とすべく不滅の英魂は護國の神として仰がれ尙且家鄕の彌榮に加護を垂れて已まぬであらう。

氏は戰死の日步兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し靑色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍砲兵軍曹勳七等功六級　福原準平

分隊長として克く重砲最大威力を發揚して斃る

氏は愛知縣名古屋市東區赤塚町の人にして父を村瀨準次母をとみと云ひ明治四十三年二月二日に生れ福原家の養子となり養父を善藏養母をうめと云ひ妻しげとの間に修一以下三名の愛兒がある。資性溫良事に當り頗る熱心であつた。昭和三年三月名古屋中學校を卒業し其後養家に在りて營業に從事してゐたが昭和四年十二月三島重砲兵聯隊に入營した。

支那事變起るや昭和十二年九月十六日應召淺田部隊古川隊に編入せられ同月末勇躍征途に就いた。中支上陸後は古川隊の戰砲隊第三分隊長として戰鬪に參加した。特に十月五日劉家行東北側放列陣地に於て吉住部隊左翼隊の攻擊目標たる陸家橋西側陣地の砲擊に際しては分隊長として指揮掌握的確にして照準精度の向上に努力し遂に同陣地の核心たりし敵機關銃を見事に粉碎して之を中天に吹飛ばし續て翌六日同陣地後方クリークの南岸陣地に對して射擊を開始するや前日に劣らざる精度を以て破壞射擊を實施し敵を震駭せしめた。之を目擊しつつありし步兵は彈着の都度萬歲を唱へて歡喜した。敵が難攻不落の堅陣と誇り數日間に亘り頑强に抵抗し以て我第一線步兵の近迫を許さざりし陣地も我が砲擊に今や色を失ひ浮足立ちし狀況を見て取りし我が步兵は勇氣百倍一擧に突擊して其の一角を奪取し爾後の作戰に至大なる利益を收むるを得た。更に十月十日以後同月十五日に至る間陸家橋附近の放列陣地に於ては敵彈殊に迫擊砲彈頻りに放列附近に落下炸裂

せるも氏は常に冷靜部下の志氣を鼓舞し堺石橋海宅黄宅陳宅等に對し毎日適切有効なる射彈を注ぎ以て敵の堅陣を逐次に破壞した。次いで八房宅東側に放列陣地を占むるや特に左前方黄宅の敵は連日の我猛攻撃に耐へ小癪にも日夜我陣地を側射し而かも近く八百米の所にあつて我を妨害し加之迫擊砲彈は毎日放列附近に落下し爲に多數の死傷者を生ずるに至つたが氏は依然として泰然自若陳宅朱宅葛家神樓宅黄宅蘇家宅湖里宅馬家宅等に對し有効なる命中彈を送り逐次第一線歩兵の陣地奪取に大なる貢献を爲した。

斯くて二十三日馬橋橋宅に對し破甲榴彈八二發榴散彈一八發を以て猛烈に破壞並に制壓射撃を實施し同部落に對し殲滅的効果を擧げ爾後の戰鬪を準備して居た所其の際氏は敵小銃彈の爲惜しくも胸部に貫通銃創を蒙り壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。

氏は分隊を率ゐるや率先勇奮指揮的確擧止一體と爲し分隊の戰力發揮に最大の努力を拂ひ野戰重砲の最大威力を發揚して遺憾なかつた。殊に氏の分隊は常に精度良好中隊の模範分隊として隊長より賞詞を受けてゐた。かくの如きは職責の存する所家を忘れ身を棄て斃れて後已む氏の如き人にして克くし得る所である。征戰中途にして斯の有爲精鋭なる分隊長を喪ひしは轉た痛惜に堪へず と雖氏が江南戰線に於て克く軍の骨幹たる皇軍砲兵の全威力を發揚し以て戰捷の途を開拓せる其赫々の武勳は天晴れ皇軍戰史を飾り其芳名は軍人の龜鑑として千載に謳はれ不滅の英魂は護國の神と仰がれ尚も皇猷を扶翼し奉り又一家特に愛子の守護神として其前途に尊き加護を垂るる事であらう。

氏は戰死の日砲兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍輜重兵軍曹勳七等功六級　寺村集藏

輜重として優勢なる敵の奇襲に自ら自動車を燒却して斃る

氏は東京市神田區神保町の人にして亡父は本橋七藏母はすてと云ひ明治三十七年五月二十八日に生れ寺村家の養子となり養父を豐次郎養母をしまと云ひ妻ふみ子との間に集一以下五人の愛兒を擧げた。資性溫厚にして孝心深く又義俠心に富み己を忘れて人を助くる美風を有し又百折不撓遂げずんば息まざるの氣慨を持て居た。大正八年三月神田區一ッ橋小學校高等科を卒業し其後專ら養父の家業に精勵してゐた。大正十四年一月徴兵として近衛輜重兵大隊に入營し除隊後は特に在鄕軍人分會副班長として勤續十餘年分會發展の爲には軍人會狂と言はるゝまで熱中し多大の貢献を爲した。

支那事變起るや昭和十二年七月二十七日應召大畠部隊矢島中隊に屬し勇躍征途に就いた。北支到着後八月十一日より同月三十一日に亘る間豐台北平南口楡林附近の次で九月一日より同月二十日に亘る間は南口懷來宜化附近の補給業務に從事し晝夜兼行不眠不休惡路を冒し險難を制し殘敵を掃蕩しつゝ北支の山野を馳驅し自動車隊本來の任務に向ひ邁進した。

九月二十一日宜化を出發同日蔚縣に着、彈藥糧秣を滿載し二十四日靈邱に向ひ出發夕刻靈邱南方約八里長城線附近に到着して三浦部隊に之を交付し其夜は小寨村に露營した。然るに此頃三浦部隊は激戰を續け刻々急を先ぐるに至りしを以て新鋭の歩兵を前線に增援の爲氏の中隊は至急歸還の上靈邱より其兵力を輸送し來るべき旨命令に接し二十五日午前九時兵站自動車新庄部隊本部矢島部隊本部第一第二第三小隊修理班の行軍序列を以て小寨村出發靈邱に向つた。此日昨夜來の豪